

鶴崎町遺跡群(三軒町)

～オアシス第一病院建設に伴う発掘調査報告書～

2005. 3

大分市教育委員会



調査区遠景（三軒町筋より御茶屋を望む）



1 トレンチ全景（幕末）



SK62-5（側面）



2 トレンチ全景（幕末）



SK62-5（底面）



2トレンチ全景 (18世紀中頃～)



SK110土層断面



SK110全景 (鍛冶関連廃棄土坑)



SK110出土フイゴ羽口



SK110出土碗形滓

序 文

本書は、平成15年度にオアシス第1病院建設に伴い実施した鶴崎町遺跡群（三軒町）の発掘調査報告書であります。

鶴崎町は、肥後藩の瀬戸内航路の拠点として慶長6年（1601）肥後藩主となった加藤清正が所領とし、細川氏に引き継がれた後も、その位置づけは変わることなく、熊本の川尻と並ぶ肥後藩の海の玄関口として、参勤交代や藩の用船をはじめとする多くの船舶が行き交う湊として発展しました。町は、御茶屋を中心に船頭町や加子町といった約14町筋をもつ城下町的な景観を示しており、肥後藩に公認された「五ヵ町」（熊本・八代・高瀬・川尻・高橋）に準じる「准町」として位置づけられていました。

調査を実施した三軒町は、鶴崎御茶屋から白嵩川（大野川）に向かう東西道路に沿った両側町で、横町及び国宗町筋を西側の町境とし、鶴崎町東の構口を東側の町境とします。町のほぼ中央部の今新町筋より伊予街道が合流し、構口の前、白嵩川の渡しを経て佐賀関に向かいます。

調査の結果、鶴崎三軒町の町屋構造に関する、18世紀中頃の鍛冶（小鍛冶）工房跡や、18世紀後半以降の短冊状に区画された町屋の建物跡群等々が確認され、肥後領鶴崎町の変遷を紐解く貴重な資料を得ることができました。

つきましては、本書が学術研究に寄与するとともに、文化財保護思想の高揚に一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり多大なるご配慮・ご協力を賜りました医療法人誠仁会並びに平倉建設（株）他関係各位に対しまして心から感謝申し上げますとともに、ご指導頂きました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成17年3月

大分市教育委員会

教育長 秦 政 博

例 言

1. 本書は平成15年度、大分市東鶴崎3丁目35・37・38・39・40において医療法人誠仁会（理事長 日野尚子）の委託を受け実施したオアシス第一病院建設に伴う鶴崎町遺跡群（三軒町）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、医療法人誠仁会及び工事施工責任者である平倉建設㈱の全面的な協力のもと大分市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成16年2月1日～3月26日の期間で実施し、遺物整理及び報告書の作成は、翌平成16年度に実施した。
4. 調査における遺構の実測・写真撮影は、秦さとみ・梅木信宏・小住武史・岩尾美保子・奥村義貴・河野史郎が行った。尚、調査区における基準点測量及びメッシュ杭の設置は平倉建設㈱及び柏地形社が、1トレンチの1/20遺構全体図及び2トレンチの完掘状況の1/20遺構全体図については(株)九州文化財リサーチが、空中写真については九州航空㈱がそれぞれ行った。
5. 本書における遺物の実測・製図作業は、菅藤直美・木村藍子・小野千恵美・西田裕子・河野が行った。尚、1トレンチ出土遺物の実測については雅企画㈱が行った。
6. 発掘調査及び報告書の作成に際して下記の方々のご指導・ご助言ご協力を頂いた。
田中祐介・吉田寛（大分県教育委員会）・藤本啓二（国東町役場）・近藤慎也（別府大学学生）・坪根伸也・中西武尚・長尾宇華・串京子・溝辺尚子（大分市教育委員会）
7. 本書の執筆・編集は河野が行った。

凡 例

1. 本書に用いた遺構略号は、SK：土坑、SE：井戸、SD：溝、SB：建物遺構、SJ：埋没遺構、：SX不明及びその他遺構、Pit：小穴を表している。
2. 遺構及び遺物の法量については、cmを用いている。
3. 遺構実測の基準及び方位は、国土座標（第Ⅱ座標系）を用いている*旧座標
4. 本書に用いた陶磁器の分類及び年代観は以下の文献による。
肥前陶磁器 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

目 次

I はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査経過	1
3. 調査組織	2
II 遺跡の立地と環境	3
1. 遺跡の立地と環境	3
2. 中世の鶴崎	3
3. 肥後藩の准町「鶴崎」	5
III 遺跡の調査	6
1. 調査区の設定と調査の概要	6
2. 遺構	7
3. 遺物	21
IV まとめ	51
1. 建物間取の復元	51
2. 石製フィゴ羽口について	54

挿 図 目 次

第1図 周辺主要遺跡分布図(1/20,000)	3	第2図 鶴崎小路絵図及び鶴崎略図	4
第3図 調査区位置図(1/5,000)	6	第4図 遺構略図(1/200)	7
第5図 SX44遺構実測図(1/20)	8	第6図 1T遺構全体図(1/80)	9
第7図 2T遺構全体図(1/80)	10	第8図 SK20遺物出土状況(1/40)	11
第9図 SX28遺構実測図(1/40)	11	第10図 SJ63-SK62-SK80遺構実測図(1/40)	12
第11図 SE60遺構実測図(1/40)	13	第12図 2T遺構全体図2(1/80)	14
第13図 SK88遺構実測図(1/40)	15	第14図 SK94・96・103・117遺構実測図(1/40)	16
第15図 SK114・115遺構実測図(1/40)	17	第16図 SK110遺構実測図(1/40)・SX220遺構実測図(1/20)	18
第17図 SE107遺構実測図(1/40)	19	第18図 SK105遺構実測図(1/40)	20
第19図 出土遺物実測図(1/4)1T整地層①	22	第20図 出土遺物実測図(1/4)1T整地層②	23
第21図 出土遺物実測図(1/4)1T整地層③	24	第22図 出土遺物実測図(1/4)1Tサブトレンチ	25
第23図 出土遺物実測図(1/4)2TSX17	27	第24図 出土遺物実測図(1/4)2TSK20	29
第25図 出土遺物実測図(1/4)2TSK20・SX28	30	第26図 出土遺物実測図(1/4)2TSX28・SX59	31
第27図 出土遺物実測図(1/4)2TSK13・15・42・61・SX66・960・963	32	第28図 出土遺物実測図(1/4)2TSX66・SK70	33
第29図 出土遺物実測図(1/4)2TSK70・77・78・79	34	第30図 出土遺物実測図(1/4)2TSX86・92・SK53	35
第31図 出土遺物実測図(1/4)2TSX34・89・91・93・100・109・SX98	36	第32図 出土遺物実測図(1/4)2TSK94・96・103・105・107	37
第33図 出土遺物実測図(1/4)2TSK107・110	38	第34図 出土遺物実測図(1/4)2TSK110・114・115	39
第35図 出土遺物実測図(1/4)2TSX01(覆土)・豊地層	40	第36図 出土遺物実測図(1/4)2T整地層-SK70混入品	41
第37図 旧井岡家住宅間取り	51	第38図 3間取の典型例(「古民家の基礎知識より」)	51
第39図 検出された建物の間取り復元図	53	第40図 SK110出土板形鉄滓	54

第41図 SK110出土鍛造羽片	54	第42図 輪形漆が溶着した羽口(SK110-6扉部を元に復元) ...	55
第43図 中世期の石製羽口出土事例(1/4)	55	第44図 鍛冶(小鍛冶)関連遺構概念図	57

表 目 次

表1	43	表2	44
表3	45	表4	46
表5	47	表6	48
表7	49	表8	50

写 真 図 版 目 次

巻頭カラー図版1	調査区遠景(三軒町筋より御茶屋を望む) 2トレンチ全景(幕末) SK62-5(側面)	1トレンチ全景(幕末) SK62-5(底面)
巻頭カラー図版2	2トレンチ全景(18世紀中頃～) SK110出土フイゴ羽口 SK110土層断面	SK110全景(鍛冶関連廃棄土坑) SK110出土輪形漆
写真図版1	1トレンチ西建物近景(西より) 1トレンチ・2トレンチ東建物遠景(北より)	1トレンチ西建物近景(南より)
写真図版2	1. SK44全景 2. SX59全景 3. SK20遺物出土状況 4. SX28検出状況 5. SX28石除去状況 6. SX28漆喰除去状況 7. SE60全景 8. SK62土層断面	
写真図版3	1. SK103全景 2. SK117全景 3. SK114全景 4. SK114土層断面 5. SK115全景 6. SK115土層断面 7. SX220全景 8. SE107全景	
写真図版4	1. 1T整地層43 2. 1T整地層49 3. 1Tサブトレンチ131 4. 1Tサブトレンチ42 5. SK17-1 6. SK20-5 7. SX28-2 8. SK62-6	
写真図版5	1. SX78-3 2. SK79-4 3. SK89-2 4. SX98-1 5. SK94-1 6. SK103-2 7. SK107-11 8. SX01-3	
写真図版6	1. 2T整地層-22 2. 2T整地層-29 3. 2T整地層-35 4. 2T整地層-35 5. 2T整地層-35 6. SK110-2 7. SK110出土フイゴ羽口 8. SK110出土輪形鉄漆	
写真図版7	1. SK110-8 2. SK110-8 3. SK110-8 4. SK110-6 5. SK110-9 6. SK114-1 7. SK115-1 8. SK115-2	

I はじめに

1. 調査に至る経過

鶴崎町遺跡群は、近世肥後藩領となった鶴崎町に関わる遺跡の総称で、その範囲は現在の鶴崎市街地とほぼ重複する形となっている。近年の都市部の再開発の波は、鶴崎市街地にも及び、当該地区における文化財照会件数は年々増加傾向にあった。

このような状況下、医療法人誠仁会（理事長 日野尚子）による大分市東鶴崎3丁目35・37・38・39・40における病院移転・建設が計画され、平成15年12月1日付けで大分市教育委員会文化財課に文化財有無の照会がなされた。当該地は鶴崎町の三軒町の一角にあたることから、大分市教育委員会文化財課は平成15年12月10日～12日の日程で埋蔵文化財確認調査を実施した。確認調査の結果、道路に面した部分より三軒町の町割りに関わる建物の区画施設（石組み）が確認され、それ以外の調査区からも井戸等が想定される大型の遺構が確認された。出土遺物に関しても、幕末期を中心とした肥前陶磁、瓦質土器埴埴、瓦等が出土した。

この調査結果を受け、医療法人誠仁会及び工事の施工責任者である平倉建設㈱、そして大分市教育委員会文化財課の3者は直ちに協議を行った。この協議の結果、①遺構保存を目的とした工法変更を行うこと、②工法変更して高遺構が破壊されることとなるエレベーターピット部分の本調査を行うこと、③遺構の残りが良好な間口部分については、幕末期と想定される第1面のみの確認調査とそれに伴う記録保存を行うことで合意にいたった。この協議に基づいた調査面積は、間口部分の確認調査箇所も含め200㎡となり、発掘調査の期間は平成15年度末まで、出土遺物等の整理及び報告書作成作業の期間については翌平成16年度となった。特に平成15年度中での発掘調査実施については、大分市の12月補正予算決定後ということで、市における調査費用の予算措置が不可能な状況であった。しかし病院の移転工事という入院患者を伴った緊急性の高い事業であるとの判断から、工事の施工責任者である平倉建設㈱と大分市教育委員会は協定書を締結し、平成15年度については、重機及び作業プレハブ等の借上・作業員の雇用・測量及び空中写真撮影等の委託業務・発掘作業に係る消耗品等・写真の現像・焼付け等を、現物供与の形で平倉建設㈱側が用意し、大分市教育委員会が主体となって発掘調査を行うこととなった。平成16年度については、改めて平倉建設㈱と大分市教育委員会による業務委託契約を締結し、通常形で報告書作成作業を行うこととなった。

平倉建設㈱と大分市教育委員会による協定書は、平成16年1月28日付けで締結され、発掘調査は平成16年2月1日～3月26日まで行われた。遺物整理及び報告書の作成は協定書に基づき平成16年4月16日付けでは業務委託契約を締結し、平成16年5月1日～平成17年3月31日まででそれぞれ行われた。

2. 調査経過

鶴崎町遺跡群の調査経過の略述は以下の通りである。

- 2月1日 調査区設定及び調査準備開始
- 2月3日 重機による表土剥ぎ及び作業員を入れての作業開始
- 2月4日 基準点・水準点測量及び調査区内のメッシュ杭設置
- 3月8日 1T・2T幕末期検出面の完掘及び写真撮影
- 3月9日 2Tの幕末期以前の調査開始
- 3月19日 1/20遺構全体図（委託）開始
- 3月23日 2T完掘及び全体空中写真撮影
- 3月24日 1/20遺構全体図（委託）終了
- 3月26日 機材等の撤収を行い調査を終了する。

尚、平倉建設隊による借上及び委託の主な実施日は、重機による表土剥ぎは2月3・4日、基準点・水準点測量・メッシュ杭の設置は2月4・5日、空中写真撮影は3月23日、1/20遺構全体図作成は3月19～24日である。

3. 調査組織

平成15年度（発掘調査）

調査主体	大分市教育委員会
調査責任者	秦 政博（大分市教育委員会 教育長）
事務局	帯刀 修一（大分市教育委員会 文化財課 課長） 王永 光洋（大分市教育委員会 文化財課 参事） 讃岐 和夫（大分市教育委員会 文化財課 課長補佐兼係長） 久多羅木明（大分市教育委員会 文化財課 係長） 平野 勝敏（大分市教育委員会 文化財課 主査） 三浦 亜紀（大分市教育委員会 文化財課 主事）
調査員	河野 史郎（大分市教育委員会 文化財課 技師） 奥村 義貴（大分市教育委員会 文化財課 嘱託） 秦 さとみ（大分市教育委員会 文化財課 嘱託） *試掘調査
作業員	麻生貴文・神田ムツ子・佐々木盛子・佐藤良江・秦忠次・杉谷玲子 林スミエ・御手洗幸子・渡邊ヒデア子・佐々木明暢

平成16年度（遺物整理及び発掘調査）

調査主体	大分市教育委員会
調査責任者	秦 政博（大分市教育委員会 教育長）
事務局	足立 昌人（大分市教育委員会 文化財課 課長） 王永 光洋（大分市教育委員会 文化財課 参事） 讃岐 和夫（大分市教育委員会 文化財課 課長補佐兼係長） 久多羅木明（大分市教育委員会 文化財課 係長） 平野 勝敏（大分市教育委員会 文化財課 主査） 安部 一成（大分市教育委員会 文化財課 主任） 三浦 亜紀（大分市教育委員会 文化財課 主事）～平成16年6月 加藤 キヌ（大分市教育委員会 文化財課 主任）平成16年7月～
調査員	河野 史郎（大分市教育委員会 文化財課 技師）
整理作業員	首藤 直美（大分市教育委員会 文化財課 臨時職員）
遺物洗浄作業員	三浦陽子・中野聖子

II 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地と環境

大分市の東部を北流する県下最大の河川である大野川は、その河口部分において発達した三角州の間を縫うように幾筋もの分流が流れている。この分流に囲まれた独立性の高い砂洲上に集落が営まれており、今は埋め立てられているが、大野川の河口部に見られる小中嶋、家島、徳島等地名はこうした地形形成に由来したものである。

今回の調査対象となる鶴崎町遺跡群の立地する砂洲についても、これらと同様の分流に囲まれた独立性の高い砂洲であり、東を白嵩川（大野川）、南から西を裏川（乙津川）が流れ、北側は、今は埋め立てられた前川が流れるといった状況であった。

こうした地形の形成過程の影響もあり、鶴崎の地の開発については南北長期を待たなければならなかった。しかしながら、鶴崎は瀬戸内海につながる別府湾に面したその立地と、豊後最大となる大野川の河口部という河川交通の集積地としての位置づけから、その成立段階から交通の要衝として位置づけがあったものと考えられる。

2. 中世の鶴崎

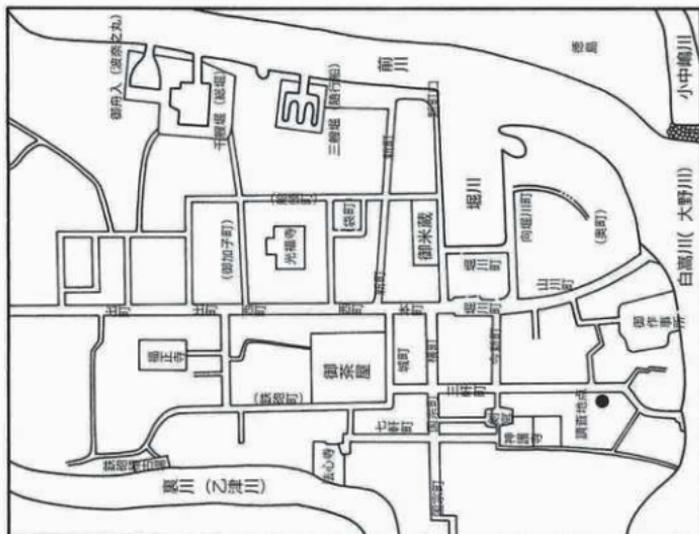
古文書における中世段階における鶴崎の記述は、天正17年（1589）7月19日に「つる崎村」宗次郎が伊勢神宮に参詣したことが記されている参宮帳が初見である。

この他の事象については後世の編纂物に詳しい。特に中世後期の鶴崎については、大友氏の庶流で重臣の吉岡氏が所領としており、大友家文書録の天正14年（1586）12月の条に、島津側の伊集院美作守・野村備中守・白浜周防守が、吉岡基橋の所領でありその母妙林尼が守る鶴崎を攻めたことが記されている。このことは、同じく大友家文書録所載の戸次・鶴崎戦争物語等、後世の編纂物に多く観ることができ、この時期鶴崎の地が重要な拠点であったことを物語っている。

一方考古学的な事象においても、大友氏の本拠である府内と同様の防衛ラインの引かれた鶴崎の地の重要性を垣間見せる状況が近年注目されている。即ち、この地を所領とした大友家の重臣吉岡氏は、平地に存在し居館の



第1図 周辺主要遺跡分布図 (1/20,000)



第2図 鶴崎小路絵図及び鶴崎略図

性格を有した「鶴崎城」と、乙津川を挟んだ西岸の鶴崎丘陵上に位置する城郭的な「千歳城」の二つの居館を有しており、こうした平地の居館と丘陵上の城郭が並立する状況が、府内における大友館と上原館の関係と対応するものとする指摘¹¹⁾である。(平地の「鶴崎城」の位置については、前述した豊臣戦時の鶴崎を巡る攻防の際に琵琶の瀬という場所に堀を掘り土塁を構え城の守りを固めたこととする記述から、近世の鶴崎御茶屋の場所とする説と、鶴崎御茶屋の北西、姫宮春日社周辺の「屋形」地名の残る一帯とする2説がある)

その後の鶴崎については、天正20年-文禄元年-(1592)2月11日の大友吉統兼々事書に国中の侍を「津留崎」に移すとするの一条がある。これは、豊臣秀吉による朝鮮出兵に関わる内容と考えられており、この時期においても鶴崎が重要な拠点となったことを物語っている

この他やや時代は古くなるが、大友家文書録に、天正16年(1588)6月21日に肥後半国を所領とした加藤清正が鶴崎に着き、1泊の後肥後に向けて出発したとの記述もみられ、この時期から、瀬戸内から鶴崎を経由して肥後に入る交通網が存在していたことをうかがわせる資料として注目されている。

注1. 坪根伸也 2004「守護大友氏と豊後府内(府中)の空間構造」『守護所・戦国城下町を考える』守護所シンポジウム@岐阜研究会

3. 肥後藩の准町「鶴崎」

近世鶴崎町の歴史は、慶長6年(1601)肥後藩主となった加藤清正が、肥後藩の瀬戸内航路の拠点として鶴崎の地を所領としたことに始まる。鶴崎を所領とした加藤清正は、この地を肥後藩の拠点となる港湾都市とするべく、宿泊所となる御茶屋の整備、湊となる堀川の開削、裏川(乙津川)分流の埋立、法心寺の建立を行った。実際の町割りとは2代忠広の元和4年(1618)に行われ、その後、加藤氏の改易に伴い肥後藩主が加藤氏から細川氏に引き継がれるが、その位置づけは変わらず、川尻と並ぶ肥後藩の海の玄関口として参勤交代や、藩の用務船が行き交う港湾都市として宝暦6年(1756)には宇土・佐敷と共に、当時肥後藩に公認された「五ヶ町」(熊本・八代・高瀬・川尻・高橋)に準じる「准町」に昇格している。

近世鶴崎町の中心的な位置づけとなったのは「鶴崎御茶屋」である。御茶屋は、本来前述した藩主の宿泊や休憩場所といった性格を有しており、肥後藩の豊後飛地の中にも佐賀関・野津原・久住にも置かれていたが、鶴崎御茶屋は、単なる藩主の宿泊所にとどまらず、様々な役所が置かれ肥後藩の豊後支所的な位置づけであった。鶴崎町(正式名称鶴崎小路町)は、武家町である船頭町・加子町・鉄砲町・七軒町・城町・奥町といった町筋と、町人町である出町、西町、新町、堀川町、横町、今新町、三軒町(三間町)、国宗町といった町筋が存在し、全体に鶴崎御茶屋を中心とした城下町的な景観を呈していた。

鶴崎町には、町のほぼ中央に位置する「鶴崎御茶屋」を起点に、本町・西町・出町を通して熊本へ向かう「肥後街道」、堀川町・今新町・三軒町を通して佐賀関へ向かう「伊予街道」、本町・横町・国宗町を通して竹田・臼杵方面へ向かう街道の3つの街道が通っていた。更にその北東部、前川の沿った一帯には、「御舟入」(藩主の御座船を繋留)、「三艘堀」(随行船を繋留)、「千艘堀」(一般の船を繋留)、「堀川」(加藤清正による最初に掘られた舟入)といった舟入群が存在し、大野川河口部における河川交通の集積地でもあった。つまり、近世鶴崎町は、「陸」「海」「川」の3つの交通の要衝として条件を兼ね備えた都市であったといえよう。

ここで、調査が行われた「三軒町」(三間町)についてであるが、御茶屋から東に延びる東西道路沿いの両側町で、その西側の町境は横町及び国宗町となり、東側は鶴崎町の東の構口となる。町の中央やや西部からは前述した佐賀関へ向かう伊予街道となっており、今新町より、三軒町を抜け、構口、白崎川の渡しへと通じる。

調査が行われた地点は、町の東部、御作事所へ向かう小路との三差路付近となる。現在の三軒町周辺に残る間口が狭く奥行きのある短冊形の地割りの存在に加え、これに沿った建物の区画施設(石組み)が確認調査で検出されていたことから、当該地区における短冊形に区画された町屋の遺構群の検出が期待された。

Ⅲ 遺跡の調査

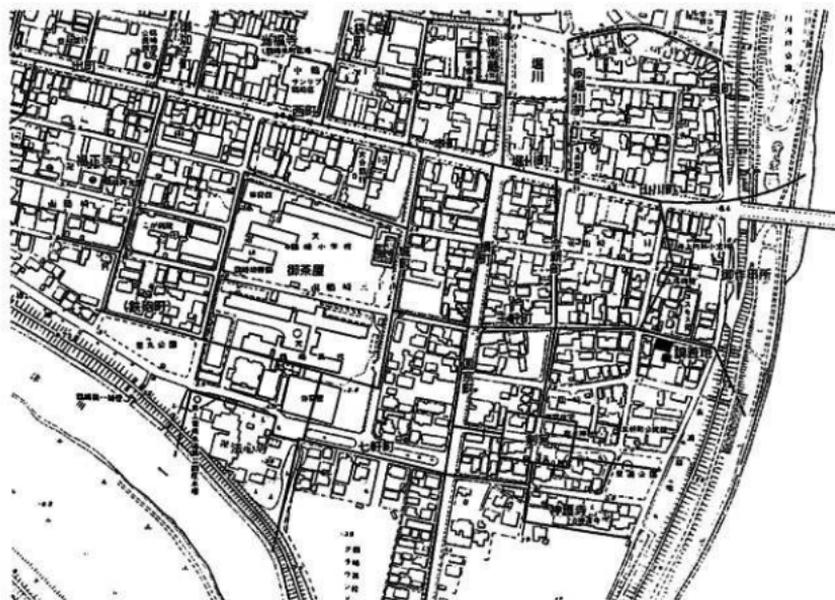
1. 調査区の設定と調査の概要

鶴崎町遺跡群（三軒町）の調査地点は、鶴崎小路絵図による三軒町の中央部、作事所へ向かう南北方向の小路が始まる三差路部分から数えて2及び3つ目の道路南側に面した区画に該当する。尚、鶴崎小路絵図には、それぞれの区画に人名や屋号等が記されているが現在その原因は散逸し所在が不明となっており、残念ながら手元にあるその複写物ではこうした名前まで判読できるものはない。

調査区は、道路に面した間口部分を1トレンチとし、1トレンチの南東、道路より16mほど奥に入った部分を2トレンチとして設定した。ちょうど、三軒町筋の南側に面した2軒分の区画が調査区に収まる形となっている。特に1トレンチについては、その試掘段階において、調査対象範囲の中でも旧建物の破壊を免れ、間口部分及びその区画施設の残存率が高い状況が確認されており、こうした遺構群の記録を目的に設定された調査区である。2トレンチについては、1トレンチの東側区画の続きとなり、間口部分と併せその全体像を示す遺構の検出が期待された。

調査の方法は、前述した調査経過のとおり、1トレンチについては幕末期の遺構面の確認とその記録にとどめ、エレベータービットによって遺構が完全に破壊される2トレンチについては、想定される複数遺構面全てを完掘し、記録する方法で行われた。グリッドは、調査区の北西隅を起点として東方向に1～5、南方向にA～Gの4mのグリッドを設定した。

調査の結果1トレンチからは、残存遺構から想定されるその間取りについては、若干の違いを有するものの、共に、間口部分の前面に店の間としての機能が想定される土間の空間を有する建物を2棟分が確認された。2ト



第3図 調査区位置図 (1/5,000)

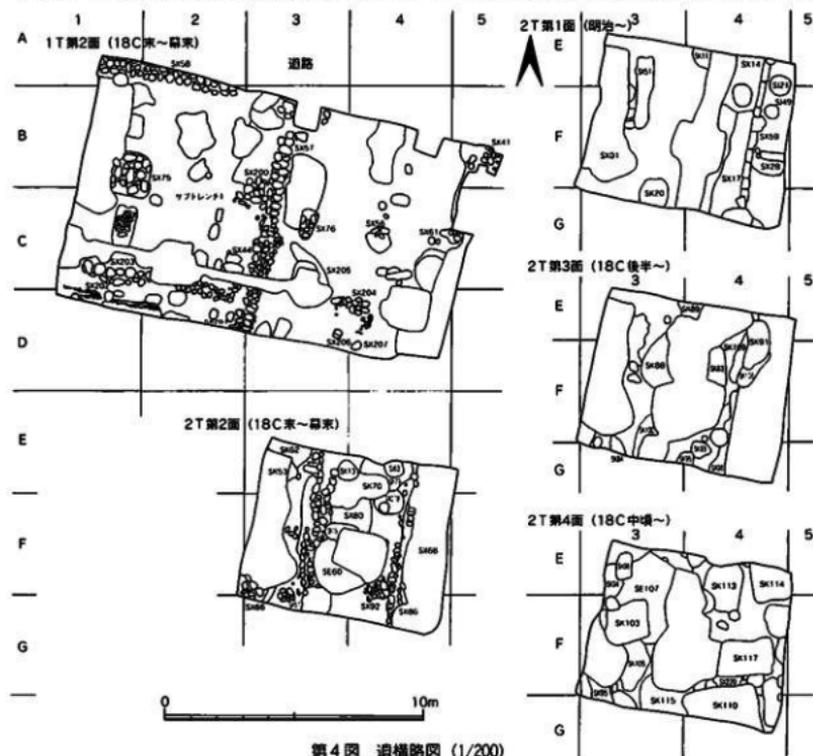
レンチからは、最上面で幕末期の区画を踏襲した明治期以降の建物基礎及び埋立遺構等が、1トレンチとの関連が指摘される第2面からは、建物基礎及び、排水溝を兼ねた区画施設、井戸跡等が、3面からは、18世紀後半に位置づけられる大型の土坑群が、4面からは、前述した区画を飛び越えて形成された鍛冶関連の廃棄土坑及び、井戸等がそれぞれ検出された。特に第2面については、東側建物の開口から土間を通じた奥の部分で井戸が確認される等、建物間取りに関する貴重な情報が得られた。第4面に、上面における商人の存在をうかがわせる短冊形の区画の状況から、一転して短冊形区画とは異なる区画で、鍛冶工房が想定される遺構群が検出され、その位置づけが注目されている。

出土遺物について特筆されるものは、幕末に位置づけられる焼継された染付の1群及び、焼継文字の確認された染付椀、4面で検出された鍛冶関連の廃棄土坑から出土した石製のフィグ羽口を始めとして、磁石、碗形洋、鍛造剥片等の鍛冶関連遺物である。特に、前者については、三軒町のこの区画に在住した住人に関する情報をもたらすものとして注目され、後者については、こうした区画成立以前に鍛冶職人の存在を示すと同時に、石製のフィグ羽口という特徴的な道具を有した職人の存在が注目されることである。

2. 遺構

1トレンチ (第6図)

1トレンチは、道路に面した開口部分に設定されたトレンチである。幕末期の遺構が確認された第1面の調査



第4図 遺構略図 (1/200)

を行っている。1トレンチからは、SX57とした調査区中央部で検出された南北方向の石組み遺構を境界に東西2棟の建物が検出されている。以下、SX57の詳細及び、2棟の建物が検出された遺構についてその詳細を記す。

SX57は、B-3、C-3、D-2・3グリッドで検出された南北に延びる石組み遺構である。20cm~40cmの扁平な川原石を使用した石組みで、幅60cm~100cm、現況での石組みの高さは20cmを測る。この石組みの断面については未調査であるが、おそらくは、暗渠状の溝になるものと考えられ、東西両建物が共有する施設となる。

西建物関連遺構

SX58・200・75・201・202は、建物礎石が想定される石組みである。

SX58は、A-1・2、B-2グリッドで検出された西建物の北面に道路に沿う形で東西方向に延びる石組みである。20cm~30cmを測る扁平な川原石を使用した石組みで、ほぼその上面がフラットに整えられている。SX200はC-3グリッドで検出された礎石状の集石である。120cm~130cmの平面隅丸方形の範囲に20cm~40cmの川原石が集められており、東側の一部については、SX57の石組みと一体化している。SX75は、B-1・2グリッドで検出された礎石状の集石である。150cm~170cmの平面隅丸方形の範囲に30cm~60cmの川原石が集められている。SX201はD-2グリッドで検出された礎石状の石である。30cm~40cmの川原石を使用している。SX202はD-1グリッドで検出された礎石状の石である。30cm~40cmの川原石を使用している。

SX203はC・D-1・2グリッドで検出された東西方向の石組みである。30cm~40cmの川原石を使用した石組みで、幅40cm~70cm、現況での高さは20cmを測る。

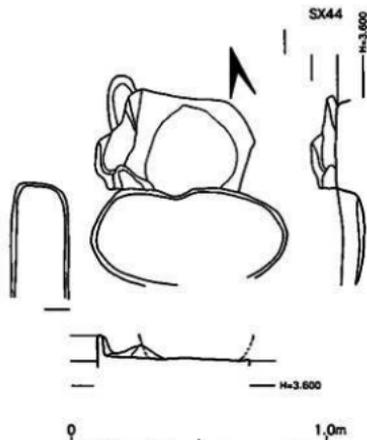
SX44はC-2グリッドで検出された焼土塊と小土坑からなる遺構である。遺構の北半の東西60cm、南北47cmを測る焼土塊に、南半の東西76cm、南北30cm、深さ10cmを測る土坑が付設する。西側にある東西22cm、南北45cmを測る土坑も関連する遺構の可能性が高い。焼土塊が立体的な構造を示すことに加え、この遺構の周辺から、焙烙が出土していることから竈状の性格が想定される遺構である。

高、B-2・C-2グリッドの床面は堅く踏みしめられた状況で、土間状空間が存在したことが想定されている。

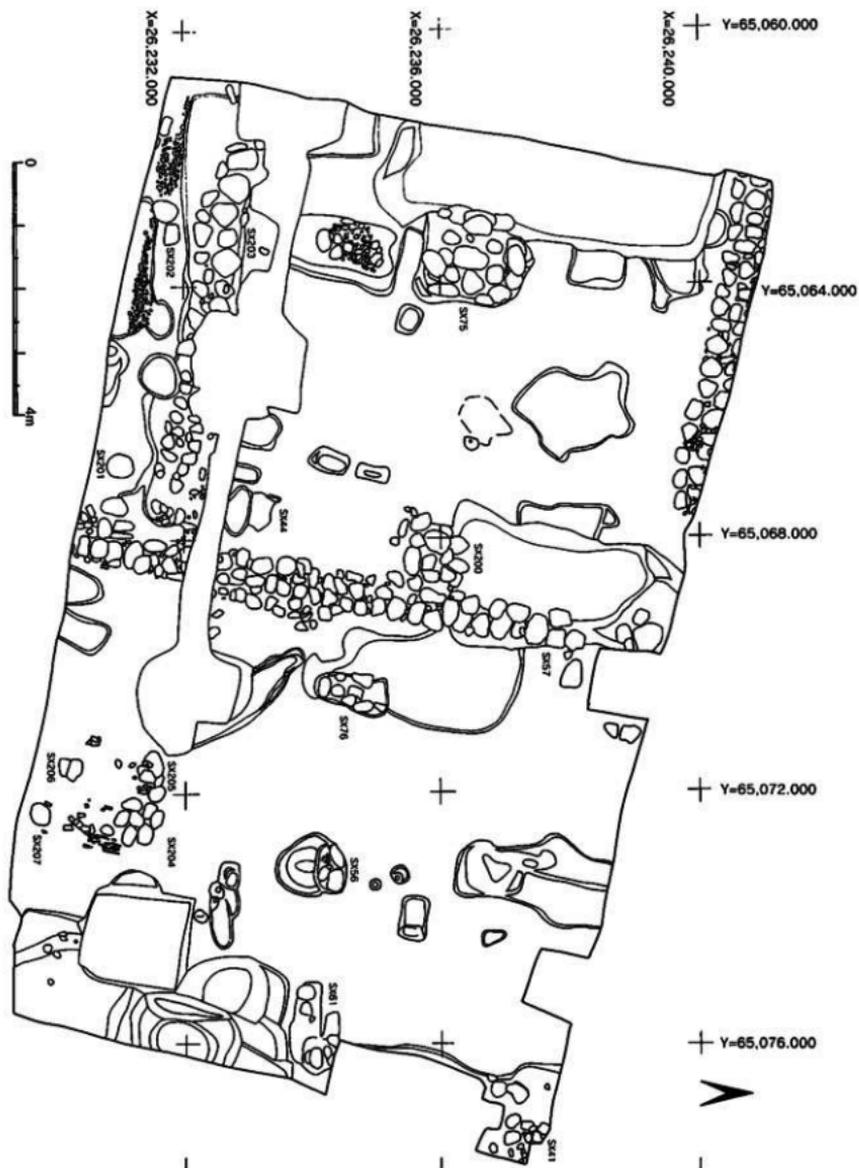
東建物関連遺構（1トレンチ）

SX76・56・61・204・205・206・207は、建物礎石が想定される石組みである。

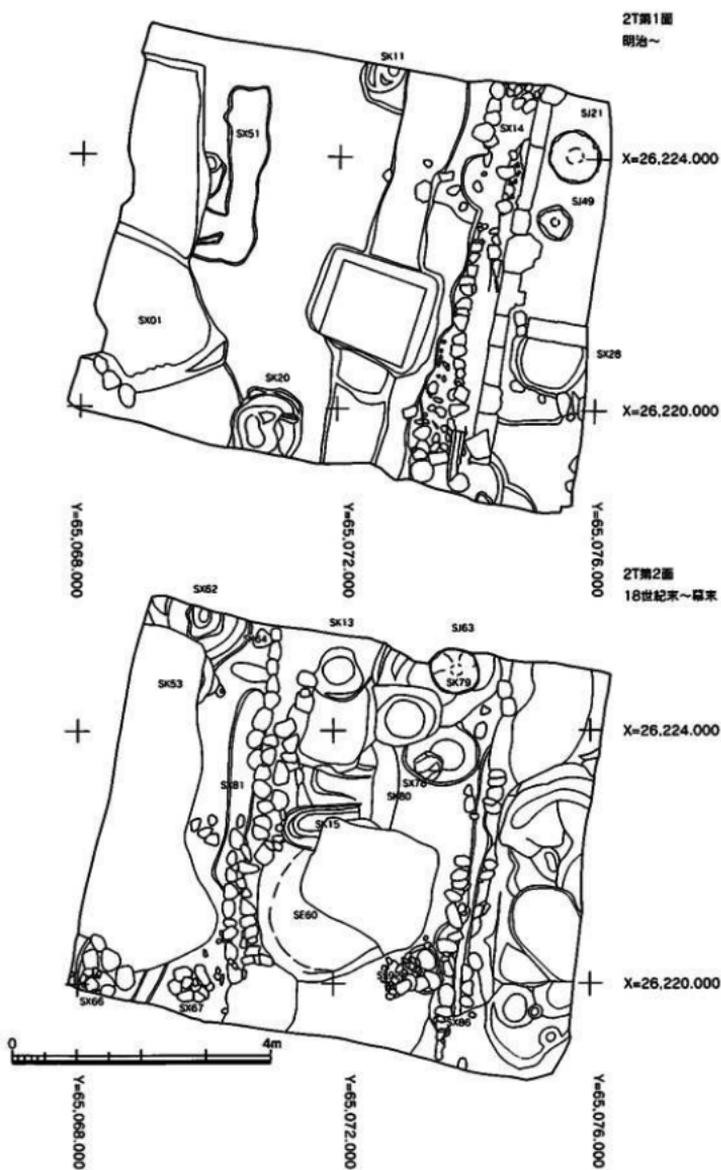
SX76は、C-3グリッドで検出された礎石状の集石である。60cm~110cmの平面隅丸方形の範囲に20cm~30cmの川原石が集められている。SX56は、C-4グリッドで検出された礎石状の集石である。80cm~90cmの平面隅丸方形の範囲に10cm~40cmの川原石が集められている。SX61は、C-4・5グリッドで検出された礎石状の集石である。70cm~90cmの平面隅丸方形の範囲に20cm~40cmの川原石が集められている。SX204は、D-3・4グリッドで検出された礎石状の集石である。70cm~90cmの平面隅丸方形の範囲に20cm~40cmの川原石が集められている。SX205は、D-3グリッドで検出された礎石状の集石である。30cm~40cmの平面隅丸方形の範囲に10cm~40cmの川原石が集められている。SX206は、D-3グリッドで検出された礎石状の石である。20cm~30



第5図 SX44遺構実測図 (1/20)



第6图 1T遺構全体図 (1/80)



第7圖 2F遺構全体圖 (1/80)

cmの川原石2個で構成されている。SX207は、D-4グリッドで検出された礎石状の石である。25cm~40cmの川原石を使用している。

SX41は、B-5グリッドで検出された石組み遺構である。建物基礎による擾乱を受けておりその詳細は不明であるが、おそらくは南北方向に延びるSX57と同様の遺構になると考えられる。

尚B-3・4、C-3・4グリッドの床面は堅く踏みしめられた状態で、土間状空間が存在したことが想定されている。

2トレンチ (第7・12図)

2トレンチでは、1~4面の複数面に渡る遺構面が検出されている。第1面は明治以降、2面は18世紀末~幕末期で、1トレンチの検出面に対応、3面は18世紀後半、4面は18世紀中頃~にそれぞれ位置づけられる。以下、それぞれの検出面毎に検出された主要遺構の概要を記す。

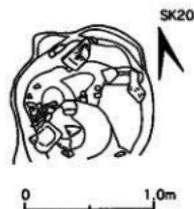
第1面検出遺構 (第8・9図)

SK20はF-3グリッドで検出される。径110cm、深さ30cmを測る平面円形の土坑である。出土遺物には、染付小坏・皿・蓋・瓶・酒器・植木鉢、陶器蓋・行平鍋・搦鉢、瓦質土器鉢等がある。

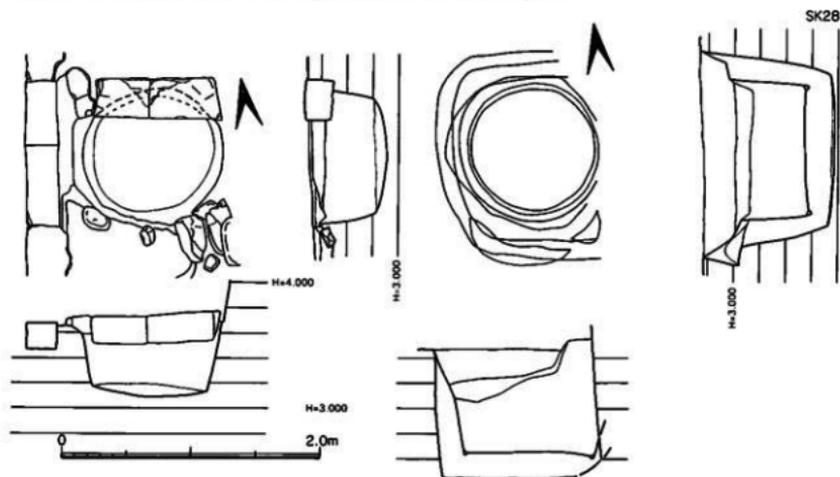
SX59は、E-G-4グリッドで検出された主に凝灰岩の切石を使用した建物基礎である。主軸方位はN-10°-Eを測り、その主軸方位と、石除去後に顔を出す区画を示す石組の存在から、江戸期以来の地割りを踏襲したものであることがわかる。出土遺物については、この石組みの堀方部分より下層遺構より掻上げられたと考えられる陶器碗・染付皿等がある。

SX17は、SX59を造る際の整地土である。遺物は、周辺遺構から掻上げられたものが大半で一見古い段階の遺構と考えられるが、その切合い関係等からこの段階の遺構群に位置づける。出土遺物には、施釉かわらけ、染付碗・皿・青磁香炉、陶器搦鉢、瓦質土器焼炉、瓦等がある。

SX28は、F-4グリッドで検出される。SX28にとりつく形で検出されたもので、古段階の樽状のものを埋設した遺構から、新段階のトイレ状遺構に変



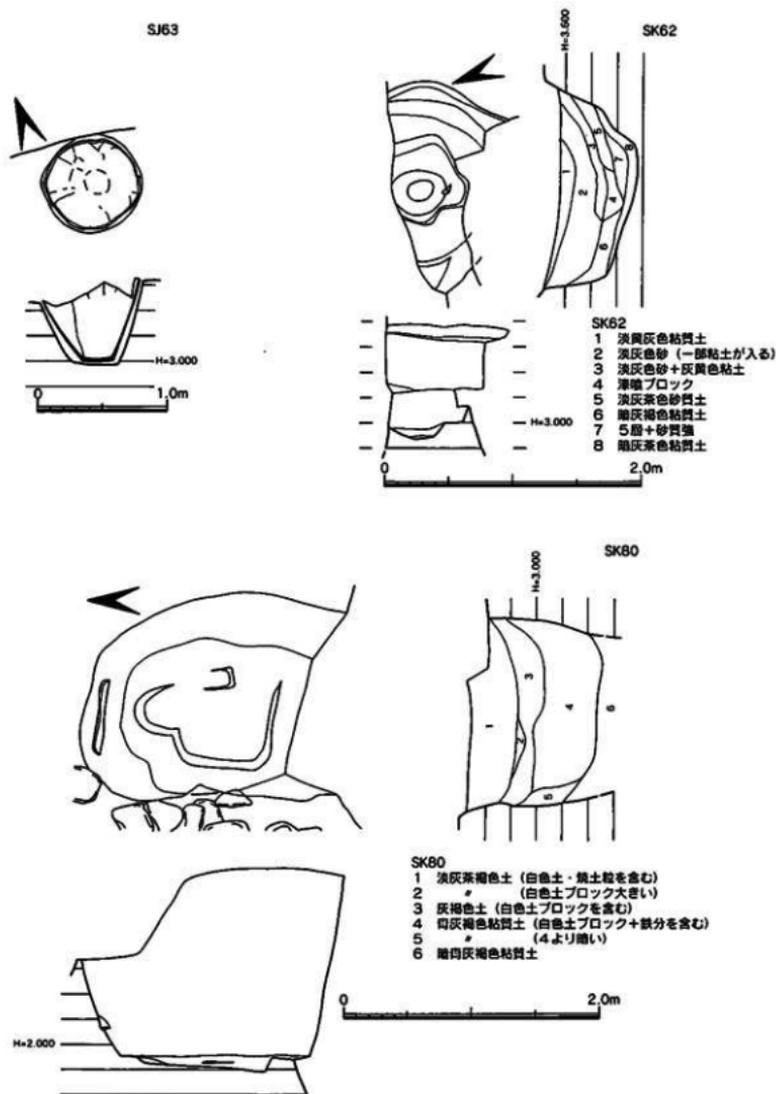
第8図 SK20遺物出土状況 (1/40)



第9図 SX28遺構実測図 (1/40)

遷することが確認された遺構である。

第9図右側は古段階のもので、樽の埋設部と裏込め部分に分けられる。樽の埋設部は、平面円形を呈し、径160cm、深さは確認される状況で、78cmを測る。その側面には複数の痕跡が数条確認され、底部も周辺部より若干深くなる状況が確認された。裏込め部は、径160cm、深さ100cmを測る。



第10図 SJ63・SK62・SK80遺構実測図（1/40）

第9図左は、新段階のもので、径110cm、深さ64cmを測る漆喰で固められた土坑状の堀方の北面に凝灰岩の切石を使った台が設けられている。特に遺構の西側部分については、漆喰によってSX59にとりつく形で検出されている。

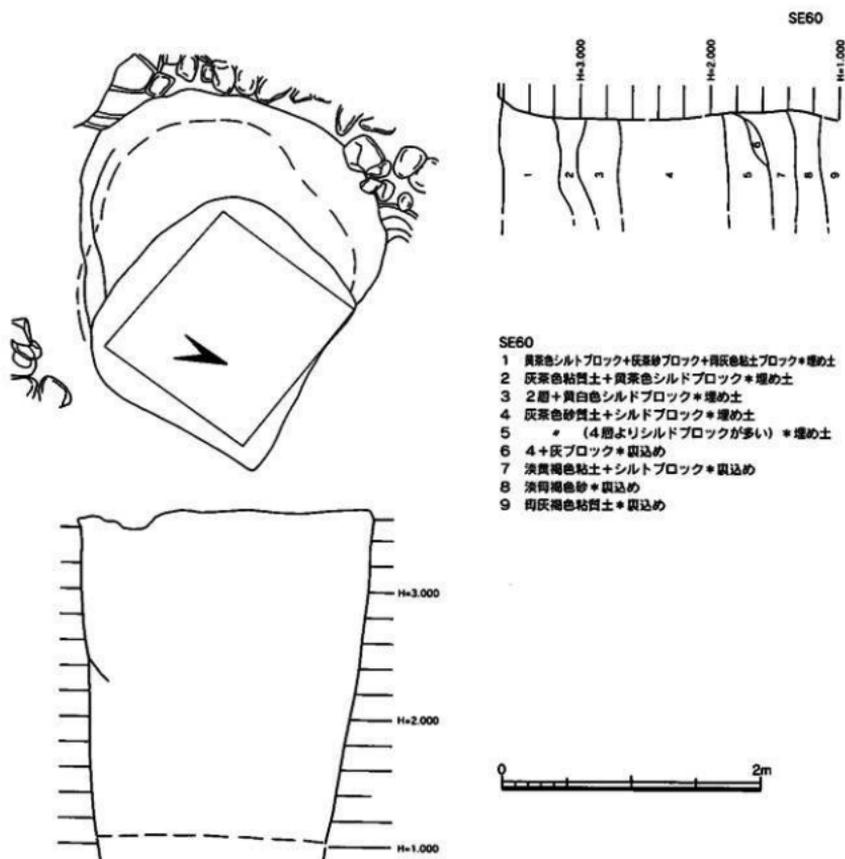
出土遺物については、古段階の遺物で染付碗・皿・蓋・レンゲ・酒器・青磁皿・陶器指鉢等がある。

第2面検出遺構 (第10・11図)

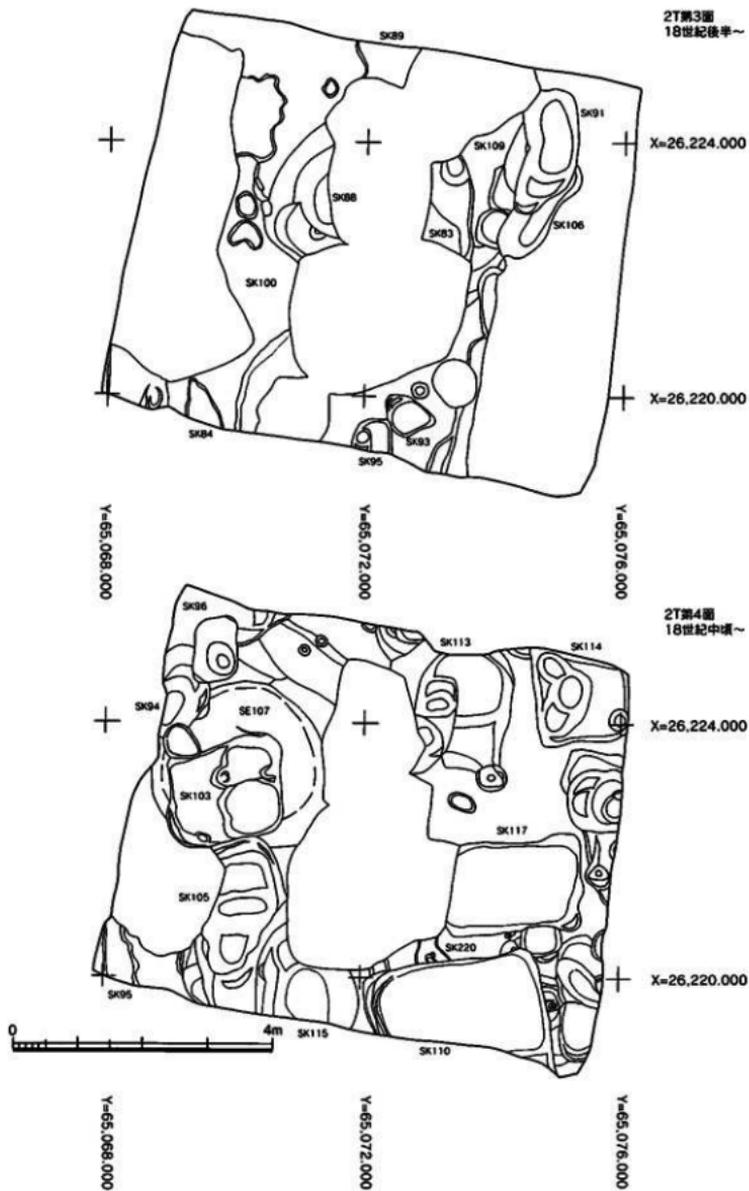
SJ63は、E-4グリッドで検出された埋蔵遺構である。底径22cm、現存高さ46cmを測る土師質の甕が埋設されたもので、堀方は、径78cm、深さ47cmを測る。

SK62は、E-3グリッドで検出される。その遺構の大半の部分が調査区の外になり、その平面系は不明であるが、東西軸で160cm、深さ72cmを測る土坑である。出土遺物には、焼雜された資料を含む染付碗・鉢等がある。

SK80は、F-3グリッドで検出される。東西160cm、南北130cm以上、深さ148cmを測る大型の土坑である。出土遺物は少なく染付類の小片や瓦のみの出土であった。



第11図 SE60遺構実測図 (1/40)



第12图 2T遺構全体图2 (1/80)

SE60は、F・G-3・4グリッドで検出される。遺構中央部の建物基礎の存在から、井筒の平面プランの確認までに至らなかったが、堀方全体で、およそ径240cm、深さ240cm以上を測る円形の井戸となった。出土遺物は、井戸を埋め戻した際の土層及び裏込め部から出土したもので、染付碗・皿がある。

SX86は、E・F・G-4グリッドで検出された南北方向に延びる石組み遺構である。おそらく、1トレンチで確認された東側建物の東の境界を示す遺構になると思われる、東西両面を石組みによって補強した、幅40cm、深さ30cmを測る溝状を呈している。第1面検出遺構及びSX68によって削平を受け、その上部構造は不明であるが、建物の境界施設であれば、1トレンチSX57と同様、上面に石組みが乗る暗渠風の遺構であったことが推定される。

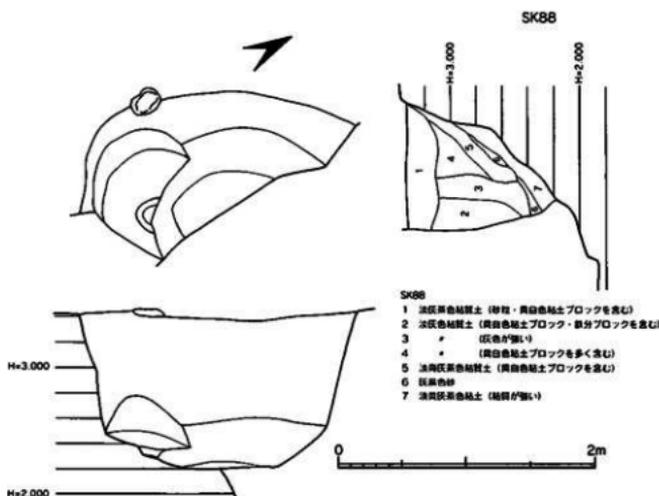
東建物間連遺構（2トレンチ）

SX078はF-4グリッドで検出された礎石状の石である。40cm～48cmの川原石を使用している。SX92はF・G-4グリッドで検出された礎石状の集石である。60cm～86cmの平面隅丸方形の範囲に20cm～40cmの川原石が集められている。SX67はG-3グリッドで検出された礎石状の集石である。58cm～64cmの平面隅丸方形の範囲に10cm～40cmの川原石が集められている。SX66はF-3グリッドで検出された礎石状の集石である。80cm～90cmの平面隅丸方形の範囲に40cm～50cmの川原石が集められている。SX81E・F・G-3グリッドで検出された南北方向の石組みである。30cm～40cmの川原石を使用した石組みで、幅40cm～50cm、現況での高さは10cmを測る。

第3面検出遺構（第13図）

SK91・106・109は、E・F-4グリッドで検出された土坑群である。それぞれ長軸180～200cm、短軸64～150cmを測る。南北に主軸をもつ土坑群である。これらの土坑群が存在した場所は、前述した第2面において、南北方向の境界を示す遺構が存在しており、当該地における短冊地割りの成立期に関わる意味で注目される遺構群となった。

SK88は、F-3グリッドで検出された大型の土坑である。上面遺構等の削平により詳細規模は不明であるが、東西軸100cm以上、南北軸222cm以上、深さ152cmを測る。出土遺物には、染付碗・皿、仏飯器、陶器皿・甕、瓦



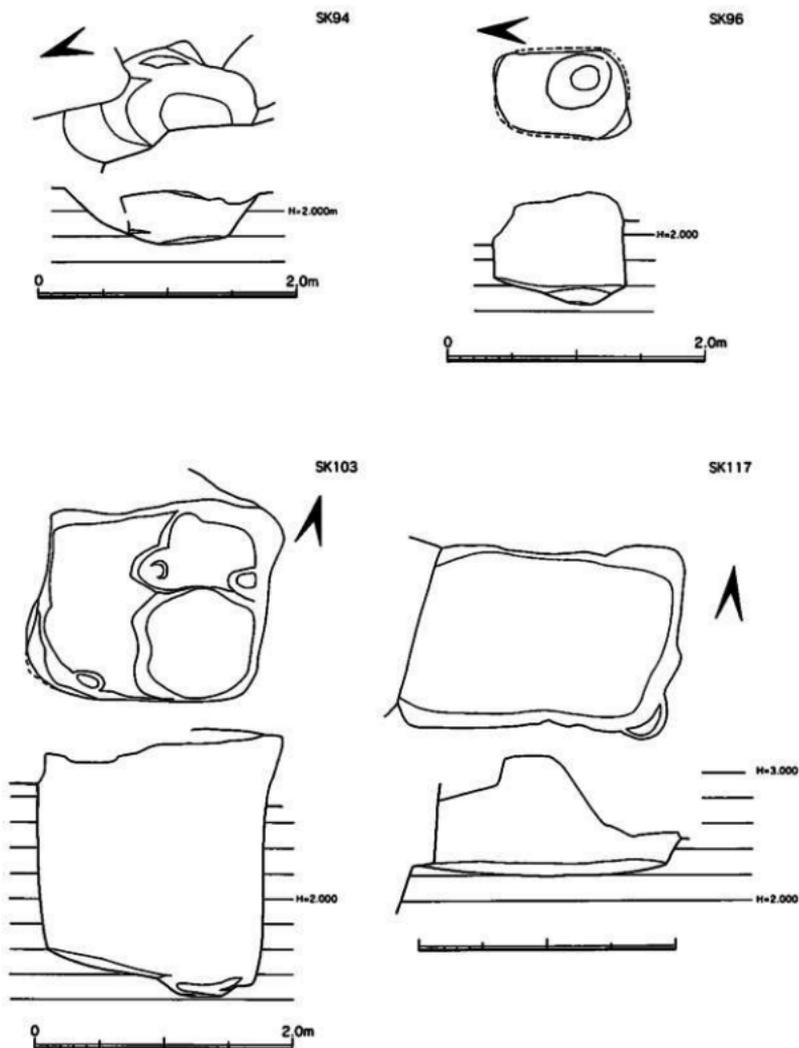
第13図 SK88遺構実測図 (1/40)

等がある。

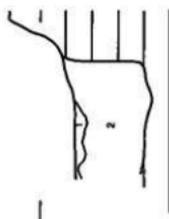
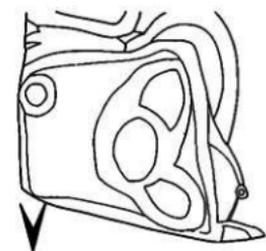
第4面検出遺構 (第14~18図)

SK94・96・103・117は、埋土が砂で構成される遺構群である。

SK94は、E-3グリッドで検出された小型の土坑で、長軸150cm、短軸76cm、深さ42cmを測る。その切合いか



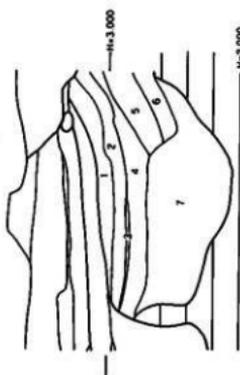
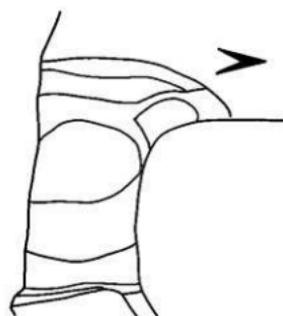
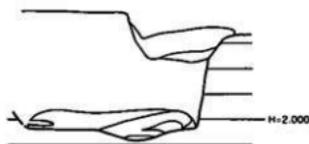
第14図 SK94・96・103・117遺構実測図 (1/40)



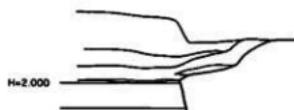
SK114

SK114

- 1 淡茶褐色土 (炭を多く含む)
- 2 淡茶褐色土 (炭を多く含む軟質)



SK115



SK115

- 1 淡灰茶褐色粘質土 (盤地層)
- 2 淡灰茶色粘質土 (盤地層)
- 3 赤褐色粘質土 (焼土を含む・盤地層)
- 4 淡灰茶褐色粘質土 (盤地層)
- 5 淡褐色砂質土 (盤地層)
- 6 淡褐色砂質土 (盤地層)
- 7 灰黒色粘質土 (炭+焼土を多量に含む)

第15図 SK114・115遺構実測図 (1/40)

らSK96より古く位置づけられる。出土遺物には中国産の染付皿がある。

SK96は、同じくE-3グリッドで検出された小型の土坑で、長軸100cm、短軸60cm、深さ84cmを測る。その切合いからSK96より新しく位置づけられる。出土遺物には染付碗、陶器皿・壺・播鉢がある。

SK103はF-3グリッドで検出された大型の土坑で、長軸174cm、短軸152cm、深さ200cmを測る平面隅丸方形を呈する土坑である。出土遺物には染付皿、陶器碗、土師質土器焙烙等がある。

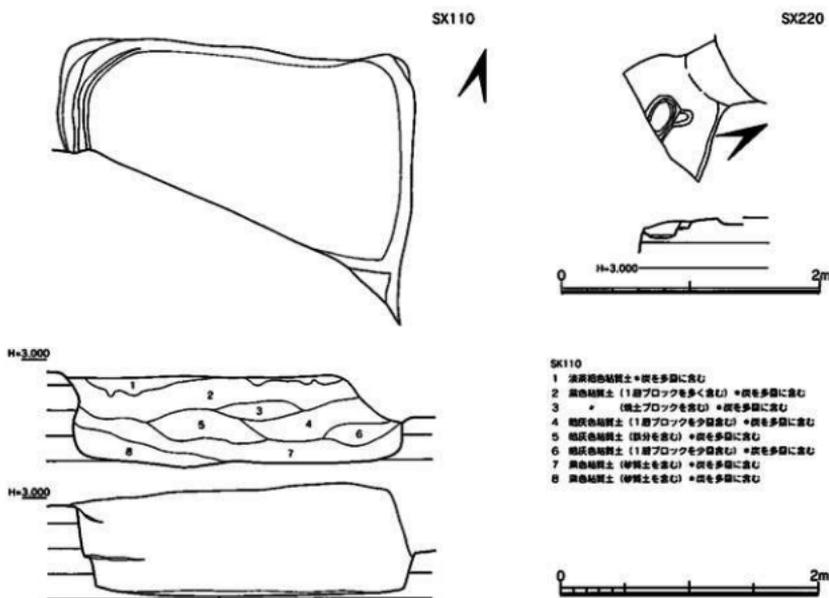
SK117はF-4グリッドで検出された大型の土坑である。長軸200cm以上、短軸132cm、深さ92cmを測る平面隅丸長方形を呈する土坑である。出土遺物は染付・瓦等の小片のみであった。

SK114・115・110・220は鍛冶関連遺構である。

SK114は、E-4グリッドで検出された鍛冶関連の廃棄土坑である。東西164cm以上、南北154cm以上、深さ100cmを測る平面隅丸長方形を呈すると思われる土坑である。埋土には、大量の炭と椀形滓が含まれており、土壌の洗浄を行うと無数の鍛造剥片が現れる。出土遺物にはフイゴ羽口等がある。

SK115は、G-3・4グリッドで検出された鍛冶関連の廃棄土坑である。その切合いからSK110よりも古く位置づけられる長軸150cm以上、短軸184cm、深さ54cmを測る平面隅丸長方形を呈すると考えられる土坑である。埋土にはやはり大量の炭と椀形滓が含まれており、土壌の洗浄を行うと無数の鍛造剥片が現れる。出土遺物には、砥石、フイゴ羽口がある。

SK110は、G-4グリッドで検出された鍛冶関連の廃棄土坑である。その切合いからSK115よりも新しく位置づけられる長軸272cm、短軸162cm、深さ88cmを測る平面隅丸長方形の土坑である。埋土にはやはり大量の炭と椀形滓が含まれており、土壌の洗浄を行うと無数の鍛造剥片が現れる。出土遺物には、染付碗、陶器皿、フイゴ羽口、

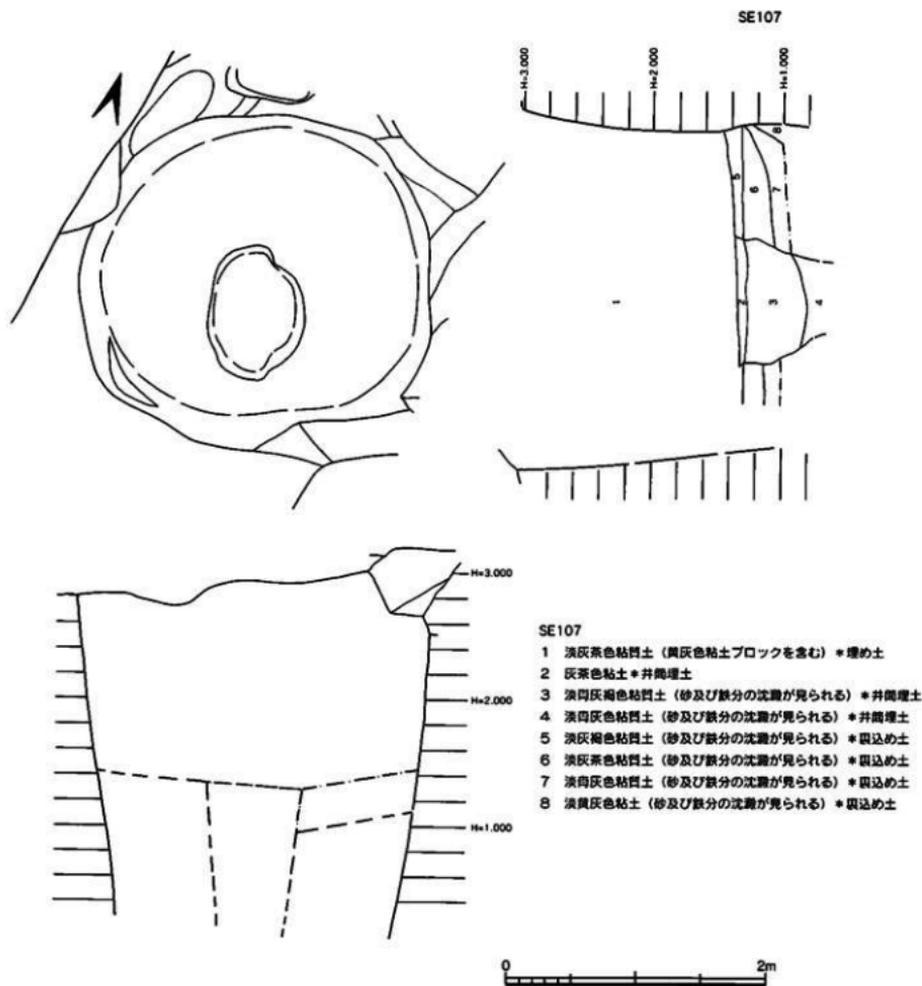


第16図 SK110遺構実測図（1/40）・SX220遺構実測図（1/20）

砥石、釘等がある。

これら鍛冶関連の廃棄土坑には南北主軸をもつSK114・115、東西主軸をもつSK110があり、切合い的には東西主軸のほうが新しいようである。

SX220はF-4グリッドで検出された小型の鍛冶炉である。径12cm～15cm、深さ7cmを測る楕円形の炉本体に、幅6cm、長さ6cm、深さ3cmのフイゴ挿入口が付設している。周辺土壌は赤変しているが、粘土を貼ったり、防湿性を高めるカーボンベド等は見られない。更に、フイゴの挿入口も小さく今回廃棄土坑中から出土している



第17図 SE107遺構実測図 (1/40)

大型の石製羽口ではなく小型の羽口が挿入されたものと考えられる。

SE107は、E・F-3で検出された井戸である。径260cm～272cmを測る平面円形を呈する井戸である。その土層観察から地表下170cmまでは井戸を埋め戻した際の土であり、その下面より井筒の痕跡を確認している。井筒は径74cm～106cmの楕円形を呈している。出土遺物には陶器碗・皿・播鉢・鉢・染付皿等がある。

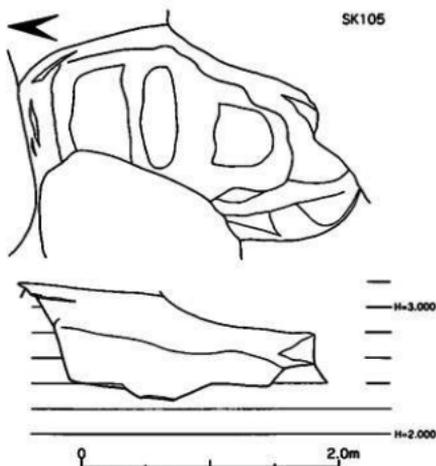
SK105は、F-3グリッドで検出されている。長軸258cm、短軸160cm、深さ80cmを測る平面長円形を呈する土坑である。出土遺物には染付碗がある。

以上2トレンチにおける調査成果をまとめると、明治以降に位置づけられる第1面では、前代の短冊状の地割りを引き継ぐ形で凝灰岩の切石を使った基礎を有する建物の存在が確認された。

18世紀末～幕末期に位置づけられる第2面では、1トレンチで確認された東建物の続きが検出されており、これによって東建物における間口部分に奥を含めたその全容が確認されたこととなった。

18世紀後半に位置づけられる3面では、はっきりとした境界施設は確認されていないが、建物の東境界となる部分に南北に主軸をもつ長円形の土坑群が切り合っており、なんらかの境界を意識した遺構群が検出された。

18世紀中頃～に位置づけられる4面では、前述した短冊状の地割りをまたぐ形で鍛冶関連の廃棄土坑が営まれており、この段階においては、短冊地割りとは別の区割りの中に職人が在住するといった、町屋とは違った景観がここに存在したことが確認された。



第18図 SK105遺構実測図 (1/40)

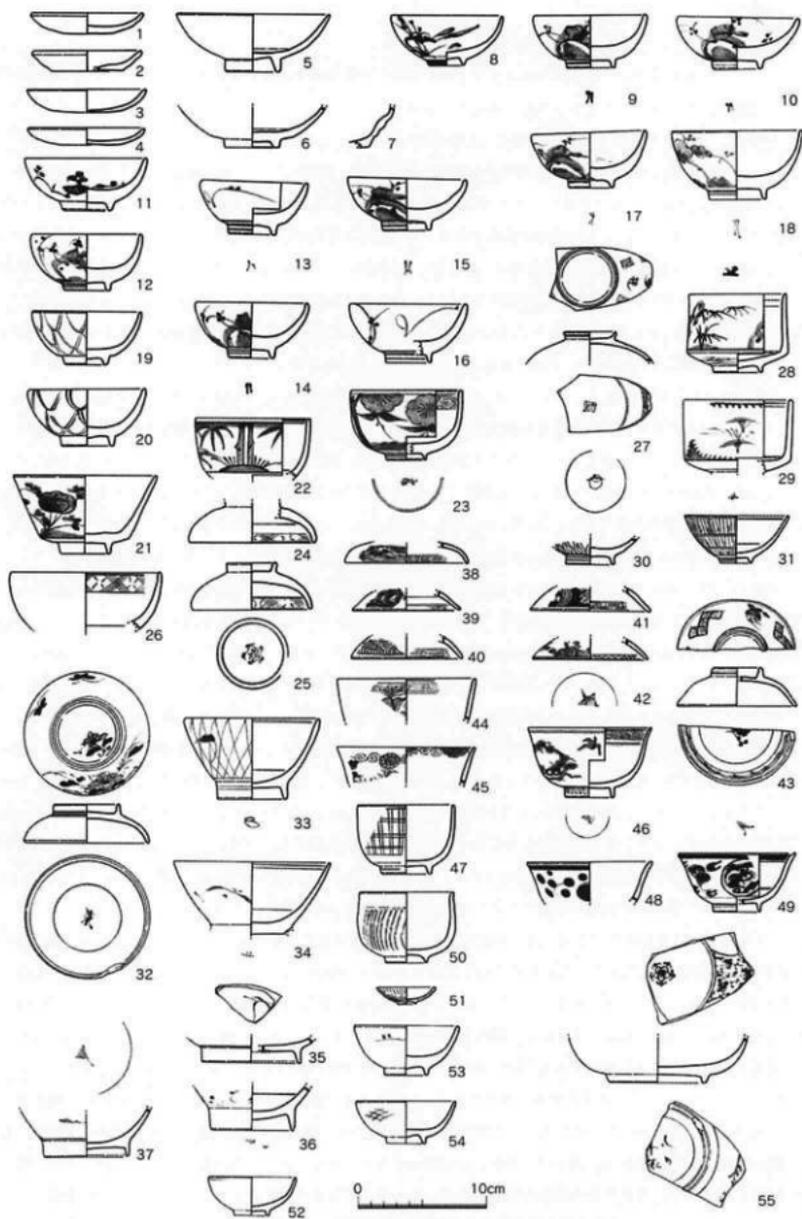
3. 遺物

1 トレンチ

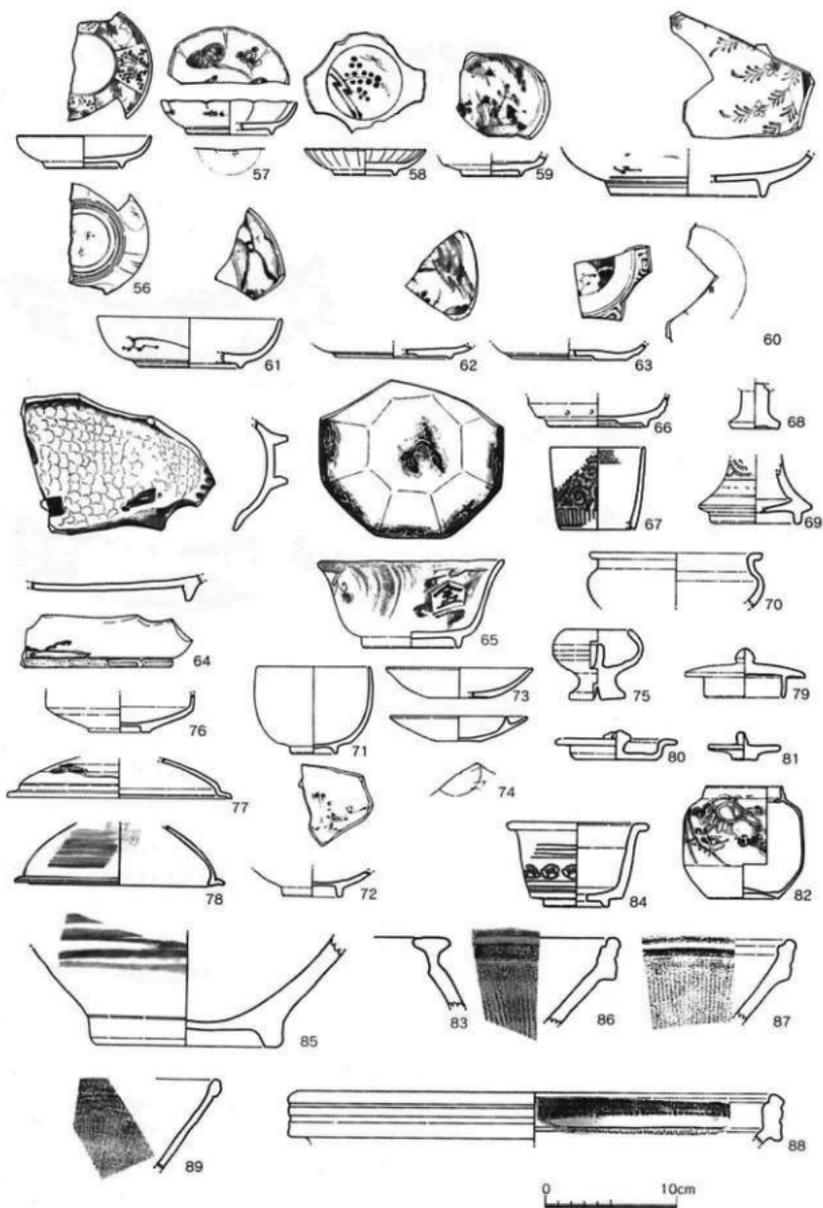
1 トレンチの出土遺物は、遺構の検出時及び土間を形成した整地層中からの遺物と、一面以下の遺構群の確認の為に設定したサブトレンチ1からの出土遺物からなる。

1～108は、遺構の検出時及び土間を形成した整地層中から出土した遺物である。

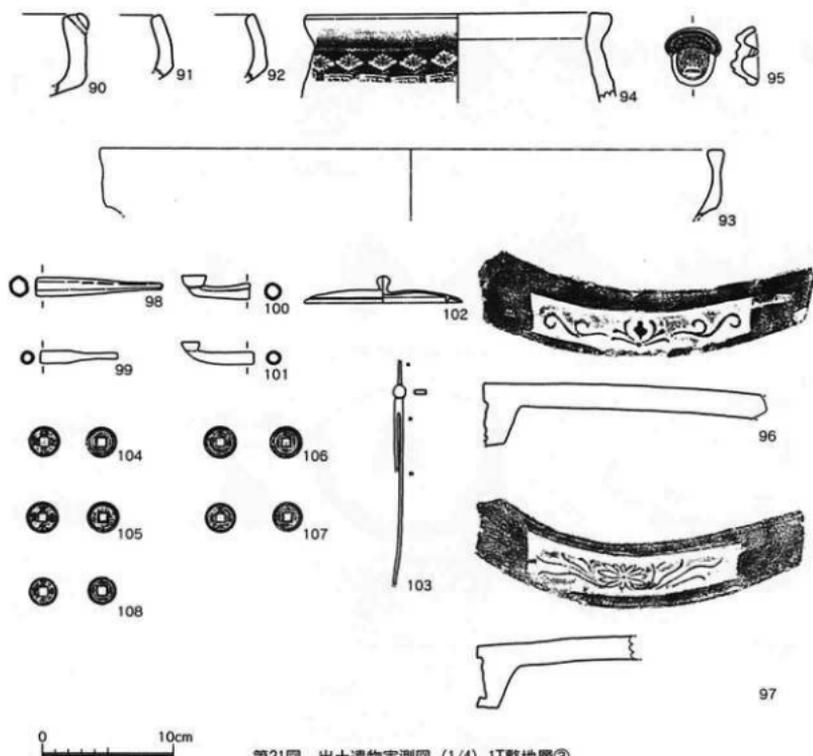
1～4は土師器皿である。1・2は底部糸切り難しのもので、口径8.2～8.4cm、器高1.6～1.7cm、底径4.0～5.4cmを測る。3・4は非口ロク成形のもので、口径8.8cm、器高1.4～1.8cmを測る。共に法量は小さく新しい風性を有する遺物である。5・6は唐津陶器皿である。共に見込み部蛇の目軸割じしたもので、6は、銅線軸を施した内野山系の皿で口径11.6cm、器高4.5cm、高台径4.1cmを測る。7は陶器碗である。薬白軸の施された萩の製品である。8～47は染付及び青磁染付の碗もしくはセットとなる蓋の類である。8～18はくらわんか手の碗で、高台内に「大明年製」崩れの銘が施されたものもある。法量的には口径8.3～9.1cm、器高4.0～4.4cm、高台径2.8～3.6cmを測る小碗と、口径9.8cm、器高5.3cm、高台径4.1cm～10.0cmを測る中碗が存在する。特に小碗の中には、口縁部を歪ませたものも存在する。19・20は二重網目文の施された碗である。口径8.2～8.8cm、器高4.1～4.4cm、高台径3.0～3.9cmを測る。21は朝顔型の碗である。口径10.9cm、器高6.0cm、高台径3.9cmを測る。24～26は青磁染付の碗と蓋である。四方棒及びゴニャク五弁花が施される。28・29は筒型碗である。口径7.4～8.2cm、器高5.6～6.0cm、高台径3.8cmを測る。31は小広東碗である。口径7.9cm、器高3.7cm、高台径2.4cmを測る。32～34・36・37は広東碗及びその蓋である。32は口径9.4cm、器高3.0cm、つまみ径4.9cmを測る。その他碗は、口径10.2～12.0cm、器高6.3cm、高台径5.3～6.3cmを測る。38は線描による文様の蓋である。39～46は端反碗及びセットとなる蓋の一群である。蓋は口径8.4～9.4cmを測り、碗は口径9.3～10.8cm、器高5.4cm、高台径3.6cmを測る。47は筒九碗である。口径7.2cm、器高5.5cm、高台径3.3cmを測る。48・49は瀬戸・美濃産の端反碗である。口径8.8～9.6cm、器高3.1～4.5cm、高台径3.6cmを測る。51～54は紅皿である。51は内型成形のもので、口径4.7cm、器高1.3cm、高台径1.4cmを測る。52・53は篋文、54は井桁文が施される。法量は口径6.6～8.0cm、器高3.0～3.8cm、高台径2.6～3.4cmを測る。55～64は染付皿である。55・56は高台内に「大明年製」銘をもつもので、55は見込み部に手描きの五弁花、56は内面を8分割して文様を描く。口径10.3cm、器高2.5～2.6cm、高台径5.8～6.4cmを測る。60は大皿で、高台内に「大(明成化)年(製)」銘が入る。61～63は蛇の目凹型高台の皿である。やや高さのある高台のもの、低い高台のものが存在する。口径14.0cm、器高3.8cm、高台径8.0～8.9cmを測る。64は型打成形の皿で、全体の魚の形を模したものである。65は八角鉢である。口径14.0cm、器高6.7cm、高台径7.4cmを測る。66は蛇の目凹型高台の白磁香炉である。67はそば猪口である。口径7.2cm、器高6.3cm、高台径5.6cmを測る。蛇の目凹型高台に蜻蛉草が施される。68は染付仏飯器である。69は瓶である。蜻蛉草文の下位の○×の連続文を施す。70は青磁香炉である。71～74は京・信楽系の陶器である。71は碗である。口径8.6cm、器高6.7cm、高台径3.4cmを測る。72は皿で、見込み部に山水文様と、足ハマ痕が残る。73・74・75は灯火具である。73は灯明皿で内面に櫛目・足ハマ痕が残る。口径11.2cm、2.3cm、4.8cmを測る。74は同じく受付皿である。口径10.5cm、器高1.9cm、器高3.4cmを測る。75は同じく関西系の陶器のひょうそくである。口径5.0cm、器高5.4cm、高台径2.2cmを測る。76は関西系陶器の鉢である。77・78は関西系陶器行平鍋の蓋である。79・80は陶器の土瓶蓋で、81は陶器の急須蓋である。82は関西系陶器の急須である。口径5.8cm、器高5.5cm、底径8.6cmを測る。83は唐津甕である。84は瀬戸・美濃産の植木鉢である。口径10.8cm、器高6.5cm、高台径4.8cmを測る。85は唐津刷毛目鉢である。86～89は陶器摺鉢である。86～88は埴産、89は肥前のものである。90～93は土師質土器の焙烙である。90は全体に厚手の造りで、把手部分の穿孔が突き抜けている。91・92はやや薄手のものである。93は口縁端部に平坦部を有するものである。94は土師質土器火鉢である。頸部から肩部にかけてスタンプによる連続文様が施される。95は土師質土器の椀である。猿の面で、全体にうっすらと鉛系の透明釉が施されているようである。96・97は



第19图 出土遗物实测图 (1/4) 1T整地层①



第20图 出土遺物実測図 (1/4) 1T整地層②

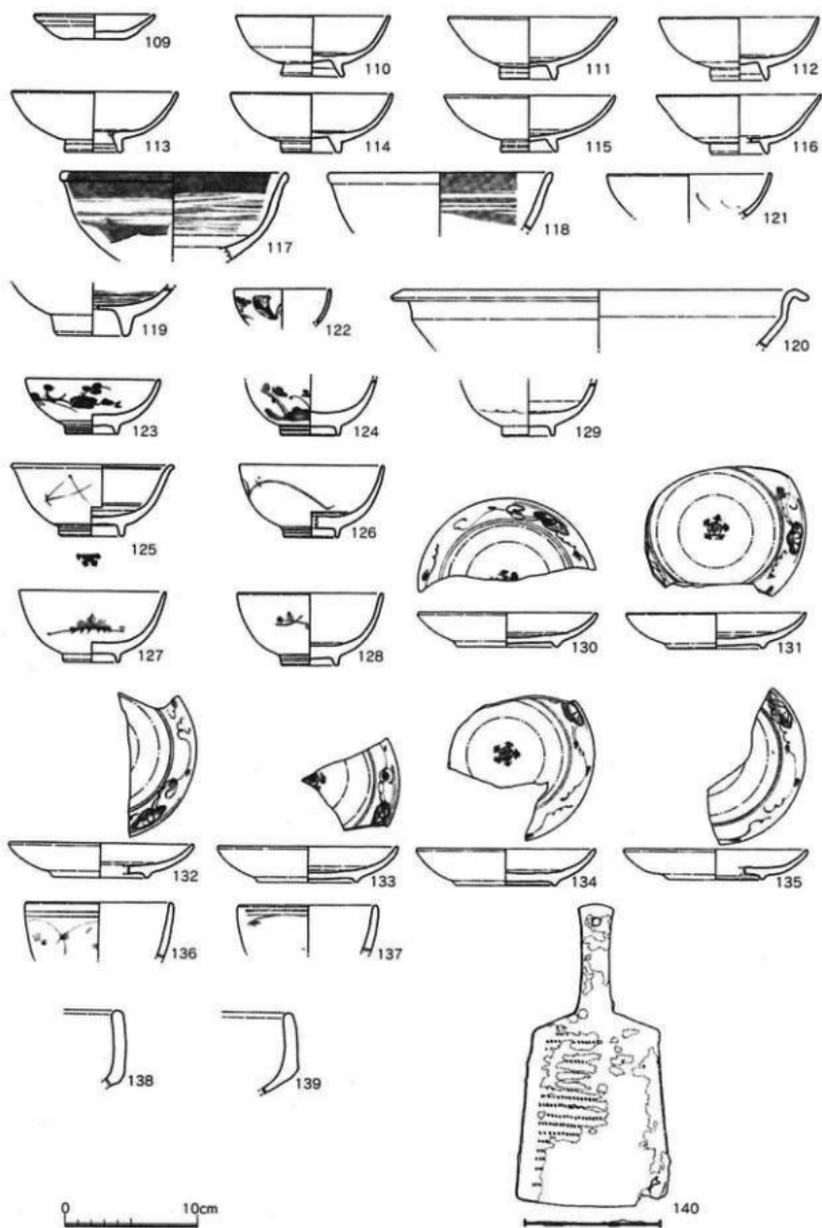


第21図 出土遺物実測図 (1/4) 1T整地層③

軒平瓦である。98～108は銅製品である。98・99はキセルの吸い口部分である。100・101は雁首部である。102は宝珠状のつまみを有する蓋である。口径10.0cm、器高2.1cmを測る。103は簪である。104～108は銭である。104は渡来銭である。105～108は寛永通宝である。105は古寛永、106は文銭、107・108は新寛永である。

109～140は、1トレンチのサブトレンチ1から出土した遺物である。

109は底部糸切り離しの土師器皿である。口径9.0cm、器高1.9cm、底径5.2cmを測る。口径がやや大きく古い様相を有している。110～116は唐津陶器皿で、共に内面見込み部蛇の目軸刺ぎが施されたものである。口径11.5～12.9cm、器高4.3～4.8cm、高台径4.2～4.7cmを測る。116は二次被熱を受けたものである。117は唐津陶器鉢である。内外面に刷毛目が施される。118は同じく刷毛目の唐津であるが、片口部分を有している。119は同じく刷毛目の唐津鉢の底部である。見込み部蛇の目軸刺ぎが施される。121は京焼の碗である。122は色絵染付の小皿である。123梅樹文の碗。口径10.1cm、器高3.9cm、高台径4.2cmを測る。124はくらわんか手の中碗である。125は見込み部蛇の目軸刺ぎされた波佐見の端反碗である。口径12.0cm、器高5.6cm、高台径4.6cmを測る。126～129も見込み部蛇の目軸刺ぎされた波佐見の碗である。口径10.7～11.0cm、器高5.4～5.5cm、高台径3.9～4.2cmを測る。130～135は見込み部蛇の目軸刺ぎ、コンニャク五弁花を施す波佐見の皿である。口径13.4～13.8cm、器高2.6～2.8cm、高台径7.2～7.6cmを測る。136・137は陶胎染付碗である。138・139は土師質土器培培である。140は銅製のおろし金である。



第22図 出土遺物実測図 (1/4) ITサブトレンチ

2 トレンチ

2 トレンチについては、各遺構毎の出土遺物について記載する。

SX17

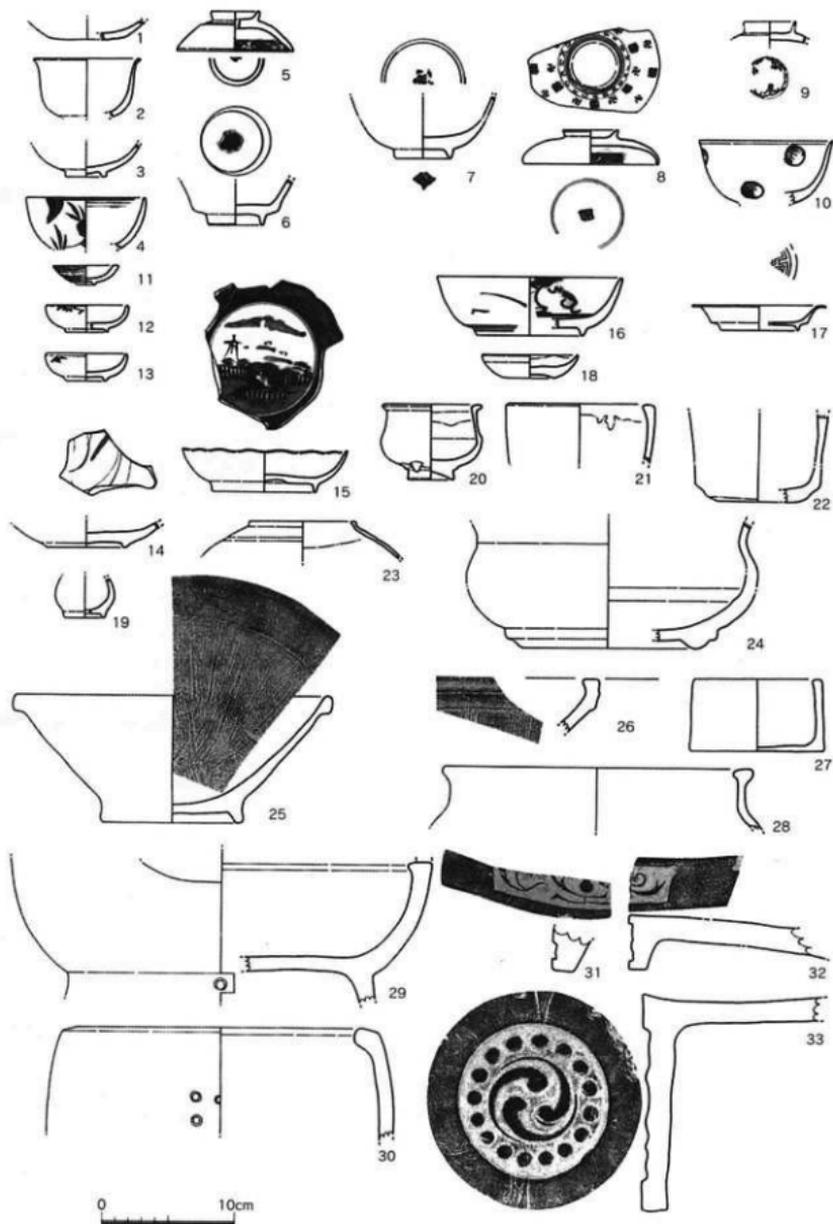
1 は土師器皿である。鉛糸系の透明軸が施された施軸かわらけである。底径3.0cmを測る。2・3は京・信楽系の陶器の碗と皿である。4は染付碗である。5～7は青磁染付碗及び蓋である。5・6は朝顔型の碗と蓋で、7は半球型の碗である。法量は蓋で、口径8.8cm、器高3.0cm、つまみ径3.6cmを測る。8は丸碗の蓋である。口径10.0cm、器高2.6cm、つまみ径4.2cmを測る。9は端反碗の蓋である。10は波佐見の端反碗で、丸文が施される。11～13は紅皿である。11は型打成形のもので、口径5.0cm、器高1.5cm、高台径1.4cmを測る。12・13は、口縁部に笹文が施されている。口径5.9～6.0cm、器高2.1cm、高台径2.8～3.2cmを測る。14は初期伊万里の皿で、高台に砂が付着する。15は蛇の目凹型高台の皿である。口径12.4cm、器高3.2cm、高台径7.8cmを測る。16は波佐見の皿である。口径14.0cm、器高4.5cm、高台径8.0cmを測る。17は瀬戸・美濃産の白磁皿で、内面に寿文のスタンプが見られる。口径10.0cm、器高1.9cm、高台径5.8cmを測る。18は陶器皿である。口径7.2cm、器高1.8cm、底径3.6cmを測る。19は染付仏花瓶である。20～22は青磁香炉である。23は陶器土瓶である。24は瀬戸・美濃産の陶器火鉢で、内面露胎である。25・26は陶器播鉢である。25は唐津系で、口径23.6cm、器高9.8cm、高台径10.4cmを測る。26は産地不明であるが、丹波の可能性を有する。27は焼締陶器の水指で、備前焼か？口径9.4cm、器高5.5cm、底径10.0cmを測る。28は唐津系の刷毛目が施された陶器甕である。29・30は瓦質土器の焜炉である。31～33は瓦で、31・32は軒平、33は軒九瓦である。

SK20

1 は色絵染付小坏である。内面に「鶴崎 萬間屋□□」と入る。口径6.2cm、器高2.7cm、高台径2.2cmを測る。2は染付皿である。線描による編組の文様が入る。口径10.2cm、器高2.4cm、高台径6.2cmを測る。3は瀬戸・美濃産の白磁皿で、内面に寿文のスタンプが見られる。口径10.0cm、器高2.0cm、高台径7.0cmを測る。4は陶器の鉢である。口径13.6cm、器高4.1cm、高台径5.4cmを測る。白色の軸が施され絵付けがなされる。体部下半部が露胎となり墨書が施される。5は染付皿である。四角形の銅皿で、高台内に「製化年製」の銘が入る。口径22.2cm、器高5.5cm、高台径13.0cmを測る。6は瀬戸・美濃産の染付端反碗の蓋である。口径9.8cm、器高2.5cm、つまみ径3.8cmを測る。7・8は関西系陶器の土瓶蓋である。法量は7で口径8.1cm、器高3.7cmを測る。9は陶器行平鍋の蓋である。外面上部に白色の軸が施され絵付けがなされ、口縁部付近が露胎、内面に緑軸が施される。産地は不明である。口径11.4cm、器高3.3cm、つまみ径3.0cmを測る。10は関西系陶器行平鍋である。11は陶器の仏花瓶で、緑軸が施される。12は染付の酒器である。焼継痕が残り底部には焼継文字が入る。13は京・信楽系陶器の灯火具で、台付の受付皿である。口径5.4cm、器高3.5cm、底径3.6cmを測る。14は染付植木鉢である。口径12.2cm、器高10.1cm、高台径7.8cmを測る。15は瓦質土器鉢である。口径39.6cm、器高12.8cm、底径28.0cmを測る。16・17は唐津系の播鉢である。高台を除く全面に鉄軸が施され、内面見込み部には重ね焼きの痕跡が残る。口径29.2～31.2cm、器高13.1～14.0cm、高台径12.0～12.4cmを測る。

SX28

1・2は土師器皿である。共に鉛糸系の透明軸が施された施軸かわらけである。共に口径7.0cmを測る。3～5は染付小坏である。4・5は瀬戸・美濃産のものである。口径6.8～7.0cm、器高4.5cm、高台径3.0cmを測る。6は線描による文様が施された染付蓋である。口径9.5cm、器高2.7cm、つまみ径3.8cmを測る。7～9は染付碗である。8は端反碗である。口径10.0cm、器高5.8cm、高台径3.4cmを測る。9は波佐見の端反碗である。10・11は青磁皿である。共に口径7.4cm、器高2.2cm、高台径4.0cmを測る。12・13は肥前系の染付皿である。口径10.0～10.2cm、器高2.2～2.5cm、高台径5.4～5.5cmを測る。14～16は瀬戸・美濃産の染付皿で、14・15は獅子が描かれ、口径9.8～10.0cm、器高2.1cm、高台径4.9～5.5cmを測る。16は褐軸と白軸が掛け分けられている。口径9.6



第23图 出土物实测图 (1/4) 2TSX17

cm、器高2.2cm、高台径4.8cmを測る。17は関西系陶器の急須蓋である。18は関西系陶器土瓶である。19は染付猪口である。20は染付仏飯器である。21は青磁の香炉である。22は染付のレンゲである。底部の墨付のみが露胎となる。23は染付酒器である。24は唐津系陶器摺鉢である。

SX59

1は京・信楽系の陶器碗である。2～4は染付皿である。3は波佐見の製品で、高台内に渦福鉢が見られる。口径13.2cm、器高3.6cm、高台径7.4cmを測る。4は高台内にハリ支えの痕跡が残る。

SK13

1・2は染付碗である。1は広東碗で、2は端反碗である。

SK15

1は青磁香炉である。2は染付端反碗である。

SE60

1・2は染付碗、3は染付の皿である。1は二重網目文が施された碗で、口径、器高、高台径を測る。2は外面に寿文・内面に四方標が施された碗である。

SK62

1は染付端反碗の蓋である。2～4は端反碗である。5は染付猪口である。焼継された資料で、高台内面には「□町 □壺or殿」との焼継文字が施されている。高台径4.6cmを測る。6は染付の八角皿である。5と同じく焼継痕を残す資料である。口径19.4cm、器高6.4cm、高台径9.8cmを測る。

SJ63

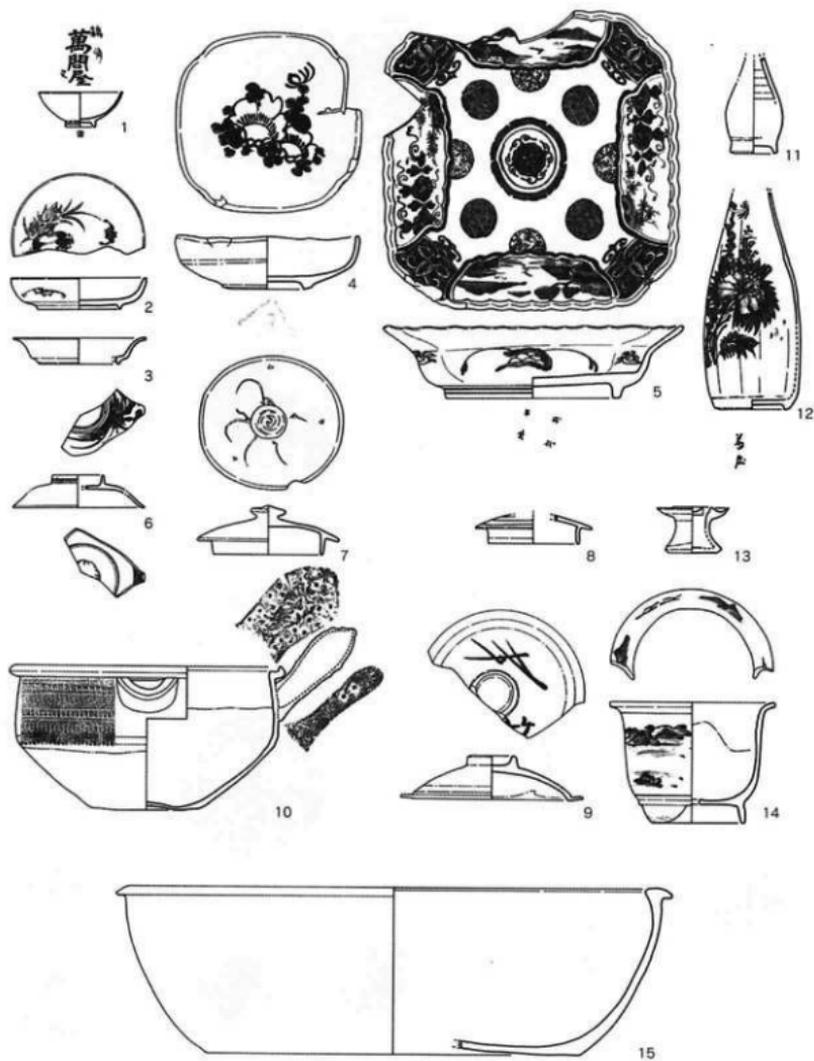
1～4は碗である。1は染付筒丸碗である。口径6.9cm、器高5.0cm、高台径2.8cmを測る。3は不明陶器碗である。高台径4.6cmを測る。4は端反碗で、焼継の痕跡が残る。5は染付端反碗の蓋である。口径9.4cm、器高3.0cm、つまみ径4.0cmを測る。6は型打成形による白磁の紅皿である。口径4.0cm、器高1.4cm、高台径1.0cmを測る。7は京・信楽系の陶器の灯火具で、灯明皿となる。口径10.0cm、器高2.0cm、底径4.4cmを測る。8は染付鉢である。蛇の目凹型高台のもので、見込み部には足ハマ痕が残る。口径14.0cm、器高4.8cm、高台径7.4cmを測る。9は青軸・褐軸・黄軸が掛け分けられた型打による葉を模した皿である。口径6.1cm、器高2.1cm、底径3.0cmを測る。10は土師質土器の焜炉サナである。径9.8cmを測る。11・12は陶器土瓶である。13は唐津系陶器摺鉢である。高台径12.4cmを測る。

SK64

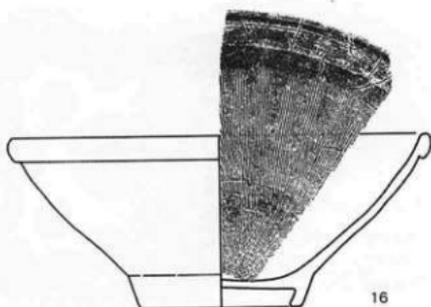
1・2はくらわんか手の染付碗である。高台内に「大明年製」崩れ銘が入る。口径10.0cm、器高5.1cm、高台径4.2cmを測る。3は染付丸碗である。4は唐津系陶器碗で、外面刷毛目、内面打刷毛目が施されるものである。口径9.8cm、器高6.6cm、高台径4.4cmを測る。5は陶器皿で、見込み部蛇の目軸剥ぎが施される。高台径6.0cmを測る。

SX66

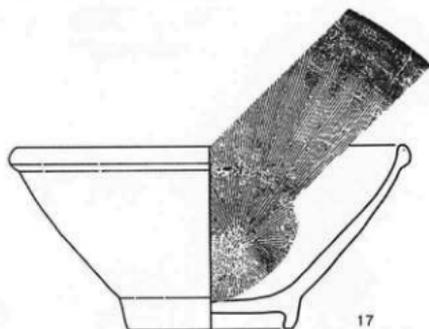
1はくらわんか手の染付碗である。口径9.2cm、器高4.1cm、高台径4.0cmを測る。2は青磁染付碗で、見込み部にコンニャク印版による五弁花が施される。3は筒型碗である。4は内面に四方標が認められる。5・6は紅皿である。共に口縁部付近に笹文が施される。口径7.2cm～7.6cm、器高3.8～3.9cm、高台径3.0cmを測る。7～10は染付皿である。7は口径23.2cm、器高3.3cm、高台径13.0cmを測る。8は波佐見の製品である。口径14.0cm、器高3.7cm、高台径9.2cmを測る。9は蛇の目凹型高台の皿である。10は高台内に「(大明成)化(年製)」銘が入る。口径16.0cm、器高2.4cm、高台径11.0cmを測る。



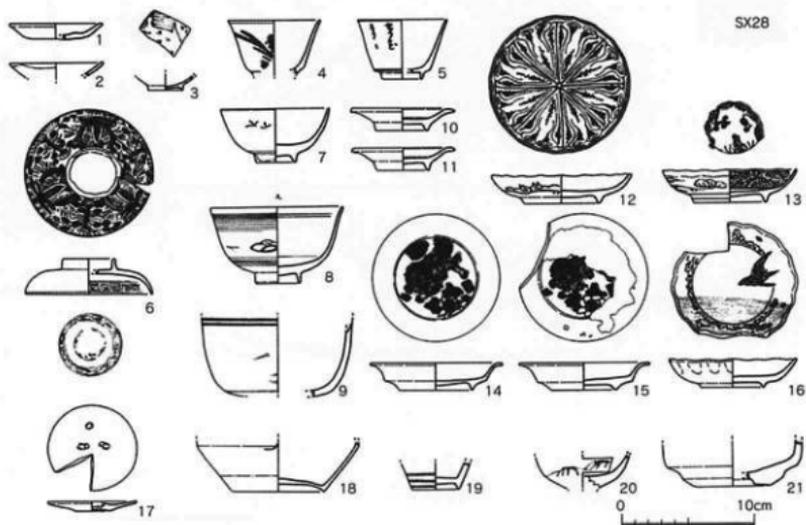
第24图 出土遺物実測図 (1/4) 2TSK20



16

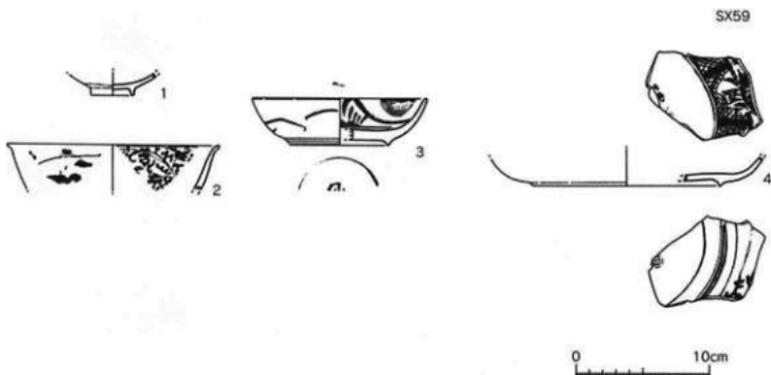
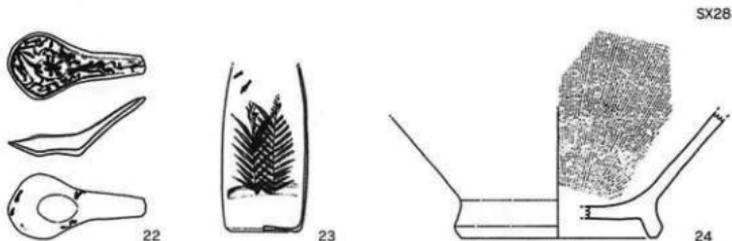


17



SX28

第25图 出土遺物実測図 (1/4) 2TSK20・SX28



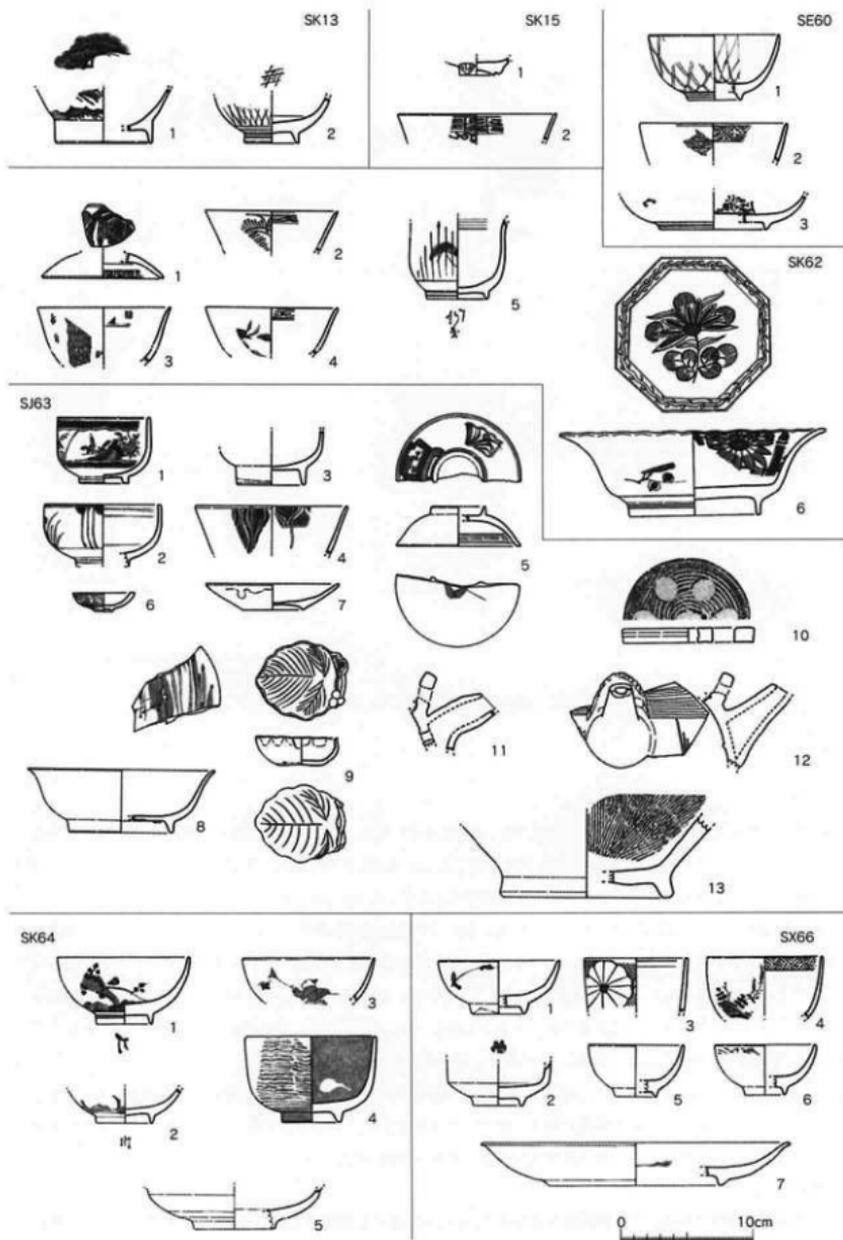
第26図 出土遺物実測図 (1/4) 2TSX28・SX59

SX68

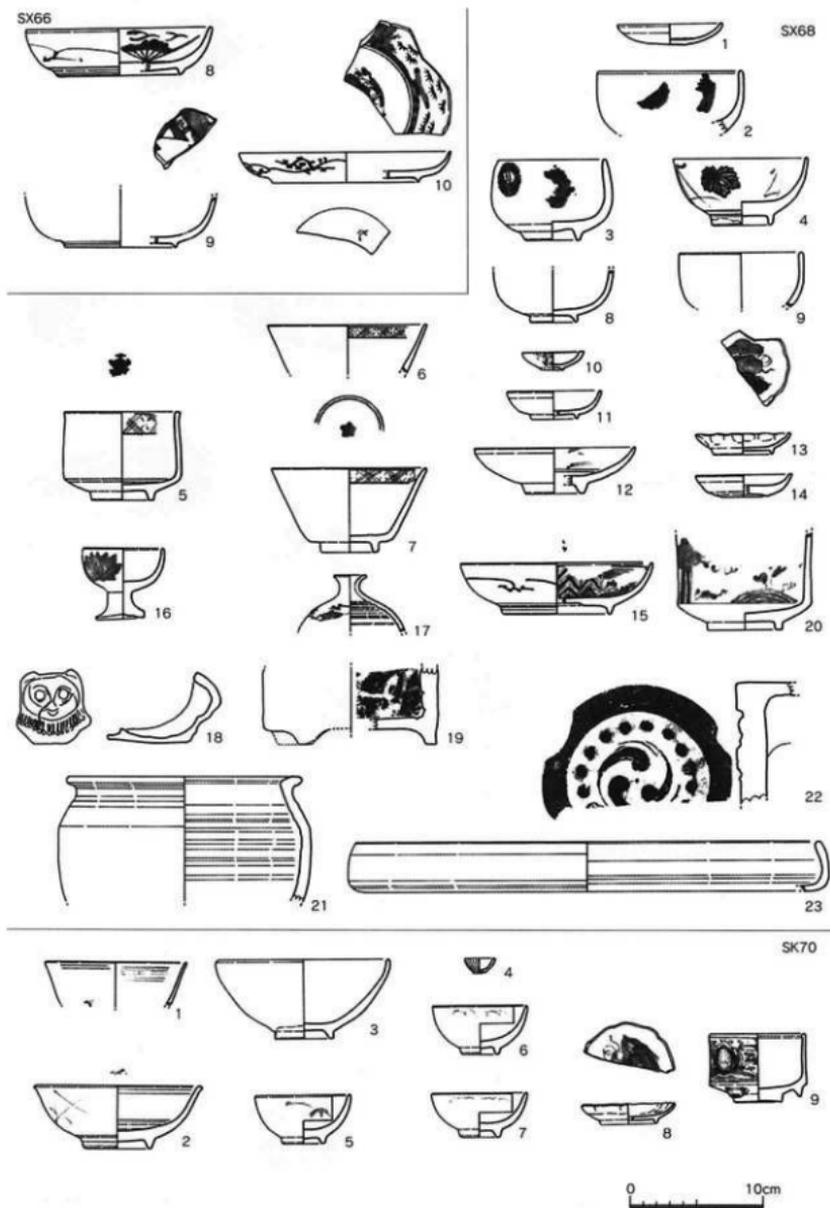
1は土師器皿である。口径7.8cm、器高1.6cm、底径3.0cmを測る。法量が小さく新しい様相を示すものである。2～4はコンニャク印判による文様が施された碗である。口径8.0～10.6cm、器高5.2～6.3cm、高台径3.6～4.0cmを測る。5～7は青磁染付の碗である。5は筒型のもので、口径8.2cm、器高6.8cm、高台径4.0cmを測る。6・7は朝顔型のもので、口径11.6～12.0cm、器高6.5cm、高台径3.6cmを測る。共に内面に四方椿、見込み部にコンニャク印判による五弁花が施される。8・9は京・信楽系の陶器碗である。10・11は紅皿である。10は型打成形のものである。口径4.0cm、器高1.4cm、高台径1.2cmを測る。11は口径10.6cm、器高2.4cm、高台径5.8cmを測る。12は見込み部蛇の目軸刺ぎの波佐見の皿である。口径11.8cm、器高3.5cm、高台径3.8cmを測る。14は陶器皿である。口径6.8cm、器高、2.2cm、底径3.2cmを測る。15は蛇の目凹型高台の皿である。口径14.4cm、器高4.0cm、高台径7.8cmを測る。16はコンニャク印判による文様の仏飯器である。口径6.0cm、器高5.6cm、高台径2.0cmを測る。17は染付仏花瓶である。18は土師質の甕をかたどった土笛である。19は瓦質土器の火鉢である。20は染付鉢である。21は唐津系陶器甕である。22は軒丸瓦である。23は土師質の焙烙である。

SK70

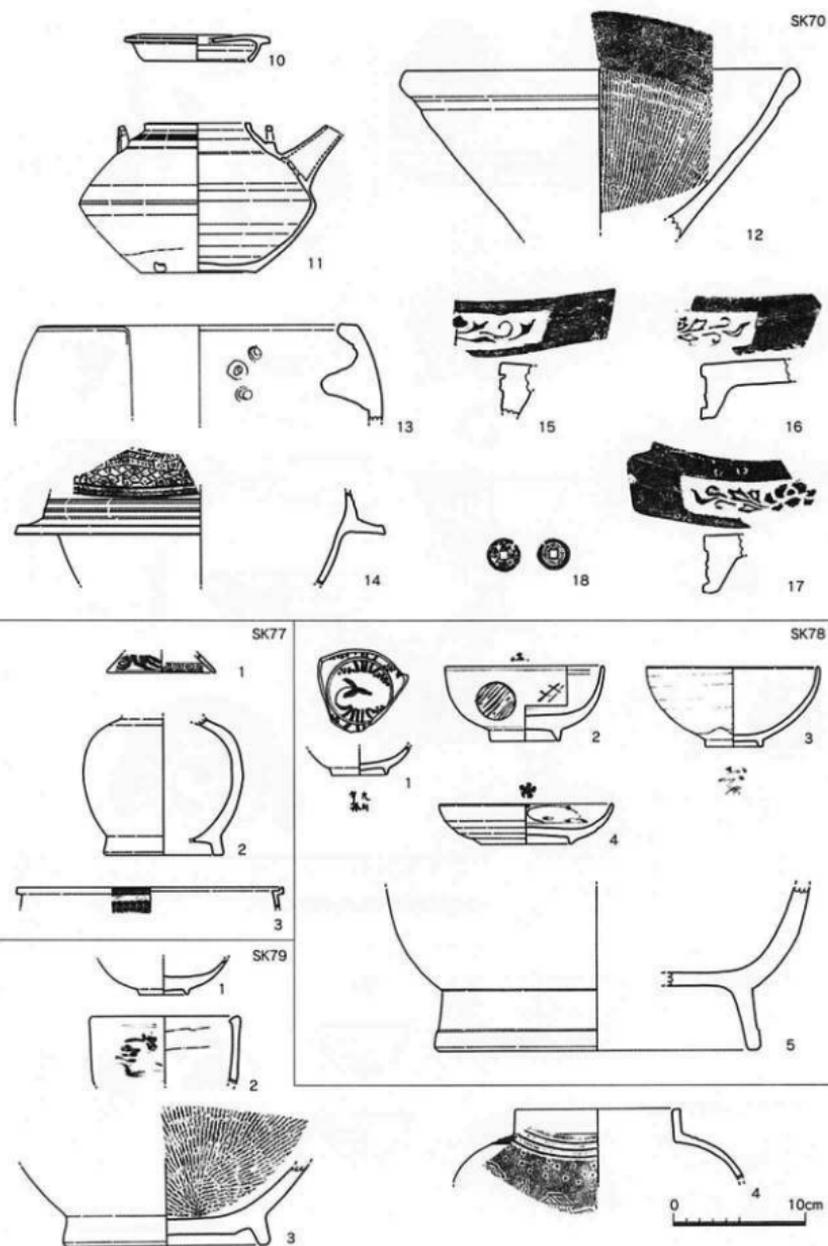
1は染付端反碗である。2は波佐見の端反碗で、見込み部蛇の目軸刺ぎし、コンニャク五弁花を施す。口径12.4cm、器高5.0cm、高台径4.8cmを測る。3は瀬戸・美濃産の陶器碗である。内外面に刷毛目が施されている。口径12.8cm、器高6.1cm、高台径4.4cmを測る。4～7は紅皿で、4は白磁紅皿である。口径2.2cm、器高1.1cm、高台



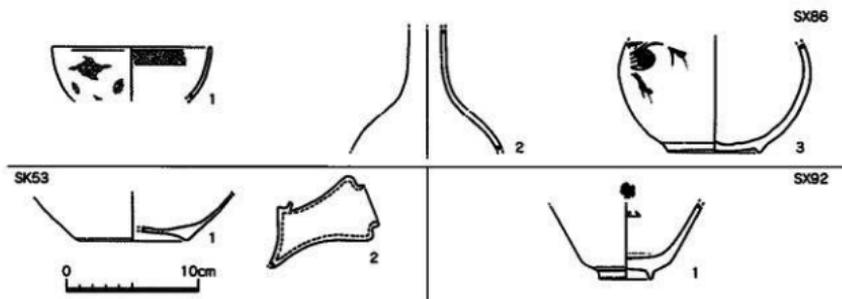
第27图 出土物実測図 (1/4) 2TSK13・15・62・64・SX66・SE60・SJ63



第28図 出土遺物実測図 (1/4) 2TSX66・68・SK70



第29图 出土文物实测图 (1/4) 2TSK70·77·78·79



第30図 出土遺物実測図 (1/4) 2TSX86・92・SK53

径0.8cmを測る。5～7は従文が施され、口径7.1cm、器高3.5～3.8cm、高台径2.6～3.3cmを測る。9は色絵染付香炉である。口径7.0cm、器高5.2cm、高台径3.4cmを測る。10は関西系陶器の土瓶蓋である。11は同じく関西系陶器の土瓶である。口径7.9cm、器高11.3cm、底径8.6cmを測る。12は唐津系陶器器楯鉢である。13は土師質土器焼炉である。14は瓦質土器の茶釜である。15～17は軒平瓦である。18は「寛永通宝」で、裏面に文が入るいわゆる文銭である。

SK77

1は染付燗反碗蓋である。2は青磁蓋である。3は関西系陶器行平鍋である。

SX78

1は青磁付碗である。高台内に「大明年製」銘が入る。2は波佐見の染付碗で、見込み部蛇の目軸刺ぎ、コンニャク五弁花が施される。口径11.8cm、器高5.7cm、高台径5.2cmを測る。3は瀬戸・美濃産の陶器碗である。内外面に刷毛目が施されている。高台内に墨書が見られる。口径13.0cm、器高6.1cm、高台径4.3cmを測る。4は波佐見の染付皿である。見込み部蛇の目軸刺ぎ、コンニャク五弁花が施される。口径13.0cm、器高3.0cm、高台径6.8cmを測る。5は土師質土器の焼炉である。高台径24.0cmを測る。

SK79

1は染付碗である。見込み部蛇の目軸刺ぎが施された波佐見の製品である。2は陶胎染付香炉である。3は唐津系陶器器楯鉢である。高台径15.0cmを測る。4は瓦質土器茶釜である。口径12.4cmを測る。

SX86

1は染付碗である。口径12.0cmを測る。2は唐津系陶器瓶で、刷毛目裝飾が施される。3は染付瓶である。高台径6.8cmを測る。

SK53

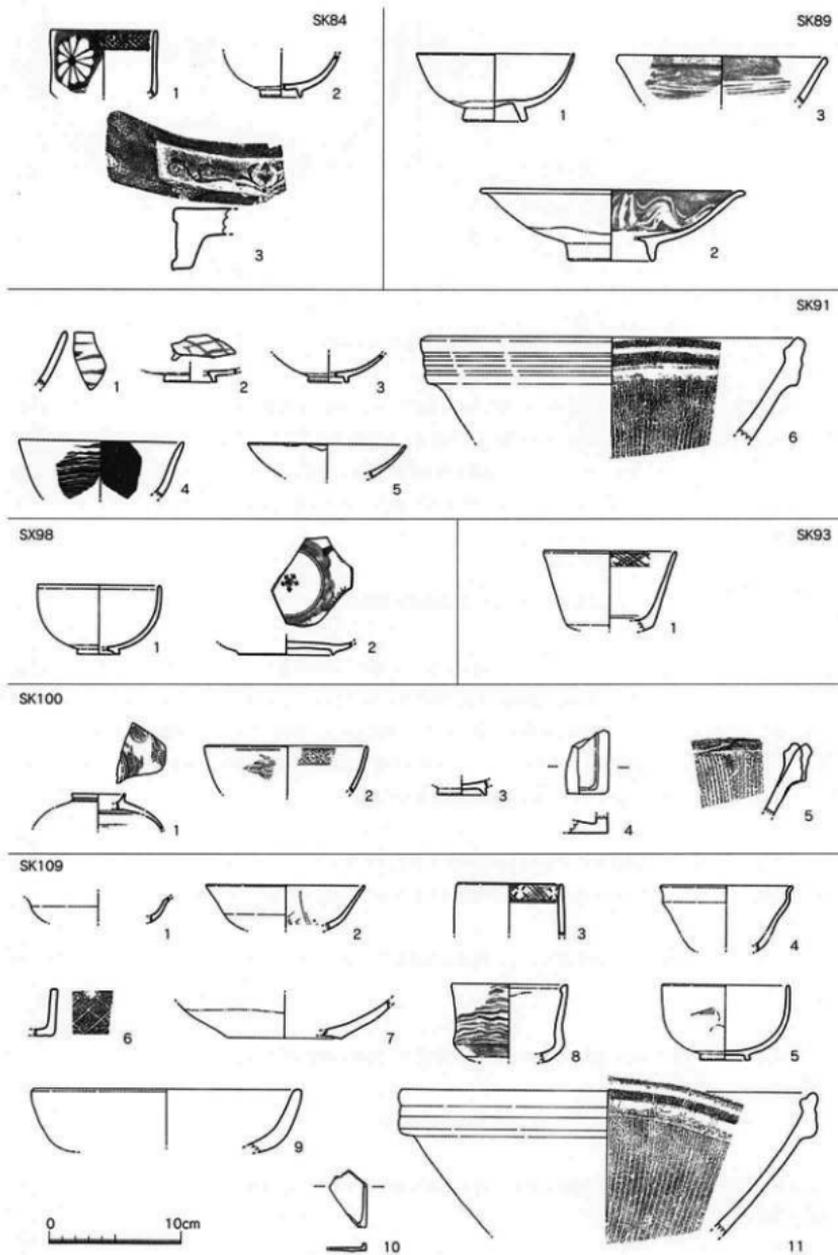
1は関西系陶器土瓶である。底径8.0cmを測る。2は同じく関西系陶器の行平鍋の把手部分である。

SX92

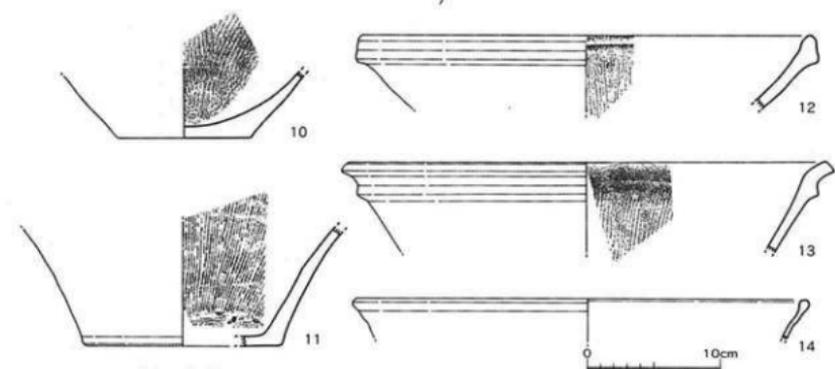
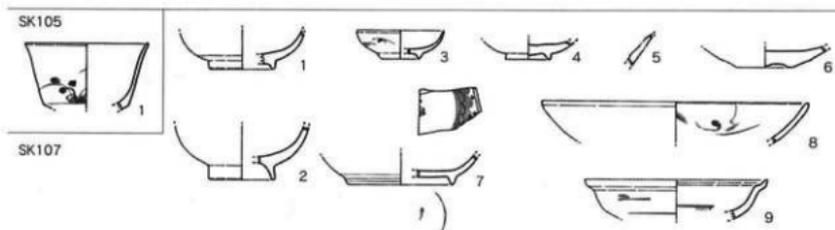
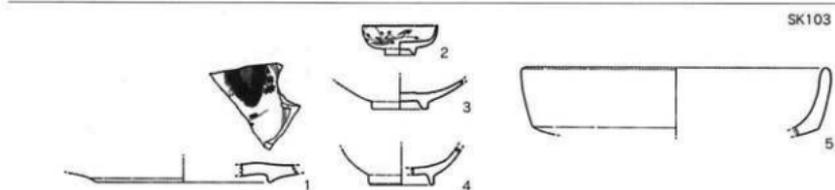
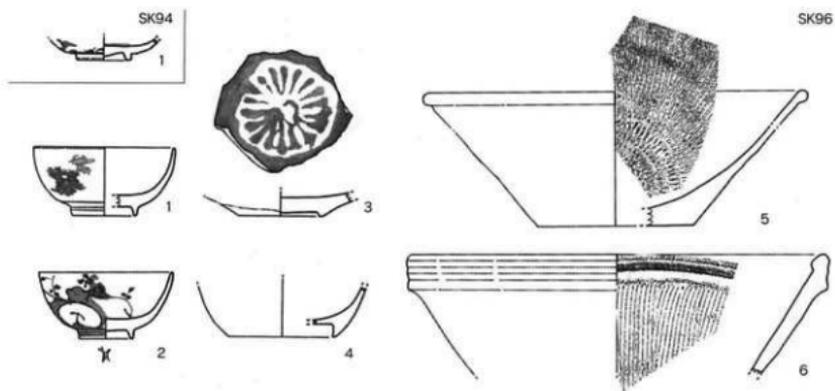
1は青磁染付碗である。四方棒、コンニャク五弁花が施される。

SK84

1は染付碗である。筒型碗で、外面に菊花、内面に四方棒が描かれる。2は京・信楽系陶器碗である。3は軒平瓦である。

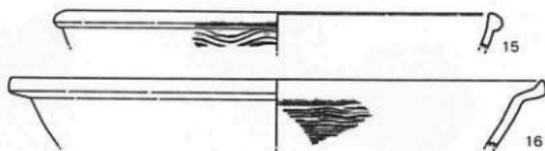


第31图 出土遺物実測図 (1/4) 2TSK84・89・91・93・100・109・SX98

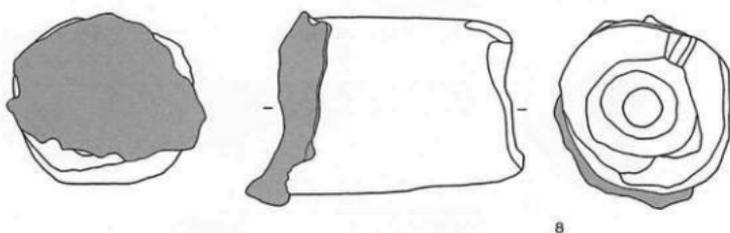
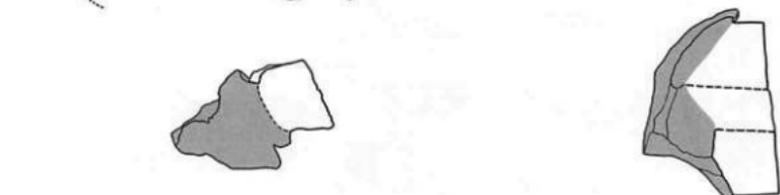
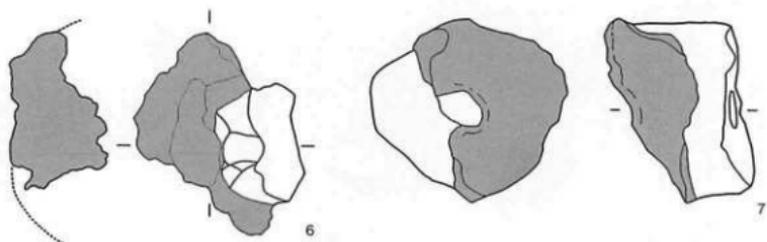
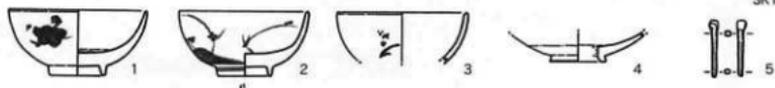


第32图 出土物实测图 (1/4) 2TSK94·96·103·105·107

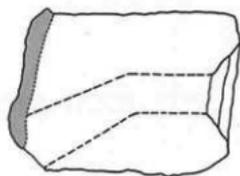
SK107



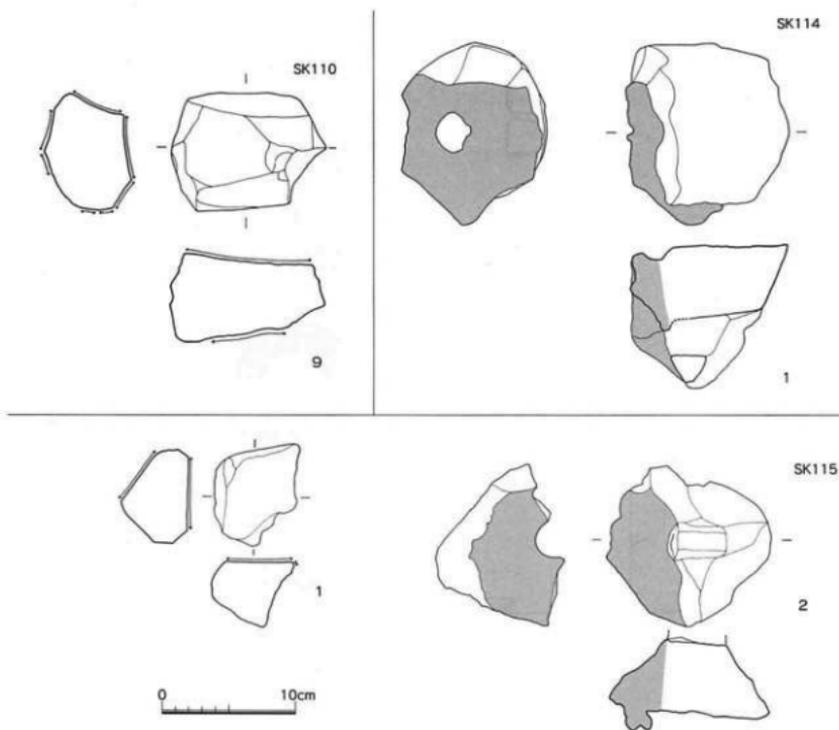
SK110



8



第33图 出土遺物実測図 (1/4) 2TSK107・110



第34図 出土遺物実測図 (1/4) 2TSK110・114・115

SK89

1は唐津系陶器皿である。内面見込み部蛇の目軸剥ぎしたものである。口径10.0cm器高5.1cm、高台径4.4cmを測る。2は同じく唐津系陶器皿で、見込み部蛇の目軸剥ぎ、内面に刷毛目が施される。口径19.8cm、器高5.3cm、高台径6.4cmを測る。3は唐津系陶器片口で、内外面に刷毛目が施される。

SK91

1は陶胎染付碗である。2・3は京・信楽系陶器碗である。4は唐津系陶器碗で、外面刷毛目・内面打刷毛目が施される。口径12.4cmを測る。5は唐津系陶器皿で、銅緑釉に見込み部蛇の目軸剥ぎのもので、内野山系の製品である。口径12.0cmを測る。6は堺産の陶器搦鉢である。口径28.0cmを測る。

SK93

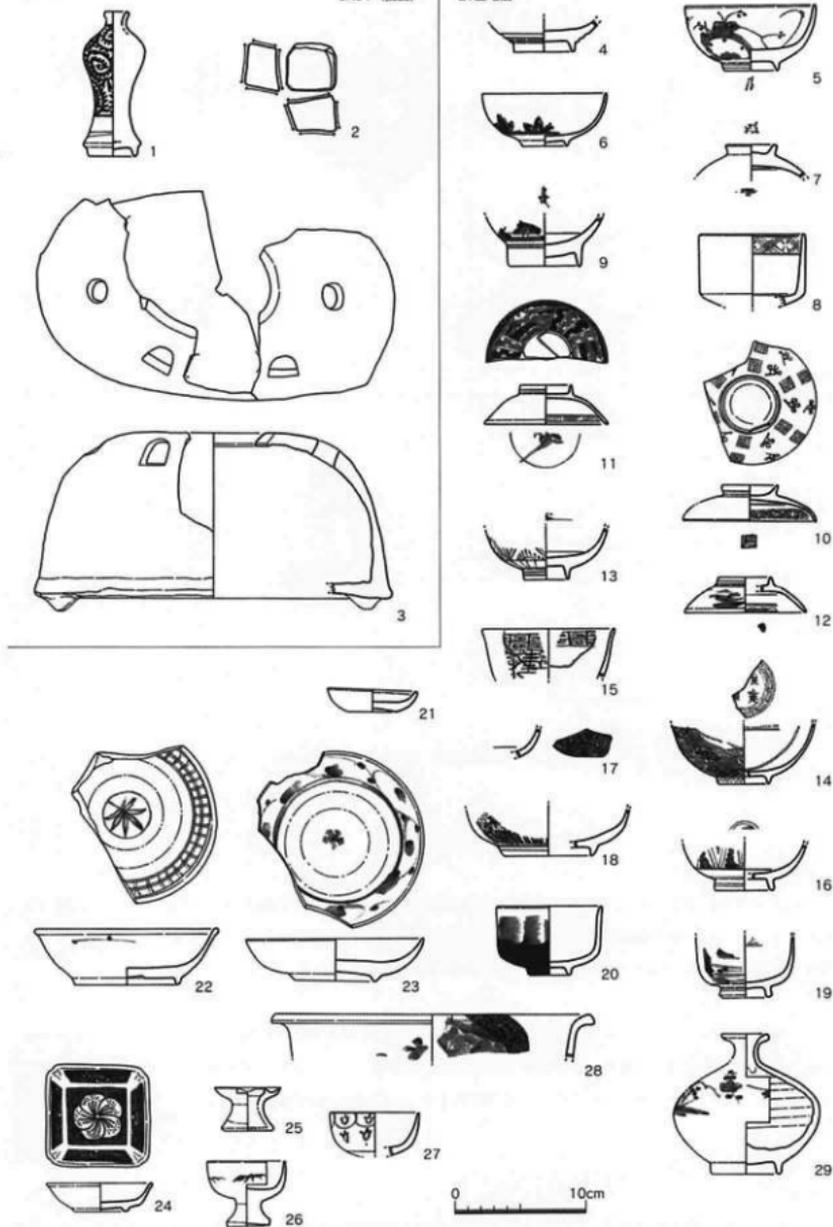
1は青磁染付碗である。

SX98

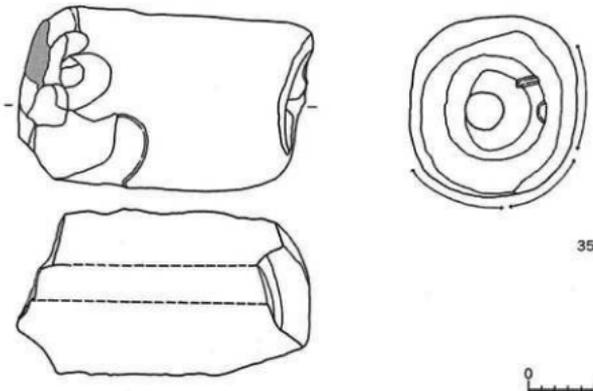
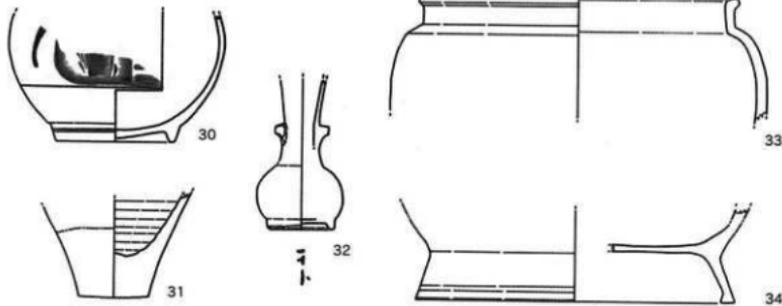
1は京・信楽系陶器碗である。口径9.2cm、器高5.2cm、高台径3.2cmを測る。2は染付皿で手描五弁花が施される。高台径7.2cmを測る。

SX01 (損乱)

2T整地層



第35図 出土遺物実測図 (1/4) 2TSX01 (損乱)・整地層



第36図 出土遺物実測図 (1/4) 2T整地層・SK70混入品

SK100

1は外面に寿文が施された染付蓋である。2はおそらく1とセットとなる碗で、外面寿文、内面四方摺が描かれる。3は京・信楽系陶器碗である。4はいわゆる赤間硯で、山口産の石である。5は堺産の陶器搥鉢である。

SK109

1は唐津系陶器皿で、砂目積段階のものである。2は京・信楽系陶器皿である。3は青磁染付碗である。4は刷毛目が施された陶器碗である。5は京・信楽系陶器碗である。口径9.6cm、器高5.7cm、高台径3.7cmを測る。6は陶器の鉢で、口縁部付近を露胎とした蓋付の形態と考えられる。7は陶器土瓶である。8は唐津系陶器香炉で、外面に刷毛目が施される。9は瓦質土器の鉢である。10は硯である。11は堺産の陶器搥鉢である。口径31.4cmを測る。

SK94

1は染付皿である。見込み部が露胎となる中国産染付で、おそらく漳州窯系のものであろう。高台径4.0cmを測る。

SK96

1はコンニャク印判による文様の染付碗である。口径10.6cm、器高5.3cm、高台径4.8cmを測る。2くらわんか手の染付碗である。高台内に「大明年製」崩れ銘が入る。口径10.2cm、器高5.2cm、高台径4.0cmを測る。3は瀬戸・美濃産陶器の型打皿である。高台径6.4cmを測る。4は唐津系陶器の瓶で、刷毛目が施される。5・6は陶器播鉢である。5が口縁部に鉄釉が施された唐津系のもので、口径28.2cm、器高10.3cm、底径11.8cmを測る。6が堺産の播鉢で、口径31.4cmを測る。

SK103

1は青磁染付皿である。2は染付紅皿である。口径5.7cm、器高2.3cm、高台径2.2cmを測る。3は唐津系陶器皿である。銅線軸に見込み部蛇の目軸刺ぎのもので、内野山系の製品である。4は唐津系陶器碗で、刷毛目が施される。5は土師質土器焙烙である。口径22.6cmを測る。

SK105

1は染付小坏である。口径9.4cmを測る。

SE107

1・2は唐津系陶器の京焼風陶器である。1は底部露胎のもので、2は呉器手碗である。3は染付紅皿である。口径6.6cm、器高2.2cm、高台径3.0cmを測る。4は高台部に砂が付着する染付碗である。5・6は唐津系陶器皿で、砂目積段階のものである。7は染付皿である。8は唐津系陶器皿である。9は陶胎染付皿である。中国漳州窯系の染付か？口径13.6cmを測る。10～13は陶器播鉢である。10は唐津系陶器播鉢である。底径10.0cmを測る。11は産地不明の播鉢である。体部が直立し、石英が器壁の表面に出た特徴的な播鉢である。底径14.4cmを測る。12は丹波産播鉢である。口径34.0cmを測る。13は唐津系陶器播鉢である。口径36.0cmを測る。14は陶器鉢である。口径35.0cmを測る。15・16は唐津系陶器鉢である。15は外面に刷毛目を施し口径32.4cmを測る。16は内面に刷毛目が施し口径40.4cmを測る。

SK110

1は見込み部が蛇の目軸刺ぎされた波佐見の染付碗である。口径10.4cm、器高5.1cm、高台径4.1cmを測る。2はくらわんか手の染付碗である。口径9.8cm、器高5.1cm、高台径4.0cmを測る。3は染付碗である。4は唐津系陶器皿である。銅線軸に見込み部蛇の目軸刺ぎのもので、内野山系の製品である。高台径4.2cmを測る。5は不明金属製品である。6～8は凝灰岩製のフイゴ羽口である。6・7は羽口でも鍛冶炉内直接ふれる先端の部分で、6は碗形滓が付着した状況のもの、7は碗形滓が付着した部分が剥がれ落ちた羽口の先端部で、上面がガラス質になっているのが観察される。8は送風管との接合部（フイゴ本体に直接付くのではなく送風管を介したものと考えられる）と思われる凹部まで残存するほぼ完形の資料である。先端部は7同様ほぼ全面ガラス質になっている。羽口の内径はそれぞれ2.9cm～3.0cmを測る。9は砥石である。きめの細かい砂岩系の材質で、7面を研ぎ面として使用している。

SK114

1は凝灰岩製フイゴ羽口である。やはり羽口の先端部と考えられるもので、ガラス質化した先端部を有する。羽口内径は2.8cmを測る。

SK115

1は砥石である。きめの細かい砂岩系の材質で、2面を研ぎ面として使用している。2は凝灰岩製フイゴ羽口である。鍛冶炉内直接ふれる先端の部分で、碗形滓が付着している。

SX01（攪乱）及び整地層出土遺物

以下、SX01とした攪乱遺構及び遺構に帰属しない整地層より出土した遺物について記す。

1～3はSX01出土遺物である。1は染付お神酒徳利である。蛸唐草が描かれる。口径1.6cm、器高11.1cm、高

トランプ料	実測器番号	報告番号	沼澤番号	P番号	種別	器種	口径	器高	底径	備考	制作年代	産地	R値	
	1	16	1		包含形	土師器	皿	(8.4)	1.7	(4.0)	底部未切り離し・煤付器	晩手・増紀前半		1
	1	128	2		包含形	土師器	皿	(8.2)	1.6	(5.4)	底部未切り離し	19世紀前半		2
	1	112	3		包含形	土師器	皿	(8.8)	(1.8)		非口口口	晩手・増紀前半		3
	1	113	4		包含形	土師器	皿	(8.8)	(1.4)		非口口口	晩手・増紀前半		4
	1	120	5		包含形	陶器	皿	(11.6)	4.5	(4.1)	見込み蛇の目輪割ぎ	1690～1760	肥前	5
	1	25	6		包含形	陶器	皿			(4.2)	見込み蛇の目輪割ぎ・麻線輪	1690～1760	肥前	6
	1	26	7		包含形	陶器	碗				蓋白輪	18世紀後半～	萩	7
	1	20	8		包含形	染付	碗	(8.6)	3.9	(2.8)	くらわんか手	1680～1740	波佐見	8
	1	71	9		包含形	染付	碗	8.6	4.1	3.6	くらわんか手・大明年製丸蓋・口縁白付口縁上げ	1680～1740	波佐見	9
	1	8	10		包含形	5 染付	碗	9.1	4.1	3.6	くらわんか手・大明年製丸蓋・口縁白付口縁上げ	1680～1740	波佐見	10
	1	6	11		包含形	1 染付	碗	9.1	4.0	3.6	梅樹文・黄色悪い	1680～1740	波佐見	11
	1	73	12		包含形	染付	碗	8.3	4.4	3.5	くらわんか手・大明年製丸蓋	1680～1740	波佐見	12
	1	74	13		包含形	染付	碗	8.1	4.1	3.6	くらわんか手・大明年製丸蓋・黄色悪い	1680～1740	波佐見	13
	1	7	14		包含形	2 染付	碗	8.5	4.2	3.3	くらわんか手・大明年製丸蓋・口縁白付口縁上げ	1680～1740	波佐見	14
	1	19	15		包含形	染付	碗	9.1	4.1	3.6	くらわんか手・大明年製丸蓋	1680～1740	波佐見	15
	1	21	16		包含形	染付	碗	(9.0)	4.5	(3.4)	くらわんか手	1680～1740	波佐見	16
	1	9	17		包含形	6 染付	碗	8.6	4.3	3.3	くらわんか手・大明年製丸蓋・口縁白付口縁上げ	1680～1740	波佐見	17
	1	115	18		包含形	染付	碗	(9.8)	5.3	(4.1)	くらわんか手・大明年製丸蓋・中環	1680～1740	波佐見	18
	1	117	19		包含形	染付	碗	(8.2)	4.1	(3.0)	網目文	1750～1770	波佐見	19
	1	68	20		包含形	染付	碗	(8.8)	4.4	(3.9)	網目文	1750～1770	波佐見	20
	1	72	21		包含形	染付	碗	(10.9)	6.0	3.9	朝顔置蓋付碗	1750～1770	波佐見	21
	1	106	22		包含形	染付	碗	8.6				1770～1780	肥前	22
	1	91	23		包含形	染付	碗	(8.6)	5.4	(3.0)	四方弁・手掻き五弁花	1740～1780	肥前	23
	1	89	24		包含形	苜蓿染付	蓋	(9.5)			四方弁	1770～1780	肥前	24
	1	93	25		包含形	苜蓿染付	蓋	(9.2)	3.6		四方弁・コンニャク五弁花	1770～1780	肥前	25
	1	84	26		包含形	苜蓿染付	碗	(11.4)			四方弁 * 102と接合	1770～1780	肥前	26
	1	90	27		包含形	染付	蓋			(3.9)		1770～1780	肥前	27
	1	22	28		包含形	染付	碗	(7.4)	(6.0)	(3.8)	鹿形碗・コンニャク五弁花・焼成不良	1750～1770	波佐見	28
	1	92	29		包含形	染付	碗	(8.2)	5.6		鹿形碗	1770～1780	肥前	29
	1	24	30		包含形	染付	碗			3.6		1740～1780	肥前	30
	1	23	31		包含形	染付	小碗	(7.9)	3.7	(2.4)	小広東碗	1770～1780	肥前	31
	1	18	32		包含形	染付	蓋	9.4	3.0	4.9	小広東碗	1780～1810	肥前	32
	1	97	33		包含形	染付	碗	(10.2)	6.3	(5.3)	広東碗	1820～1860	波佐見	33
	1	96	34		包含形	染付	碗	(12.0)			広東碗	1780～1810	肥前	34
	1	94	35		包含形	染付	鉢			(7.4)	蛇の目白磁高台	18世紀後半～	肥前	35
	1	95	36		包含形	染付	碗			(6.2)	広東碗	1780～1810	肥前	36
	1	3	37		包含形	染付	碗			(6.3)	広東碗	1780～1810	肥前	37
	1	83	38		包含形	染付	蓋	(9.4)			薩摩	1820～1860	肥前	38
	1	33	39		包含形	染付	蓋	(8.4)			薩摩反碗蓋	1820～1860	肥前	39
	1	82	40		包含形	染付	蓋	(8.6)			薩摩反碗蓋	1820～1860	肥前	40
	1	81	41		包含形	染付	蓋	(9.1)			薩摩反碗蓋	1820～1860	肥前	41
	1	114	42		包含形	染付	蓋	(8.8)			薩摩反碗蓋	1820～1860	肥前	42
	1	88	43		包含形	染付	蓋	(9.0)	3.0		薩摩反碗蓋	1820～1860	肥前	43
	1	87	44		包含形	染付	碗	(10.8)			薩摩反碗蓋	1820～1860	肥前	44
	1	103	45		包含形	染付	碗	(10.7)			薩摩反碗蓋	1820～1860	肥前	45
	1	76	46		包含形	染付	碗	(9.3)	5.4	(3.6)	薩摩反碗蓋	1820～1860	肥前	46
	1	104	47		包含形	染付	碗	(7.2)	5.5	3.3	筒丸碗	1820～1860	肥前	47
	1	15	48		包含形	染付	小坏	(8.8)	4.5	(3.6)	薩摩反碗蓋	19世紀前半	瀬戸・美濃	48
	1	14	49		包含形	2 染付	小坏	(9.6)	(3.1)		薩摩反碗蓋	19世紀前半	瀬戸・美濃	49
	1	105	50		包含形	白磁	碗	(7.3)	5.3	3.8				50
	1	99	51		包含形	白磁	紅皿	4.7	1.3	1.4		1840～1860	肥前	51
	1	13	52		包含形	1 染付	紅皿	6.6	3	2.6	笹文	1820～1860	肥前	52
	1	123	53		包含形	染付	紅皿	(8.0)	3.8	(3.4)	笹文	晩手・増紀前半	肥前	53
	1	124	54		包含形	染付	紅皿	7.6	3.3	3.0	弁折	晩手・増紀前半	肥前	54
	1	2	55		包含形	染付	皿			(7.2)	手掻五弁花+「大明年製」銘	1700～1740	肥前	55
	1	1	56		包含形	染付	皿	(10.3)	2.5	5.8	「大明年製」銘	1700～1740	肥前	56

表 1

ナンバ	実測番号	図番	種別	口徑	高さ	底径	備考	制作年代	産地	R番		
1	125	57	包含彫	缺付	皿 (10.3)	2.6 (6.4)	輪花・成化(年款)銘	1780~1850	肥前	57		
1	119	58	包含彫	缺付	皿 (9.2)	2.0 (4.7)	口紅・輪花	1640~1650	肥前	58		
1	69	59	包含彫	缺付	皿			18世紀前半~中頃	肥前	59		
1	107	60	包含彫	缺付	皿 (11.6)		大(明成化)年(製)銘	1650~1690	肥前	60		
1	121	61	包含彫	缺付	皿 (14.0)	3.8 (8.0)	蛇の目凹盤高台	1810~1820	肥前	61		
1	4	62	包含彫	缺付	皿		蛇の目凹盤高台	1810~1850	肥前	62		
1	122	63	包含彫	缺付	皿		蛇の目凹盤高台	1740~1780	肥前	63		
1	134	64	東置面	缺付	皿		鳥形		肥前	64		
1	5	65	包含彫	缺付	鉢	14.0	6.7	7.4	八角鉢	1820~1850	肥前	65
1	116	66	包含彫	白磁	香炉			(7.4)	蛇の目凹盤高台		肥前	66
1	127	67	包含彫	缺付	補口	(7.2)	6.3 (5.6)		蜻蛉草・蛇の目凹盤高台	1820~1850	肥前	67
1	109	68	包含彫	缺付	仏飯鉢			3.6		1690~1780	肥前	68
1	96	69	包含彫	缺付	鉢			(6.9)	蜻蛉草・〇×文	1690~1780	肥前	69
1	108	70	包含彫	尙磁	香炉	(13.0)					肥前	70
1	118	71	包含彫	陶器	鉢	(8.6)	6.7 (3.4)			18世紀後半~	京・信濃	71
1	111	72	包含彫	陶器	皿			4.6	享徳寺島陶器又は京焼・足ハマ裏アリ	18世紀後半~	京焼	72
1	80	73	包含彫	陶器	灯火具	(11.2)	2.3 (4.8)		藤目・足ハマ裏	18世紀後半~	京・信濃	73
1	77	74	包含彫	陶器	灯火具	(10.5)	1.9 (3.4)		受付皿	18世紀後半~	京・信濃	74
1	86	75	包含彫	陶器	灯火具	(5.0)	5.4	2.2	ひょうそく	18世紀後半~	関西	75
1	101	76	包含彫	陶器	鉢			4.8		18世紀後半~	関西	76
1	85	77	包含彫	陶器	皿	(17.2)			行平鍋蓋	18世紀後半~	関西	77
1	110	78	包含彫	陶器	皿	(13.7)			行平鍋	18世紀後半~	関西	78
1	10	79	包含彫	陶器	蓋	5.9	3.8	9.2	土原蓋	18世紀後半~		79
1	75	80	包含彫	陶器	蓋	9.3	2.3		土原蓋	18世紀後半~	肥前	80
1	12	81	包含彫	陶器	蓋	5.5	2.2	1.9	急須蓋	18世紀後半~	関西	81
1	11	82	包含彫	陶器	急須	(5.8)	(5.5)	8.6		18世紀後半~	関西	82
1	32	83	包含彫	陶器	壺				T字状口縁部	17世紀後半	肥前	83
1	126	84	包含彫	陶器	榎木鉢	(10.8)	6.5 (4.8)			1690~1750	瀬戸・美濃	84
1	67	85	包含彫	陶器	鉢			13.8	剛毛目	1690~1750	肥前	85
1	78	86	包含彫	陶器	鉢					1690~1750	肥前	86
1	100	87	包含彫	陶器	磁鉢					1690~1750	肥前	87
1	79	88	包含彫	陶器	磁鉢	(36.0)				1690~1750	肥前	88
1	17	89	包含彫	陶器	磁鉢					1690~1750	肥前	89
1	29	90	包含彫	土師器	焙烙				取っ手穿孔アリ	18世紀前半~中頃	在地	90
1	30	91	包含彫	土師器	焙烙					18世紀前半	在地	91
1	31	92	包含彫	土師器	焙烙					18世紀前半	在地	92
1	135	93	包含彫	土師器	焙烙					18世紀前半~中頃	在地	93
1	65	94	包含彫	土師器	火鉢	23.1			印花文			94
1	27	95	包含彫	土師器	椀付付	4.5	4.2		縁・表面に筋輪が分かる?		関西	95
1	129	96	包含彫	瓦	軒平瓦							96
1	136	97	包含彫	瓦	軒平瓦							97
1	28	98	包含彫	銅	キセル							98
1	131	99	包含彫	銅	キセル							99
1	132	100	包含彫	銅	キセル							100
1	133	101	包含彫	銅	キセル							101
1	70	102	包含彫	銅	蓋	10.0	2.1	12.1				102
1	130	103	包含彫	銅	蓋							103
1	137	104	包含彫	銅	蓋							104
1	140	105	包含彫	銅	蓋				「真永通宝」古真永	1636~1697		107
1	139	105	包含彫	銅	蓋				「真永通宝」文蓋	1668~1697		105
1	141	106	包含彫	銅	蓋				「真永通宝」	1697~1739		106
1	138	107	包含彫	銅	蓋				「真永通宝」	1697~1739		108
1	38	108	ST 1	土師器	皿	9.0	1.9	5.2	底部糸切り難し・窪付部	18世紀中頃	在地	109
1	42	110	ST 1	陶器	皿	12.5	4.8	4.3	見込み蛇の目輪削ぎ	1690~1780	肥前	110
1	43	111	ST 1	陶器	皿	11.5	4.6	4.7	見込み蛇の目輪削ぎ	1690~1780	肥前	111
1	44	112	ST 1	陶器	皿	(11.8)	(4.8)	(4.2)	見込み蛇の目輪削ぎ	1690~1780	肥前	112

表 2

ナンバ	実測番号	報告番号	品目番号	品名	種類	口径	器高	底径	備考	制作年代	産地	R値	
1	50	113	ST 1	陶器	皿	(12.4)	4.6	(4.2)	見込み蛇の目軸刺ぎ	1690～1780	肥前	113	
1	55	114	ST 1	陶器	皿	(12.0)	4.5	(4.5)	見込み蛇の目軸刺ぎ	1690～1780	肥前	114	
1	56	115	ST 1	陶器	皿	(12.9)	4.3	(4.2)	見込み蛇の目軸刺ぎ	1690～1780	肥前	115	
1	57	116	ST 1	陶器	皿	(12.2)	4.5	(4.2)	見込み蛇の目軸刺ぎ・二次被蝕	1690～1780	肥前	116	
1	62	117	ST 1	陶器	鉢	(16.8)			見込み蛇の目軸刺ぎ・刷毛目	1690～1750	肥前	117	
1	66	118	ST 1	陶器	片口	(16.5)			刷毛目	1690～1750	肥前	118	
1	61	119	ST 1	陶器	鉢			(5.3)	見込み蛇の目軸刺ぎ・刷毛目	1690～1750	肥前	119	
1	37	120	ST 1	陶器	鉢	(29.4)						120	
1	36	121	ST 1	陶器	碗	(12.2)				17世紀後半～幕手	茨城	121	
1	63	122	ST 1	曲輪染付	小皿	(7.1)					1710～1740	肥前	122
1	35	123	ST 1	染付	碗	10.1	3.9	4.2	磨崖文・見込み蛇の目軸刺ぎ	1750～1770	濃佐見	123	
1	46	124	ST 1	染付	碗			4.4	くらわんか手・大明年製附れ路	1680～1740	濃佐見	124	
1	34	125	ST 1	染付	碗	(12.0)	5.6	(4.6)	磨崖・刷毛目・見込み蛇の目軸刺ぎ・コンニャク五弁花	1620～1860	濃佐見	125	
1	53	126	ST 1	染付	碗	(10.7)	5.5	(3.9)	見込み蛇の目軸刺ぎ	1680～1740	濃佐見	126	
1	45	127	ST 1	染付	碗	11.0	5.4	4.2	見込み蛇の目軸刺ぎ	1680～1740	濃佐見	127	
1	54	128	ST 1	染付	碗	(10.8)	5.5	(4.2)	見込み蛇の目軸刺ぎ	1680～1740	濃佐見	128	
1	39	129	ST 1	染付	碗			3.9	見込み蛇の目軸刺ぎ	1680～1740	濃佐見	129	
1	48	130	ST 1	染付	皿	(13.4)	2.6	(7.6)	見込み蛇の目軸刺ぎ・コンニャク五弁花	1680～1740	濃佐見	130	
1	47	131	ST 1	染付	皿	(13.4)	2.7	7.2	見込み蛇の目軸刺ぎ・コンニャク五弁花	1680～1740	濃佐見	131	
1	52	132	ST 1	染付	皿	(13.8)	2.6	(7.3)	見込み蛇の目軸刺ぎ・コンニャク五弁花	1680～1740	濃佐見	132	
1	51	133	ST 1	染付	皿	(13.4)	2.7	(7.6)	見込み蛇の目軸刺ぎ・コンニャク五弁花	1680～1740	濃佐見	133	
1	50	134	ST 1	染付	皿	(13.4)	2.8	(7.6)	見込み蛇の目軸刺ぎ・コンニャク五弁花	1680～1740	濃佐見	134	
1	49	135	ST 1	染付	皿	(13.8)	2.3	(7.2)	見込み蛇の目軸刺ぎ・コンニャク五弁花	1680～1740	濃佐見	135	
1	59	136	ST 1	陶胎染付	碗	(11.0)				18世紀前半～中頃	肥前	136	
1	60	137	ST 1	陶胎染付	碗	(10.2)				18世紀前半～中頃	肥前	137	
1	41	138	ST 1	土師器	燗焼				取っ手穿孔ざりざり貫通		在地	138	
1	40	139	ST 1	土師器	燗焼					18世紀前半～中頃	在地	139	
1	64	140	ST 1	調	おろし釜	23.0	11.5			18世紀～		140	

表 3

台径3.6cmを測る。2は砥石である。きめの細かい砂岩系の材質で、6面を研ぎ面として使用している。3は瓦質土器の行火である。上面に大きな穿孔を有し、胴部には円形とかまぼこ型のスカシを有する。

4～34は整地層出土の遺物である。4は陶器碗である。5はくらわんか手の染付碗である。口径9.8cm、器高5.1cm、高台径4.0cmを測る。6は染付小丸碗である。口径9.4cm、器高4.0cm、高台径3.4cmを測る。7・8は青磁染付の蓋と碗である。コンニャク五弁花及び四方棒が見られる。9は染付広東碗である。10は染付蓋である。口径10.0cm、器高2.7cm、つまみ径4.2cmを測る。11・12は端反碗蓋である。特に11には焼離の痕跡が確認できる。法量は口径9.2～9.4cm、器高2.7cm～3.0cm、つまみ径3.8cmを測る。14～17は端反碗である。内14・15・17には焼離の痕跡が残る。口径10.0cm、高台径3.4～4.4cmを測る。21は陶器皿である。口径6.8cm、器高1.7cm、高台径3.6cmを測る。22・23は共に波佐見の染付皿で、見込み部蛇の目軸刺ぎが施されている。口径13.5～13.6cm、器高3.3～4.3cm、高台径6.2～7.8cmを測る。24は瀬戸・美濃産染付皿である。口径8.0cm、器高2.2cm、高台径4.0cmを測る。25は京・信楽系陶器灯火具で、台付の受付皿である。口径5.0cm、器高3.3cm、高台径3.6cmを測る。26・27は染付仏飯器である。口径5.8～6.8cm、器高5.1cm、高台径3.2cmを測る。28は染付鉢である。29は染付の油壺である。口径3.5cm、器高10.8cm、高台径5.0cmを測る。30は染付壺である。31は陶器壺である。底部糸切り磨して、底径5.4cmを測る。32は陶器の花瓶である。高台径4.7cmを測る。33は唐津系陶器壺である。34は瓦質土器燗焼である。高台径24.0cmを測る。

SK70混入品

35はSK70の混入品である。おそらくSE107と切合い関係からこの遺物が掻上げられたものと考えられることから、遺構に帰属しないこれら遺物群の中で紹介する。

トシ/料	実測回数	標高	道幅	P番号	種別	器種	口径	器高	底径	備考	制作年代	産地	R番
2	23	1	17		土師器	皿			(3.0)	施軸かわらけ	19世紀前半~中頃		141
2	9	2	17		陶器	碗	(8.0)				18世紀後半~	京・徳楽	142
2	21	3	17		陶器	碗			(3.0)		18世紀後半~	京・徳楽	143
2	18	4	17		染付	碗	9.0				1770~1780	肥前	144
2	15	5	17		丹組染付	蓋	(8.8)	3.0	(3.6)		1770~1780	肥前	145
2	6	6	17		丹組染付	碗			4.0	コンニャク五弁花?	1770~1780	肥前	146
2	5	7	17		丹組染付	碗			4.2	コンニャク五弁花・渦巻	1770~1780	肥前	147
2	14	8	17		染付	蓋	(10.0)	2.6	4.2	〇×文様	1690~1780	肥前	148
2	16	9	17		染付	蓋			(3.8)	鏡反碗	1820~1860	肥前	149
2	3	10	17		染付	碗	(10.0)			鏡反碗	1820~1860	波佐見	150
2	13	11	17		白磁	紅皿	5.0	1.5	1.4		1840~1860	肥前	151
2	7	12	17		染付	紅皿	(6.0)	2.1	3.2	雷文	1820~1860	肥前	152
2	8	13	17		染付	紅皿	(5.9)	2.1	2.8	雷文	1820~1860	肥前	153
2	20	14	17		染付	皿			(6.0)	初階伊万里	17世紀前半	肥前	154
2	17	15	17		染付	皿	(12.4)	3.2	7.8	蛇の目凹盤高台/輪花	1780~1860	肥前	155
2	19	16	17		染付	皿	(14.0)	4.5	(8.0)		1750~1810	波佐見	156
2	4	17	17		白磁	皿	(10.0)	1.9	(5.8)	寿文	19世紀前半~後半	瀬戸・美濃	157
2	11	18	17		陶器	皿	(7.2)	1.8	(3.6)				158
2	12	19	17		染付	仏花瓶			(3.0)		1780~1860	肥前	159
2	1	20	17		丹組	香炉	(7.2)	5.7	3.2	内面露胎	1780~1860	肥前	160
2	2	21	17		丹組	香炉	(10.6)			内面露胎		肥前	161
2	22	22	17		丹組	香炉			(6.0)				162
2	10	23	17		陶器	土瓶	(8.0)			鉄輪	18世紀後半~	九州	163
2	26	24	17		陶器	土瓶			(13.6)	内面露胎	19世紀前半~後半	瀬戸・美濃	164
2	30	25	17		陶器	溜鉢	(23.6)	9.8	(10.4)		19世紀前半~中頃	肥前	165
2	25	26	17		陶器	溜鉢						不明	166
2	24	27	17		陶器	水指	(9.4)	5.5	(10.0)			備前?	167
2	29	28	17		陶器	壺	(23.0)			刷毛目		肥前	168
2	27	29	17		土師器	燈炉							169
2	28	30	17		土師器	燈炉	(21.4)						170
2	32	31	17		瓦	軒平瓦							171
2	31	32	17		瓦	軒平瓦							172
2	33	33	17		瓦	軒平瓦							173
2	9	1	20	8	色絵染付	小坏	6.2	2.7	2.2	内面「鶴崎 高周園□□」	19世紀前半~中頃	肥前	174
2	5	2	20	20	染付	皿	(10.2)	2.4	(6.2)	線描/渦巻	1820~1860	肥前	175
2	13	3	20	14	白磁	皿	(10.0)	(2.0)	(7.0)	寿文	19世紀前半~後半	瀬戸・美濃	176
2	6	4	20	4・21	陶器	鉢	13.6	4.1	5.4	銀巴アリ			177
2	7	5	20	11	染付	皿	22.2	5.5	13.0	「製化年製」/角皿	1820~1860	肥前	178
2	12	6	20	14	染付	蓋	(9.8)	(2.5)	(3.8)	鏡反り碗	1870~1890	瀬戸・美濃	179
2	4	7	20	陶器	蓋	8.1	3.7	2.6	土瓶蓋	18世紀後半~	関西	180	
2	10	8	20	陶器	蓋			(6.8)	土瓶蓋	18世紀後半~	関西	181	
2	11	9	20	12	陶器	蓋	(11.4)	3.3	3.0	行平蓋			182
2	17	10	20	陶器	行平蓋						18世紀後半~	関西	183
2	15	11	20	陶器	仏花瓶				3.0	線輪			184
2	16	12	20	20	染付	酒罎			4.9	線輪アリ・線輪文字「□□」			185
2	14	13	20	陶器	灯火皿	5.4	3.5	3.6	台付受皿	19世紀前半~後半	京・徳楽	186	
2	8	14	20	9	染付	榎木鉢	12.2	10.1	7.8	内面及び高台内黒胎			187
2	1	15	20	瓦	瓦土器	鉢	(39.6)	12.8	(28.0)			在地	188
2	3	16	20	3	陶器	溜鉢	(31.2)	13.1	12.0	重焼・鉄胎高台内を除く全面	18後半~19世紀	肥前	189
2	2	17	20	19	陶器	溜鉢	(29.2)	14.0	12.4	重焼・鉄胎高台内を除く全面	18後半~19世紀	肥前	190
2	16	1	28	土師器	皿	(7.0)				施軸かわらけ	19世紀前半~中頃	在地	191
2	17	2	28	土師器	皿	(7.0)				施軸かわらけ	19世紀前半~中頃	在地	192
2	23	3	28	染付	小坏				2.6				193
2	12	4	28	染付	小坏	(7.0)					1870~1890	瀬戸・美濃	194
2	15	5	28	染付	小坏	(6.8)	4.5	(3.0)			1870~1890	瀬戸・美濃	195
2	18	6	28	染付	蓋	9.5	2.7	3.8	線輪	1820~1860	肥前	196	
2	11	7	28	染付	碗	(8.8)	4.1	(3.0)				肥前	197
2	8	8	28	染付	碗	(10.0)	5.8	3.4	鏡反碗	1850~1860	肥前	198	
2	14	9	28	染付	碗					焼成不良・鏡反碗	1820~1860	波佐見	199

表 4

トイ分類	実測番号	報告番号	通称番号	P番号	種別	器種	口径	器高	底径	備考	制作年代	産地	R番
2	3	10	28		円磁	皿	7.4	2.2	4.0				200
2	4	11	28		円磁	皿	(7.4)	2.2	(4.0)				201
2	7	12	28		染付	皿	10.2	2.2	5.5		1780~1860	肥前	202
2	19	13	28		染付	皿	10.0	2.5	5.4	繪花	1780~1860	肥前	203
2	2	14	28		染付	皿	10.0	2.1	5.5	獅子	1870~1890	瀬戸・美濃	204
2	1	15	28		染付	皿	9.8	2.1	4.9	獅子・砂が付番	1870~1890	瀬戸・美濃	205
2	5	16	28		染付	皿	(9.6)	2.2	4.8	羯輪のかけ分け	1870~1890	瀬戸・美濃	206
2	9	17	28		陶器	蒸	6.7		2.6	急須蒸		関西	207
2	21	18	28		陶器	土瓶			6.9		18世紀後半~	関西	208
2	13	19	28		染付	楕口			(3.6)				209
2	24	20	28		染付	仏飯箱					1690~1780	肥前	210
2	10	21	28		円磁	香炉			(5.4)	内面露胎			211
2	22	22	28		染付	れんげ				裏面露胎のみ露胎			212
2	20	23	28		染付	酒器			5.0				213
2	6	24	28		陶器	指鉢			(14.6)		18後半~19世紀	肥前	214
2	2	1	59		陶器	碗			3.2		18世紀後半~	京・信濃	215
2	1	2	59		染付	皿	(16.0)				1740~1780	肥前	216
2	3	3	59		染付	皿	(13.2)	3.6	(7.4)	コンニャク五弁花・渦巻	1750~1810	津佐兜	217
2	4	4	59		染付	皿			(14.0)	ハリ支え		肥前	218
2	1	1	13		染付	碗			(7.2)	広東碗	1810~1840	肥前	219
2	2	2	13		染付	碗			(7.2)	鰻反碗	1850~1860	肥前	220
2	1	1	15		染付	碗	(12.0)			鰻反碗	1820~1860	肥前	211
2	2	2	15		円磁	香炉			2.7			肥前	222
2	1	1	60		染付	碗				講文	1700~1750	肥前	223
2	3	2	60		染付	碗	(11.0)			壽文・四方寿	18世紀後半~	肥前	224
2	2	3	60		染付	皿			(8.0)		1700~1750	肥前	225
2	3	1	62		染付	蒸	(9.0)			鰻反碗蒸	1850~1860	肥前	226
2	6	2	62		染付	碗	(10.0)			鰻反碗	1850~1860	津佐兜	227
2	4	3	62		染付	碗	(10.0)			鰻反碗	1850~1860	肥前	228
2	5	4	62		染付	碗	(10.0)			鰻反碗	1850~1860	津佐兜	229
2	2	5	62		染付	楕口			4.6	焼線アリ・「口町 口屋」	1850~1860	肥前	230
2	1	6	62		染付	皿	(19.4)	6.4	9.8	八角皿・焼線アリ	1850~1860	肥前	231
2	1	1	63		染付	碗	(6.9)	5.0	2.8	高丸碗	1850~1860	肥前	232
2	2	2	63		染付	碗	(8.4)	4.2		半球形碗	1820~1860	津佐兜	233
2	6	3	63		陶器	碗			4.6			肥前	234
2	9	4	63		染付	碗	(11.5)			焼線アリ・鰻反碗	1820~1860	肥前	235
2	4	5	63		染付	蒸	(9.4)	3.0	(4.0)	鰻反碗蒸	1820~1860	肥前	236
2	10	6	63		白磁	紅皿	4.0	1.4	1.0		1840~1860	肥前	237
2	5	7	63		陶器	灯火具	(10.0)	2.0	4.4		18世紀後半~	京・信濃	238
2	3	8	63		染付	鉢	(14.0)	(4.8)	(7.4)	蛇の目凹形高台・足ハマ横	1820~1860	肥前	239
2	11	9	63		色絵染付	皿	6.1	2.1	3.0	陶胎・縞輪・黄輪のかけ分け			240
2	7	10	63		土師磁	燈炉	9.8	1.1		サナ			241
2	13	11	63		陶器	土瓶					18世紀後半~	九州	242
2	12	12	63		陶器	土瓶					18世紀後半~	九州	243
2	8	13	63		陶器	指鉢			(12.4)	全面鉄胎(高台器付部を除く)	18後半~19世紀	肥前	244
2	2	1	64		染付	碗	(10.0)	5.1	4.2	くらわんか手	1680~1740	肥前	245
2	4	2	64		染付	碗			4.2	くらわんか手	1680~1740	肥前	246
2	3	3	64		染付	碗	(10.0)			丸碗	1710~1750	肥前	247
2	1	4	64		陶器	碗	(9.8)	6.6	4.4	刷毛目・打刷毛目	1690~1780	肥前	248
2	5	5	64		陶器	皿			(6.0)	見込み蛇の目輪割ぎ	1780~1860	肥前	249
2	8	1	66		染付	碗	(9.2)	4.1	(4.0)	くらわんか手	1680~1740	肥前	250
2	6	2	66		円磁染付	碗			3.8	コンニャク五弁花	1780~1810	肥前	251
2	5	3	66		染付	碗	(7.8)			鰻型碗・菊花文	1780~1810	肥前	252
2	4	4	66		染付	碗	(8.8)			四方寿	1740~1780	肥前	253
2	7	5	66		染付	紅皿	(7.2)	3.9	(3.0)	莖文	1780~1860	肥前	254
2	9	6	66		染付	紅皿	(7.6)	3.8	(3.0)	莖文	1780~1860	肥前	255
2	1	7	66		染付	皿	(23.2)	(3.3)	(13.0)			肥前	256
2	2	8	66		染付	皿	(14.0)	3.7	(9.2)		1750~1810	津佐兜	257
2	3	9	66		染付	皿			(8.4)	蛇の目凹形高台	1810~1860	肥前	258

表 5

1/2分類	実用器番号	種別番号	P番号	種別	器種	口径	器高	底径	備考	制作年代	産地	R番
2	10	10	66	焼付	皿	(16.0)	2.4	(11.0)	「大明製」化(年製)」	1700~1750	肥前	259
2	21	1	68	土師器	皿	(7.8)	1.6	3.0		18世紀後半	在地	260
2	1	2	68	焼付	碗	(8.0)	6.3	(3.6)	コンニャク印判・田嶋若松	1750~1770	波佐見	261
2	3	3	68	焼付	碗	(10.6)			コンニャク印判・田嶋若松	1750~1770	波佐見	262
2	2	4	68	焼付	碗	(9.8)	5.2	4.0	コンニャク印判	1750~1770	波佐見	263
2	15	5	68	両面焼付	碗	(8.2)	6.8	4.0	四方押・コンニャク五弁花	1770~1780	肥前	264
2	14	6	68	両面焼付	碗	(12.0)			四方押	1770~1780	肥前	265
2	16	7	68	両面焼付	碗	(11.6)	6.5	3.6	四方押・コンニャク五弁花	1770~1780	肥前	266
2	4	8	68	陶器	碗			(3.4)		18世紀後半	京・信濃	267
2	5	9	68	陶器	碗	(9.0)				18世紀後半	京・信濃	268
2	12	10	68	白磁	紅血	4.0	1.4	1.2		1840~1860	肥前	269
2	7	11	68	白磁	紅血	(10.6)	2.4	5.8		1820~1860	肥前	270
2	9	12	68	焼付	皿	(11.8)	3.5	(3.8)	見込み形の目輪割ぎ	1750~1810	波佐見	271
2	8	13	68	焼付	皿	(6.8)	1.6	(4.2)		1780~1860	肥前	272
2	6	14	68	陶器	皿	(6.8)	2.2	(3.2)				273
2	13	15	68	焼付	皿	(14.4)	4.0	(7.8)	蛇の目凹形高台・手摺五弁花	1780~1820	肥前	274
2	10	16	68	焼付	仏蘭器	(6.0)	5.6	2.0	コンニャク印判	1690~1780	肥前	275
2	11	17	68	焼付	仏花器	2.4				1750~1780	肥前	276
2	23	18	68	土師器	蓋				鳥?			277
2	19	19	68	瓦質土器	火鉢				脚付(3脚)			278
2	17	20	68	焼付	鉢			4.6				279
2	18	21	68	陶器	壺	(16.0)					肥前	280
2	20	22	68	瓦	軒丸瓦							281
2	22	23	68	土師器	焼物	(35.0)				18世紀後半		282
2	5	1	70	焼付	碗				網反り網	1820~1860	肥前	283
2	4	2	70	焼付	碗	(12.4)	5.0	(4.8)	見込み形の目輪割ぎ・コンニャク五弁花	1820~1860	波佐見	284
2	8	3	70	陶器	碗	(12.8)	(6.1)	(4.4)	刷毛目	19世紀	瀬戸・美濃	285
2	10	4	70	白磁	紅血	2.2	1.1	0.8		1710~1740	肥前	286
2	3	5	70	焼付	紅血	(7.1)	3.8	3.0		1780~1810	肥前	287
2	1	6	70	焼付	紅血	7.1	3.7	2.6		1780~1810	肥前	288
2	2	7	70	焼付	紅血	7.1	3.5	2.8		1780~1810	肥前	289
2	7	8	70	焼付	皿	(6.9)	1.6	(4.0)		1780~1860	肥前	290
2	6	9	70	色絵焼付	香炉	7.0	5.2	3.4			肥前	291
2	9	10	70	陶器	蓋	(8.0)			土瓶蓋	18世紀後半	関西	292
2	14	11	70	陶器	土瓶	7.9	11.3	8.6		18世紀後半	関西	293
2	11	12	70	陶器	摺鉢	(29.2)			金面鉄輪		肥前	294
2	13	13	70	土師器	燈炉	(21.3)					肥前	295
2	12	14	70	瓦質土器	茶釜							296
2	15	15	70	瓦	軒平瓦							297
2	16	16	70	瓦	軒平瓦							298
2	17	17	70	瓦	軒平瓦							299
2	18	18	70	銅	鉢				「寛永通宝」文鉢	1698~1697		300
2	2	1	77	焼付	皿	(8.2)			網反り網蓋	1820~1860	肥前	301
2	1	2	77	両面	壺			(8.8)				302
2	3	3	77	陶器	行平鍋	(20.0)				18世紀後半	関西	303
2	2	1	78	5両面焼付	碗			4.2	「大明年製」銘	1690~1720	肥前	304
2	4	2	78	4焼付	碗	(11.8)	5.7	(5.2)	コンニャク五弁花	1820~1860	波佐見	305
2	1	3	78	2陶器	碗	13.0	6.1	4.3	刷毛目・凹凹アリ	19世紀	瀬戸・美濃	306
2	3	4	78	1焼付	皿	(13.0)	3.0	(6.8)	コンニャク五弁花・見込み形の目輪割ぎ	1820~1860	波佐見	307
2	5	5	78	3土師器	燈炉			(24.0)			在地	308
2	4	1	79	焼付	碗			3.6	蛇の目輪割ぎ	1750~1770	波佐見	309
2	3	2	79	陶器	香炉	(11.0)				18世紀前半	肥前	310
2	1	3	79	陶器	摺鉢			(15.0)		18世紀後半	肥前	311
2	2	4	79	瓦質土器	茶釜	(12.4)						312
2	3	1	86	焼付	碗	(12.0)			寿文・四方押	18世紀後半	肥前	313
2	1	2	86	陶器	皿				刷毛目	1690~1780	肥前	314
2	2	3	86	焼付	皿			6.8			肥前	315
2	1	53	陶器	土瓶		(8.0)				18世紀後半	関西	316
2	2	53	陶器	行平鍋						18世紀後半	関西	317

表 6

H/V	片割	実測回数	観音番号	遺構番号	P番号	種別	器種	口径	器高	底径	備考	制作年代	産地	R番
2	2	1	84			焼付	碗	(8.0)			筒型網・菊花文	1780~1810	肥前	318
2	1	2	84			陶器	碗			(3.0)		18世紀後半~	京・信濃	319
2	3	3	84			瓦	軒平瓦							320
2	3	1	89			陶器	皿	(10.0)	5.1	4.4	見込み鉈の目輪割ぎ	1690~1780	肥前	321
2	1	2	89			陶器	皿	(19.8)	5.3	6.4	刷毛目・見込み鉈の目輪割ぎ	1690~1780	肥前	322
2	2	3	89			陶器	片口	(15.6)			刷毛目	1690~1780	肥前	323
2	4	1	91			陶磁焼付	碗					18世紀前半	肥前	324
2	6	2	91			陶器	碗			(4.0)		18世紀後半~	京・信濃	325
2	5	3	91			陶器	碗			(3.0)		18世紀後半~	京・信濃	326
2	2	4	91			陶器	碗	(12.4)			刷毛目・打刷毛目	1690~1780	肥前	327
2	3	5	91			陶器	皿	(12.0)			見込み鉈の目輪割ぎ・銅線輪	1690~1780	肥前	328
2	1	6	91			陶器	楕鉢	(28.0)				18世紀後半~	堺	329
2	1	1	92			円磁焼付	碗			(3.8)	四方罽・コンニャク五弁花	1770~1780	肥前	330
2	1	1	93			円磁焼付	碗	(10.0)			四方罽		肥前	331
2	1	1	98			陶器	碗	(9.2)	5.2	(3.2)		18世紀後半~	京・信濃	332
2	2	2	98			焼付	皿			(7.2)	手掻五弁花		肥前	333
2	1	1	100			焼付	蓋			(4.0)	菊文・四方罽	18世紀後半~	肥前	334
2	2	3	100			陶器	碗			(3.6)		18世紀後半~	京・信濃	335
2	3	2	100			焼付	碗	(12.0)			菊文・四方罽	18世紀後半~	肥前	336
2	4	4	100			石	硯				赤陶磁		山口	337
2	5	5	100			陶器	楕鉢					18世紀後半~	堺	338
2	11	1	109			陶器	皿				唐津砂目		肥前	339
2	5	2	109			陶器	皿						京・信濃	340
2	1	3	109			円磁焼付	碗	(8.0)			四方罽	1770~1780	肥前	341
2	10	4	109			陶器	碗	(9.8)			刷毛目	1650~1690		342
2	7	5	109			陶器	碗	(9.6)	5.7	3.7		18世紀後半~	京・信濃	343
2	4	6	109			陶器	鉢				蓋付の形徳			344
2	6	7	109			陶器	土瓶					18世紀後半~	九州	345
2	2	8	109			陶器	香炉	(8.8)			刷毛目		肥前	346
2	9	9	109			瓦葺土器	鉢	(20.0)					在地	347
2	3	10	109			石	硯							348
2	8	11	109			陶器	楕鉢	(31.4)				18世紀後半~	堺	349
2	1	1	94			中国焼付	皿			(4.0)	湯州煎系・見込み露胎		中国	350
2	4	1	96			焼付	碗	(10.6)	5.3	(4.8)	コンニャク印判	1750~1770	肥前	351
2	5	2	96			焼付	碗	10.2	5.2	4.0	くらわんか手	1680~1740	肥前	352
2	3	3	96			陶器	皿			6.4	割打皿	17世紀前半	瀬戸・美濃	353
2	6	4	96			陶器	皿			(8.0)	刷毛目	1690~1780	肥前	354
2	2	5	96			陶器	楕鉢	(28.2)	(10.3)	(11.8)	底部糸切り隠し・口縁部鉄輪	1650~1690	肥前	355
2	1	6	96			陶器	楕鉢	(31.4)				18世紀	堺	356
2	5	1	103			円磁焼付	皿			(13.0)		1690~1780	肥前	357
2	1	2	103			焼付	紅藍	5.7	2.3	2.2		1710~1740	肥前	358
2	2	3	103			陶器	皿			4.2	見込み鉈の目輪割ぎ・銅線輪	1690~1780	肥前	359
2	3	4	103			陶器	碗			4.8	刷毛目	1650~1690	肥前	360
2	4	5	103			土師器	地持	(22.6)				18世紀前~中	在地	361
2	1	1	105			焼付	小坏	(9.4)				1680~1740	肥前	362
2	15	1	107			陶器	碗			(4.8)	京焼き風陶器	1690~1780	肥前	363
2	16	2	107			陶器	碗			(4.8)	京焼き風陶器兵衛手焼	1690~1780	肥前	364
2	13	3	107			焼付	紅藍	(6.6)	2.2	(3.0)		18世紀中頃	肥前	365
2	14	4	107			焼付	碗			3.4	高台に砂付題		肥前	366
2	4	5	107			陶器	皿				唐津砂目?	1610~1630	肥前	367
2	5	6	107			陶器	皿			4.2	唐津砂目	1610~1630	肥前	368
2	12	7	107			焼付	皿			(8.0)	コンニャク五弁花・「大明年製」銘	1730~1740	肥前	369
2	11	8	107			陶器	皿	(20.0)				1690~1780	肥前	370
2	3	9	107			中国焼付	皿	(13.6)			湯州煎系カ?		中国?	371
2	2	10	107			陶器	楕鉢			(10.0)	底部糸切り隠し	1650~1690	肥前	372
2	1	11	107			陶器	楕鉢			(14.4)				373
2	7	12	107			陶器	楕鉢	(34.0)				17後半~18前半	内波	374
2	6	13	107			陶器	楕鉢	(36.0)				1690~1750	肥前	375
2	8	14	107			陶器	鉢	(35.0)				17世紀前半	肥前	376

表 7

トンナリ	実測図番号	管線番号	図例番号	P番号	種別	器種	口径	高さ	底径	備考	制作年代	産地	R番
2	9	15	107		陶器	鉢	(32.4)			刷毛目	1690~1750	肥前	377
2	10	16	107		陶器	鉢	(40.4)			刷毛目	1690~1750	肥前	378
2	2	1	110		染付	碗	(10.4)	5.1	4.1	見込み蛇の目輪刺ぎ	1690~1740	浪佐兜	379
2	1	2	110		染付	碗	9.8	5.1	4.0	くらわんか手	1690~1740	肥前	380
2	3	3	110		陶器	碗	(10.0)				18世紀	京・備前	381
2	4	4	110		陶器	皿			(4.2)	見込み蛇の目輪刺ぎ・銅線輪	1690~1780	肥前	382
2	6	5	110		金銀	不胡							383
2	7	6	110		凝灰岩	羽口				縦型薄+羽口片・内径 (2.9)			384
2	8	7	110		凝灰岩	羽口				羽口先端部・内径 (2.9)			385
2	9	8	110		凝灰岩	羽口				内径 (3.0)			386
2	11	9	110		砂岩	磁石							387
2	1	1	114		凝灰岩	羽口				羽口先端部・内径 (3.0)			388
2	1	1	115		砂岩	磁石							389
2	2	2	115		凝灰岩	羽口				縦型薄+羽口片・内径 (3.0)			390
2	1	1	1		染付	お茶碗	1.6	11.1	3.6	鉄罎草	1780~1860	肥前	391
2	2	2	1		砂岩	磁石							392
2	3	3	1		瓦質土器	行火					19世紀前半~後半		393
2	13	4	盤地彫		陶器	碗			4.6				394
2	10	5	盤地彫		染付	碗	9.8	5.1	4.0	くらわんか手	1690~1740	肥前	395
2	2	6	盤地彫		染付	碗	(9.4)	4.0	3.4		1710~1750		396
2	5	7	盤地彫		荷組染付	蓋			(3.9)	コンニャク五弁花・渦橋	1770~1780	肥前	397
2	17	8	盤地彫		荷組染付	碗	(7.8)			四方押	1770~1780	肥前	398
2	25	9	盤地彫		染付	碗			5.4	広東焼	1810~1840	肥前	399
2	11	10	盤地彫		染付	蓋	(10.0)	2.7	4.2	四方押	1810~1840	肥前	400
2	19	11	盤地彫		染付	蓋	(9.4)	3.0	(3.8)	鏡反碗蓋・焼罎アリ	1820~1860	肥前	401
2	20	12	盤地彫		染付	蓋	(9.2)	2.7	(9.2)	鏡反碗蓋	1820~1860	肥前	402
2	21	13	盤地彫		染付	碗			(3.4)	鏡反碗	1820~1860	肥前	403
2	22	14	盤地彫		染付	碗			(3.8)	焼罎アリ	1820~1860	肥前	404
2	24	15	盤地彫		染付	碗	(10.0)			鏡反碗・焼罎アリ	1820~1860	肥前	405
2	18	16	盤地彫		染付	碗			(4.4)	鏡反碗	1820~1860	肥前	406
2	26	17	盤地彫		染付	碗				焼罎アリ	1820~1860	肥前	407
2	23	18	盤地彫		染付	碗			(6.6)		1820~1860	肥前	408
2	14	19	盤地彫		染付	碗			(3.6)		1820~1860	肥前	409
2	12	20	盤地彫		染付	碗	(7.8)	5.3	3.0				410
2	16	21	盤地彫		陶器	皿	6.8	1.7	3.6				411
2	3	22	盤地彫		染付	皿	(13.6)	4.3	(7.8)	蛇の目凹盤高台	1820~1860	浪佐兜	412
2	5	23	盤地彫		染付	皿	13.5	3.3	6.2	蛇の目輪刺ぎ・コンニャク五弁花	1820~1860	浪佐兜	413
2	27	24	盤地彫		染付	皿	8.0	2.2	4.0		19世紀前半~後半	瀬戸・美濃	414
2	29	25	盤地彫		陶器	灯火具	5.0	3.3	3.6	台付受付皿	19世紀前半~後半	京・備前	415
2	28	26	盤地彫		染付	仏飯器	5.8	5.1	3.2		1690~1780	肥前	416
2	15	27	盤地彫		染付	仏飯器	(6.8)					肥前	417
2	8	28	盤地彫		染付	鉢	(24.0)				1690~1780	肥前	418
2	4	29	盤地彫		染付	油燈	3.5	10.8	5.0		1690~1780	肥前	419
2	7	30	盤地彫		染付	盤			(9.0)			肥前	420
2	6	31	盤地彫		陶器	皿			5.4	底部糸切り			421
2	30	32	盤地彫		陶器	花瓶			4.7				422
2	9	33	盤地彫		陶器	壺	(24.0)					肥前	423
2	1	34	盤地彫		瓦質土器	燈炉			(24.0)				424
2	2	35	70		凝灰岩	羽口				流入品・内径 (3.0)			425

表 8

1 は凝灰岩製のフイゴ羽口である。送風管との接合部と思われる凹部まで残存するはほぼ完形の資料である。先端部は一部にガラス質化した漆が付着している部分も残るがほぼきれいな状況である。羽口の内径は3.0cmを測る。

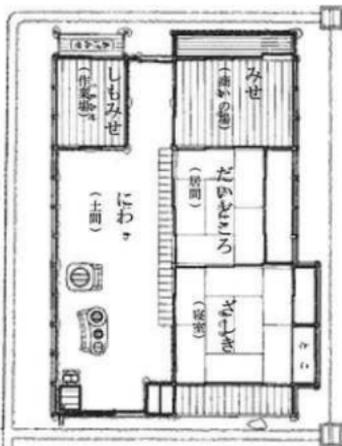
IV まとめ

以上、今回の調査成果をまとめると、三軒町のこの一角において、18世紀中頃における短冊状地割によらない鍛冶工房（小鍛冶）の段階から、18世紀後半以降の短冊状に区画された町屋への変遷の確認に集約される。このことは、古文書では知り得ない情報を考古資料をもって補填し、近世鶴崎町を構成する町筋の成立や変遷を考える上で貴重な情報となったと言える。本章は、これらの事象に関連して1. 短冊状地割の段階において2棟確認されている建物間取りの詳細復元作業、2. 鍛冶工房（小鍛冶）段階において、その位置づけを確定させるのにキーとなった石裂フイゴ羽口の詳細検討をそれぞれ行い、鶴崎三軒町の位置づけ更には、今後の近世鶴崎町全体を考える上での基礎資料とした。

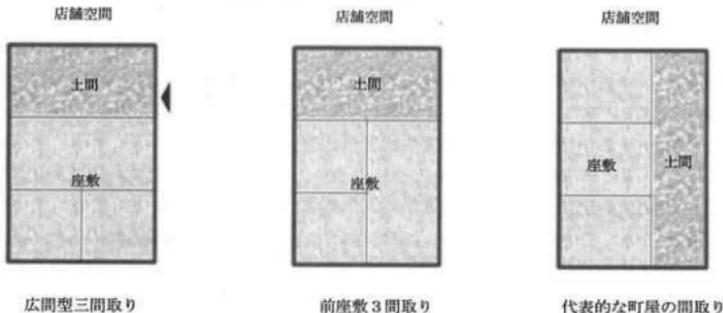
1. 建物間取りの復元

今回確認された建物は東西2棟、いずれも短冊状地割に規制された間口が狭く奥行きのある建物となっている。加えて道路に面した間口部分には共通して床面が堅く踏みしめられた土間状の空間が存在しており、これらの事象が今回の建物間取り復元にあたってのキーとなっている。

建物間取りの復元作業を行うにあたって、奈良町における町屋建物典型例を今に伝える旧井岡家住宅¹¹⁾を参考としている。参考とした旧井岡家住宅は、築造年代は江戸時代中期、規模は桁行8.6m、梁行12.7m、切り妻造で棧瓦葺（一部本瓦葺）、一部躰子2階の建物で、現在神奈川県川崎市が所有し、多摩区枳形7-1-1に所在する。本来の所在地は、奈良市下高畑町で、興福寺を中心にその南北及び西方に広がる中世から近世にかけて発展した奈良町の一角となる。奈良町は、中世段階から短冊地割化が進んでおり、間口が狭く奥行きのある町屋の敷地が認められる。このため、建物の間取りは土間に沿って1列に部屋が並ぶ形式のものが大半を占めており、旧井岡家住宅もこうした事例の典型の一つとなる。加えて井岡家の家業は、古くは油屋を営み後に線香屋に転業したといい、店舗としての機能も有していた。これらの条件から、この町屋造りの建物を今回の復元



第37図 旧井岡家住宅間取り



第38図 3間取りの典型例（古民家の基礎知識より）

作業の参考としている。

その具体的な間取りを第37図に示す。縦長の平面を縦に2分して、間口から向かって左半部には、ミセ・ダイドコロ・ザシキの3室が1列に並び、右半部には、シモミセ、ニワ（土間）がある。ミセは高い場、シモミセは作業場、ダイドコロは家族の居間、ザシキは客座敷や寝室、そして、ニワ（土間）にはカマドや井戸が描かれているのがわかる。つまり、間口に面したミセ及びシモミセが高い場であり、その奥のダイドコロ・ザシキ・ニワに私的な空間を見て取ることができるのである。

こうした旧井岡家住宅にみる間取りは、「古民家の基礎知識」⁴²（第38図）における3間取りのバリエーション中に、「代表的な町屋の間取り」として紹介されている。この3間取りには、これ以外にも「広間型3間取り」、「前座敷3間取り」といったバリエーションがある。

ここで今回検出された建物を、これらの間取りを参考に復元したのが第39図である。以下復元した2棟の建物について、西建物、東建物の順にその内容を記す。

西建物

西建物は、現在の建物境界を西端として、東建物との界を共有する形で存在するSX57西部を東端とした間口部分が7.8mを測る。更に、道路境界を兼ねたと考えられるSX58の中心部から、奥行き9.3m以上を測る。間口部分には土間と考えられる空間が存在する。土間は間口から7.8mの位置に存在する東西方向の列石（SX203）前面まで続いている。SX203は座敷の前面にある緑側の礎石又はそれに伴う列石と考えられ、その以南は座敷となる。

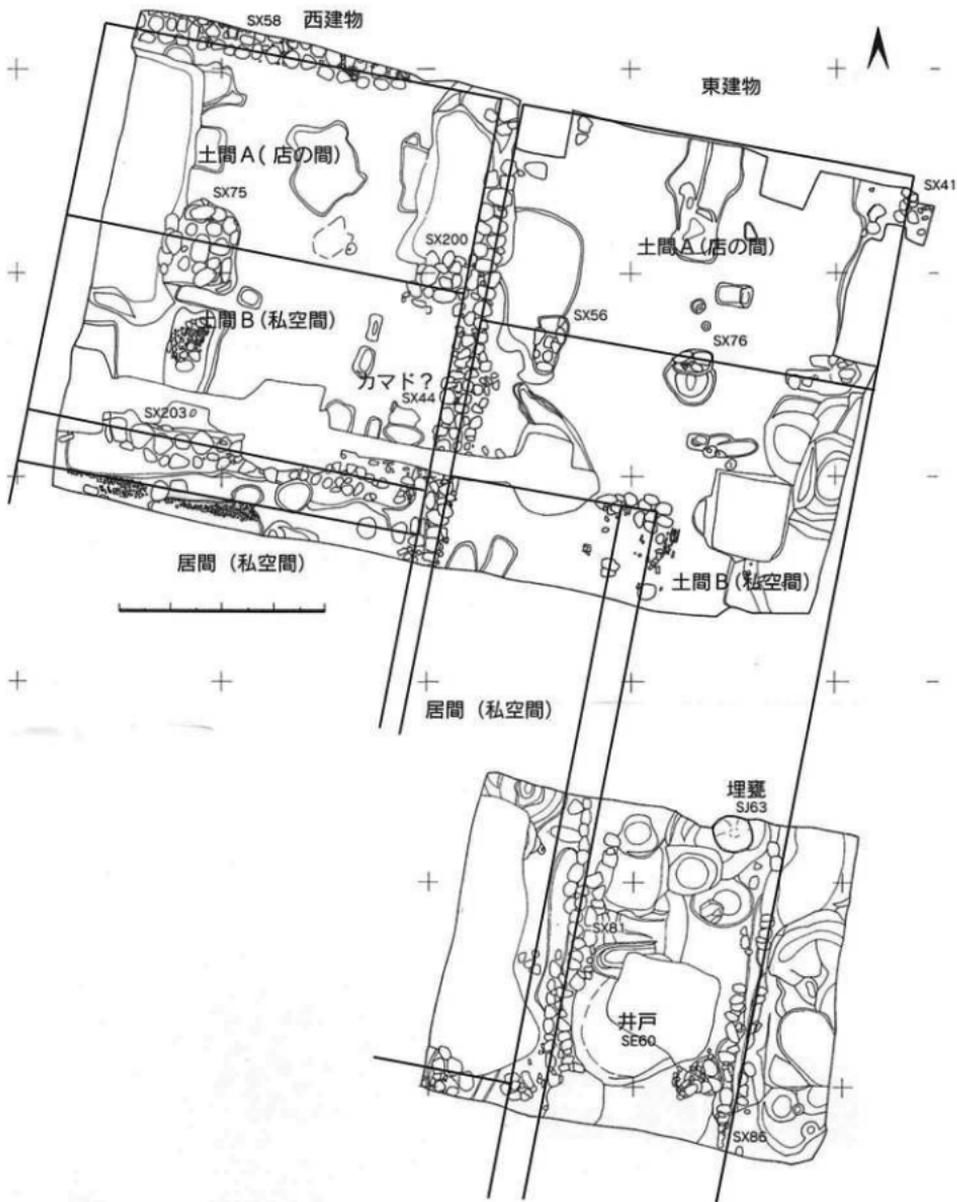
この間取りを前述した間取りのバリエーションにあてはめると、土間と座敷が並列しない広間型3間取り及び前座敷3間取りに相当することになる。しかし、今回検出された土間に関しては特別な構造が確認された。即ち、土間の中央に2つの礎石が存在し（SX75・200）、この礎石の東西ラインを境に土間が2つに分かれる可能性があるのである。これに関しては、カマド機能が推定されているSX44が、土間Bとした南側の土間に存在することがこうした推測の後押しをしている。つまり、間口に面した土間Aを店の間、奥まった土間Bを私空間として使い分けしているということである。尚、こうした考えによると、SX75・200間が4.5mを測り他の柱間より広く造られている構造は、土間A・B間の通路であったとの想定も可能である。

東建物

東建物は、西建物との境界を共有する形で存在するSX57東部を西端として、更に東側の建物との境界を共有すると考えられるSX41～86のラインを東端とした間口部分が7.7mを測る。西建物の道路境界線の延長部より奥行きは、19.4m以上を測る。間口から7.4mのラインにまでは前面に土間が想定され、それ以南は概ね、縦長の平面を縦に2分して、間口に向かって左右に座敷部分と土間の空間が分かれる。尚、奥の座敷部分の東面には緑側の礎石又はそれに伴う列石と考えられるSX81が存在し、土間部分には、煙突遺構であるSJ63、井戸であるSE60が存在する。

土間は前述した西建物同様に、その中央部にSX31・56・76とした東西方向の礎石列が存在し、このラインを境にやはり土間Aを店の間、奥まった土間Bを私空間といった使い分けが行われた可能性が考えられる。こうした場合、座敷部分を逆「L」字状に土間が囲うことになり、その間取りはどのバリエーションにも属さないことになる。しかし、前述した礎石列のSX56・76間が2.8mと他の柱間よりも広くとられていることから、この座敷北面の土間を通路的な性格と考えることもできる。こうして考えればこの東建物は、旧井岡家住宅等に見られる代表的な町屋の間取りに相当することになり、西建物同様、代表的な3間取りに店舗空間が付いたものであるとの理解も可能である。

以上今回検出された建物間取りの復元結果、2棟の建物は古民家の間取り基本型を大きく逸脱することなく、共通してその前面に店舗空間をもった形態であることが確認された。今後の課題としては、①こうした微妙な間



第39図 検出された建物の間取り復元図

取りの違いが住民の職業の違いとなって現れるかどうかといった問題。②鶴崎町と併存する府内藩の本拠としての府内町の建物間取りにもあてはまるかどうかといった問題。③肥後藩の本拠となる熊本の状態の確認等が挙げられ、いずれの問題にせよ今後重要な課題となるであろう。

注1 川崎市教育委員会「指定文化財紹介」

注2 (C)郷土文化財地図製作プロジェクト「業月」2001「古民家の基礎知識」

2. 石製フイゴ羽口について

18世紀中頃に位置づけられる遺構群から出土する遺物の中で、ひときわ目に付くのが石製フイゴ羽口である。この段階に鍛冶工房が存在したことを証明することになる要素の一つとなったこの羽口であるが、近年中世大友府内町及びその周辺遺跡で出土事例を増やしている遺物である。しかし、全国的に見ると羽口の主流は土製のものであり、その出土事例は極めて珍しく、民俗事例も少なくその実態は不明な点が多いことに気づく。以下、今回の出土事例を中心に、その形態・使用方法・出土状況・類例・鶴崎町遺跡群（三軒町）における出土の意義についてまとめ、今後の検討課題等について記す。

今回出土した石製フイゴ羽口は、ほぼ完形のものが2点、先端部と考えられる破片については、比較的良好な遺存状況で図示出来たもので4点、これ以外の小片を併せると59点に上る。

今回出土した石製フイゴ羽口の特徴は、①凝灰岩製である。（但しこれらの凝灰岩は白っぽく暗灰色を呈する通常の凝灰岩とは異なり、一見花崗岩を思わせる色合いである）②断面形は円形又はかまぼこ状に平坦部を有する円形を呈する。③外径12.4～14.0cm、内径2.8～3.0cmを測り、外見的な大きさに対し内径が小さい。④長さは17.5cm～21.7cmと一定ではない。⑤炉側となる部分にガラス質化した滓が付着する。（完形の状態で出土するものにはあまり付着しない）これに関連して、⑥羽口の先端部下位の滓が剥がれている例や、椀形鉄滓に羽口の先端部が付着する事例が多い。⑦フイゴ側となる部分には共通して、凹状の加工が施される。等が挙げられる。

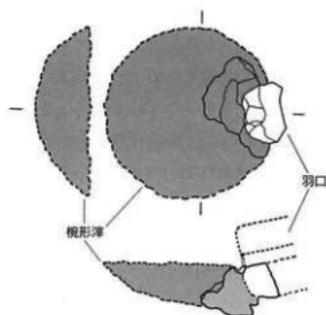
これら出土遺物から復元される使用方法については、見た目の外径の大きさに対し、内径が2.9cm前後と非常に小さく、これに伴うフイゴが、足踏み式のフイゴのような大がかりで大量の風量を送り込むものでないことがわかる。（即ちこの羽口にとまなう炉が鋳造の溶解炉や、大鍛冶にとまなう精錬炉ではない）これに加え、共存遺物に大量の椀形鉄滓（第40図）及び鍛造剥片（第41図）があることから、鍛冶（小鍛冶）に使用されたことは想像に難くない。更にSK110-6の事例に見えるよう、椀形鉄滓が付着する事例（第42図）がある点もこの羽口が、鍛冶（小鍛冶）に使用されたことを裏付けている。具体的な使用方法としては、フイゴ側となる部分の凹状加工の存在からフイゴ（箱フイゴを想定している）と羽口の間にジョイント的な竹もしくは金属製の送風管の存在が想定できる。更に椀形鉄滓が付着した羽口の状況から、半地下式で、先端部が炉内に入っていたこともわか



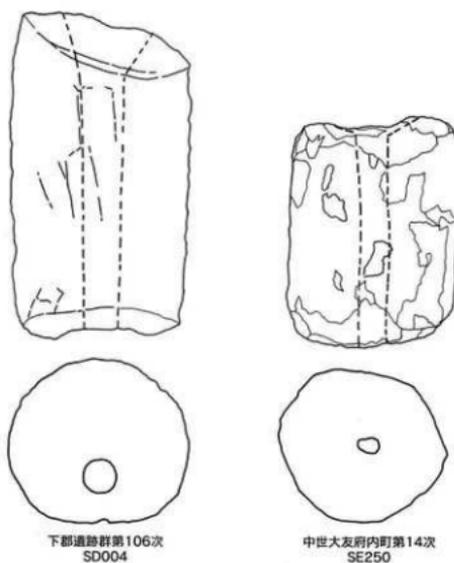
第40図 SK110出土椀形鉄滓



第41図 SK110出土鍛造剥片



第42図 楕形溝が溶着した羽口 (SK110-6 原図を元に復元)



第43図 中世期の石製羽口出土事例 (1/4)

る。(第44図上面に石製フィゴ羽口をつかったフィゴ鍛冶炉断面・平面概念図を提示)そして、完形資料に長さの違いが見られることに加え、大量に出土した先端部の破片の存在、フィゴの先端部でも下位の溝が剥がれている事例から、その操業ごとに先端部をカットし、だんだんと短くなっていく状況も推定できる。(第43図に中世段階の出土事例比較を提示)

出土状況については、SK110・114・115の鍛冶関連の廃棄土坑からの出土事例とSK70の混入品での出土事例がある。前者については前にも触れたよう炭と焼土の入った埋土中より、砥石や、大量の楕形鉄滓及び鍛造剥片と共に出土している。後者については、SK70混入品としているが、SK70が18世紀中頃の井戸であるSE107を切っ

造られた18世紀末～幕末期の遺構であることから、この遺物についてはSE107から出土した遺物であった可能性が極めて高いことが推定される。加えて、出土する石製羽口についても、前者の遺構からは、先端部にガラス質化した滓が大量に付着したもの及び、こうした先端部の破片が主に出土することに対し、後者の遺構からは、ほぼ完形状態で先端部の滓の付着の少ないものが出土している。おそらく、前者が鍛冶作業のものに対する出土状況を示すのに対して、後者が井戸祭祀等の直接的鍛冶作業を伴わない出土状況を示すものであるといえよう。但しこうした祭祀が行われる井戸等は、通常の遺跡においてはみることが出来ないことから、最低でも鍛冶職人には関係する施設の中の遺構で見られるようである。

こうした石製羽口の類例として真っ先に挙げられるのが、中世府内町及びその周辺における出土事例であろう。報告されている事例だけでも中世大友府内町第14次¹¹⁾、下郡遺跡群第106次¹²⁾、府内城・城下町第12次¹³⁾等の出土例がある。

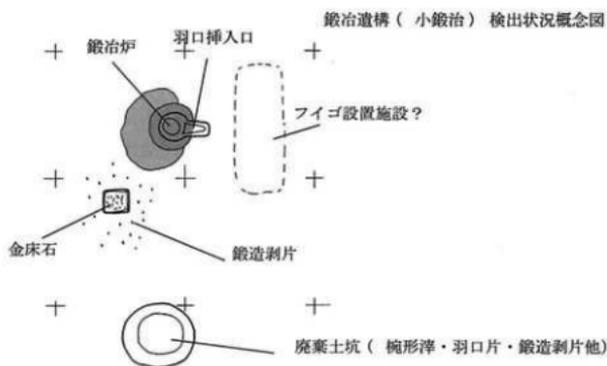
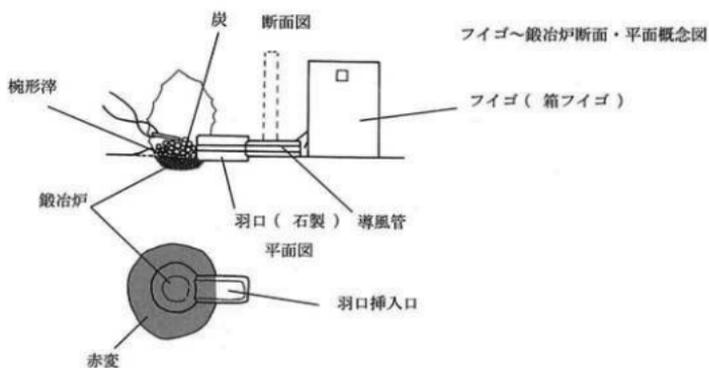
中世大友府内町第14次調査の出土事例は、SE250とした井戸からの出土となる。断面形態は面を有するが全体に円形を呈するもので、外径12.8cm、内径1.6cm、全長17.4cmを測る凝灰岩製の羽口である。羽口側に凹面加工が施され、全体に長さが短い。出土状況は、16世紀末に位置づけられる井戸の廃絶時埋土中から出土する。

下郡遺跡群第106次調査の出土事例は、SD004とした戦国時代の屋敷を囲む溝からの出土となる。断面形態は下面に平坦部をもつかまほこ形を呈するもので、外径13.8cm、内径2.4cm、全長25.0cmを測る凝灰岩製の羽口である。羽口側の凹面加工が施され、全体に長さが長い。出土状況は、16世紀末段階の屋敷の廃絶に際し溝の底部に羽口を埋置した状況となる。この下郡の地は大友氏との関係も深く、元々万寿寺領であったものが、万寿寺の焼失以後大友宗麟の領地となった。この下郡に入った関美作守が鍛冶と深く関与しており、この羽口の出土もこれらに関連するものとして報告されている。

府内城・城下町跡第12調査の出土事例は、SD201とした最下面の中世段階の遺構面で検出された溝からの出土である。前述した完形品とは違い、破片及び先端部に鉄滓が付いた状態での出土状況が報告されている。尚、破片となった羽口が多量の碗形鉄滓を伴って出土している点も注視される。この近世府内町第12調査地点は、近世府内町の南東隅部分で、中世府内町との重複部分に近い位置となり、この遺構が検出された遺構面は、基本的には中世大友府内町の関連遺跡と位置づけられている。

これらの出土事例をみてみると、まずその形態面で、中世大友府内町第14次のものと、下郡遺跡群第106次のものに長さの違いが見られる点については、前述した羽口の使用法に関わるもので、より短くなっている中世府内町のものがよく使われているという理解になろう。その出土状況については、井戸の廃絶時の埋土中からの出土や溝底に完形品が埋置された府内町及び下郡の事例に対し、府内城・城下町第12次における大量の碗形鉄滓に伴って破片が出土する状況が見られている。即ち前者が、井戸祭祀等の直接的鍛冶作業を伴わない（鍛冶職人には関係する）出土状況を示すもので、後者が直接の鍛冶作業に伴う廃棄物として認識できる。つまり、これらの事例は時間的な位置づけ以外は今回の鶴崎の事例とほぼ同じ状況であるといえよう。（※余談であるが、近年の中世大友府内町の出土事例が増加しているが、鍛冶職人の出張作業も想定されることから、全てを鍛冶職人の定住作業場（鍛冶屋町）と関連づけるべきではなく、今後大規模な廃棄施設等がその基準となるであろう。）

他県の出土事例としては、熊本県の宇土城跡・西岡台遺跡・無田遺跡・相良頼顕館跡¹⁴⁾宮崎県の都城市和田遺跡・日向市富高大王谷遺跡・延岡市稲葉崎宮田遺跡¹⁵⁾、福岡県北九州市小倉城Ⅰ区調査地点¹⁶⁾の調査事例が知られる。材質面では、凝灰岩製のものに加え砂岩系（宇土城・小倉城）のものが存在する。断面形態は、ほぼ鶴崎の事例と同じであるが、砂岩系のものについては、多角形を呈するような面を形成する場合が多い。こうした状況は、他の凝灰岩製の羽口の中にも面を有するものの存在が知られているが、基本的にはそれと同じ機能であると推定され、おそらくは羽口設置時の安定性を高める機能であると考えられる。更に複数の面を有するということは、それと同じ回数の使用も想定できるとも考えられる。時間的な位置づけは、詳細不明の宮崎県の資料を除く



第44図 鍛冶 (小鍛冶) 関連遺構概念図

と、全て中世後半～近世初頭に位置づけられる。出土状況及びその使用方法については、熊本資料は、鉄滓との共存関係から鍛冶に伴うものと言われている。小倉城の資料については、椀形鉄滓を伴う破片での出土であり、直接の作業に伴う廃棄物として位置づけとなる。(但し、周辺で検出された遺物は、鋳造関連のもので、この報告書においては鋳造関連作業の工程で使用された可能性を記している。)

この他民俗事例として、沖縄におけるニービと呼ばれる砂岩系の石を使った羽口の存在や、東南アジア(インドネシア諸島)にもやはり石を使用した羽口が存在する⁴⁾。こうした民俗事例の存在は、今回確認した豊後及び九州での出土事例が16世紀後半～17世紀初頭であることを考えた場合、東南アジアを介した中継貿易のルートを想起させる事例であり、興味を惹かれるところである。

最後に今回の鶴崎における石製羽口の出土意義については、近接する御作事所との関わりが想起される。大分県史によれば、寛保3年(1743)、安永3年(1774)、天保11年(1840)にそれぞれ波奈之丸の新造を行っていることが記されているが、今回確認された鍛冶関連遺構は、18世紀中頃の中で切合いを持って2時期存在している。即ち今回の遺構群が1740年代及び1770年代の2回の新造に関わっていた可能性が浮上るのである。もし、これらの鍛冶遺構が波奈之丸の造営に関わった鍛冶職人に関わるものであれば、造った製品はやはり「船釘」であったであろうし、その廃棄土坑の規模からもその生産量も相当量が想定可能である。こうした量産性の高い製品を製造する際に、耐火性が高い使用頻度にも耐えうる石製のフィゴ羽口が選択された可能性も考えられ、石羽口を使う鍛冶職人と造船の密接な関係をうかがわせる注目すべき現象であるといえよう。

以上、石製フィゴ羽口の位置づけから様々な問題が提示された。これらに加え、今回遺構の切合いが著しく不明であった、鍛冶炉本体やフィゴ設置施設・金床石・廃棄土坑等を含めた鍛冶(小鍛冶)の作業場全体としての遺構検出及びそうした中での石羽口の位置づけに関わる問題、九州での出土事例が増加する中、その他の地域における出土事例の確認の問題、沖縄・東南アジアの民俗事例との比較等の問題、そして、今回の18世紀中頃の出土事例と中世段階の出土事例の間を埋める事例の検索の問題等があげられる。今後これらの問題について、鶴崎周辺の調査成果や中世府内町及び周辺遺跡の調査成果、豊後地域以外の調査事例の追跡調査、古文書及び民俗事例の調査等を行い、更なる詳細な検討を加えたい。

参考文献

村上恭通1998『倭人と鉄の考古学』青木書店

注1 池道千太郎・上野淳也2003『大友府内6』大分市教育委員会

注2 坪根伸也・橋本幸次1999「下郡遺跡群第106次調査」区q・r-9地点『大分市埋蔵文化財年報 vol.10 1998年度』大分市教育委員会

注3 高島 豊2003『府内城・城下町跡第12次調査報告書』大分市教育委員会

注4 松本健郎1959『生産遺跡基本調査報告1』熊本県教育委員会

注5 中山光夫1997『北九州市小倉城跡出土鋳造遺物の金属学的調査』『小倉城跡2』北九州市教育委員会において、氏が石川恒太郎氏1959『日本古代鋼鉄の精錬遺跡に関する研究』角川書店からの引用で例示しているが、筆者が原著未確認の状態である。

注6 谷口俊治・川上秀秋1997『小倉城跡2』北九州市教育委員会

注7 朝岡康二1993『日本の鉄器文化～鍛冶屋の比較民俗学～』慶友社



1トレンチ西建物近景（西より）

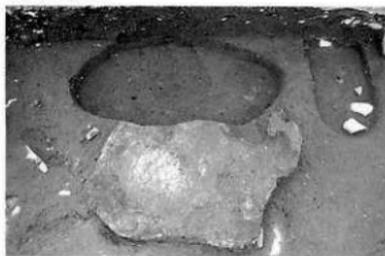


1トレンチ西建物近景（南より）



1トレンチ・2トレンチ東建物遠景（北より）

写真図版 2



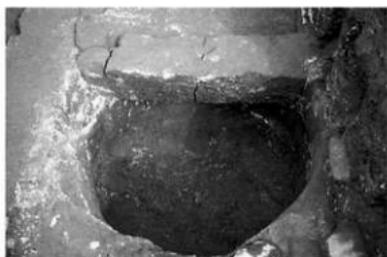
1. SK44全景



2. SX59全景



3. SK20遺物出土状況



4. SX28検出状況



5. SX28石除去状況



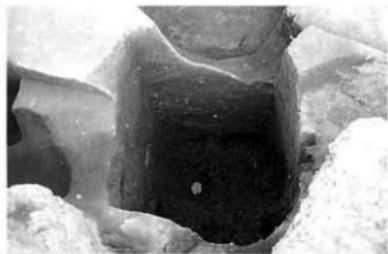
6. SX28漆喰除去状況



7. SE60全景



8. SK62土層断面



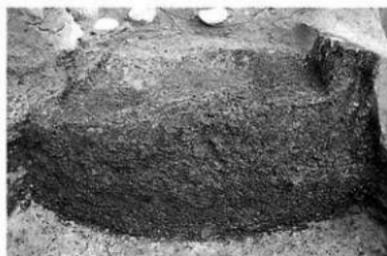
1. SK103全景



2. SK117全景



3. SK114全景



4. SK114土層断面



5. SK115全景



6. SK115土層断面

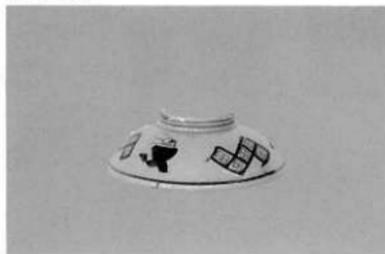


7. SX220全景



8. SE107全景

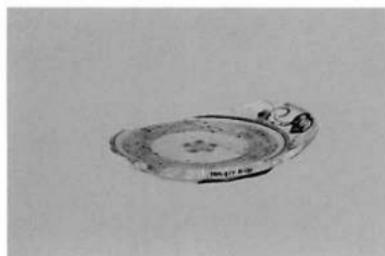
写真図版 4



1. 1T整地層43



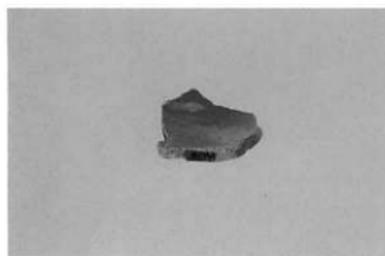
2. 1T整地層49



3. 1Tサブトレンチ131



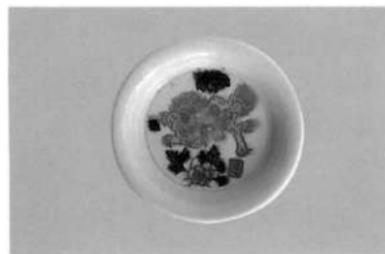
4. 1Tサブトレンチ42



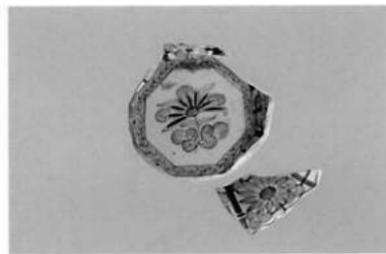
5. SK17-1



6. SK20-5



7. SX28-2



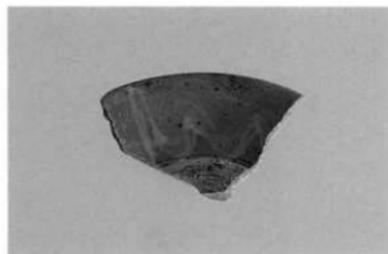
8. SK62-6



1. SX78-3



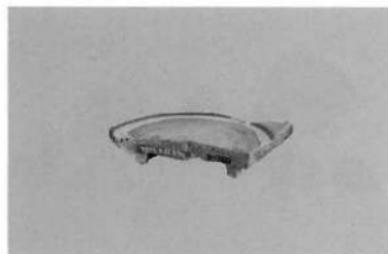
2. SK79-4



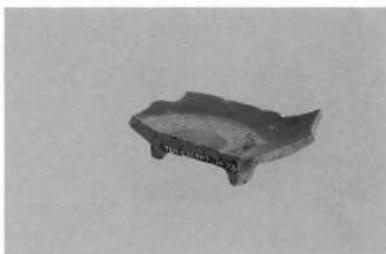
3. SK89-2



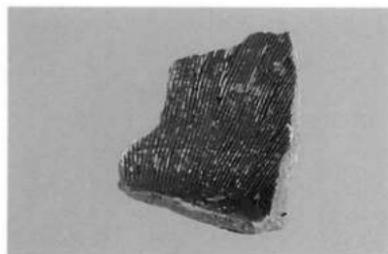
4. SX98-1



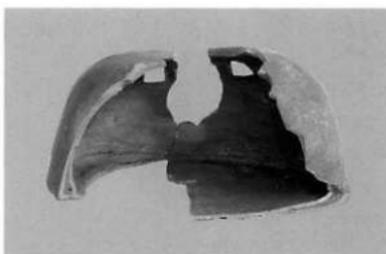
5. SK94-1



6. SK103-2

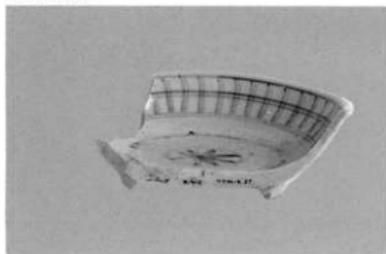


7. SK107-11



8. SX01-3

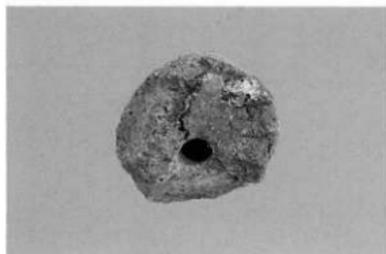
写真図版 6



1. 2T整地層-22



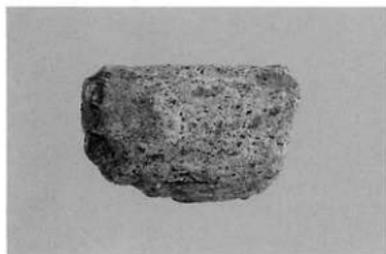
2. 2T整地層-29



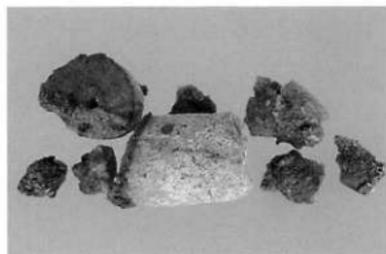
3. 2T整地層-35



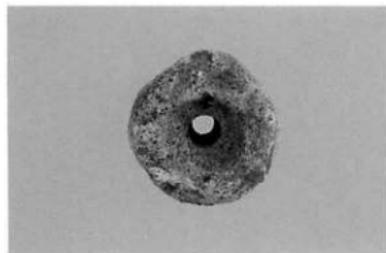
6. SK110-2



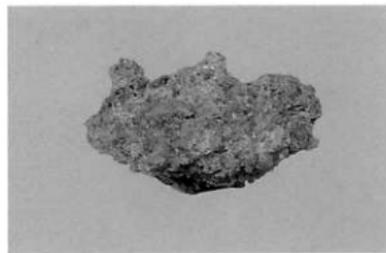
4. 2T整地層-35



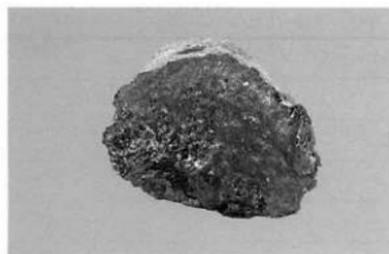
7. SK110出土フイゴ羽口



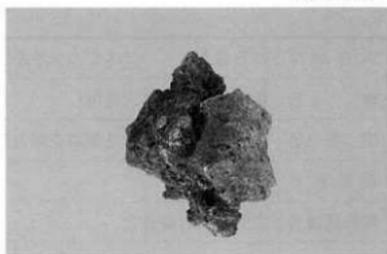
5. 2T整地層-35



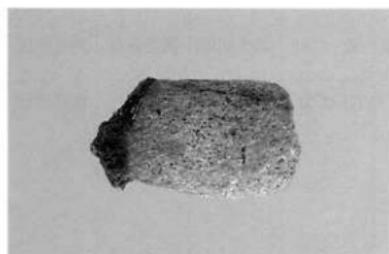
8. SK110出土椀形鉄滓



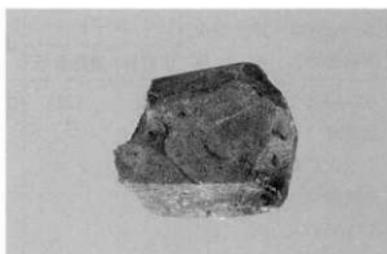
1. SK110-8



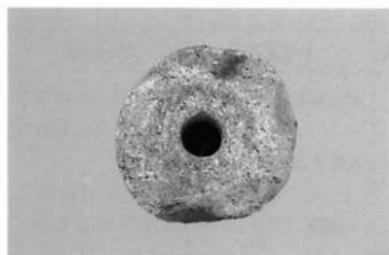
4. SK110-6



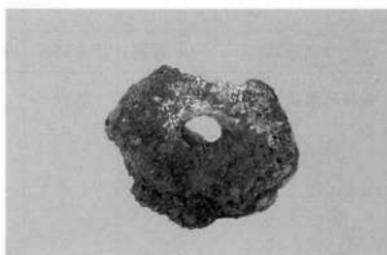
2. SK110-8



5. SK110-9



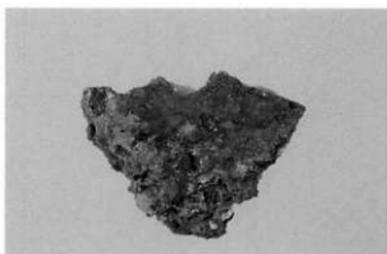
3. SK110-8



6. SK114-1



7. SK115-1



8. SK115-2

報 告 書 抄 録

ふりがな	つるさきまちいせきぐん (さんげんまち)							
書 名	鶴崎町遺跡群 (三軒町)							
副 書 名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第58集							
編 著 者 名	河野史郎							
編集機関名	大分市教育委員会							
所 在 地	〒870-0046 大分市荷揚町 2 番31号 TEL (097) 534-6111							
発行年月日	2005年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つるさきまち 鶴崎町 いせきぐん 遺跡群 (さんげんまち) (三軒町)	おおいたけん 大分県 おおいたし 大分市 ひがしつるさき3 東鶴崎3丁目 35・37~40 35・37~40	322	179	33°14'04"	131°41'53"	04.02.01 / 04.03.26	200㎡	病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鶴崎町遺跡群 (三軒町)	都市	近世	建物 井戸 土杭 鍛冶遺構	肥前陶磁器 瓦質土器 土師器 フイゴ羽口 椀形鉄滓		鶴崎町の中で伊予街道に沿った三軒町の調査。 18世紀中頃段階では、鍛冶屋(小鍛冶)の工房 18世紀後半～幕末にかけては短冊状地割りの町屋へ変遷する過程が確認された。		

鶴崎町遺跡群(三軒町)

～オアシス第一病院建設に伴う発掘調査報告書～

2005年3月

発行 大分市教育委員会
印刷 株式会社 明文堂印刷

